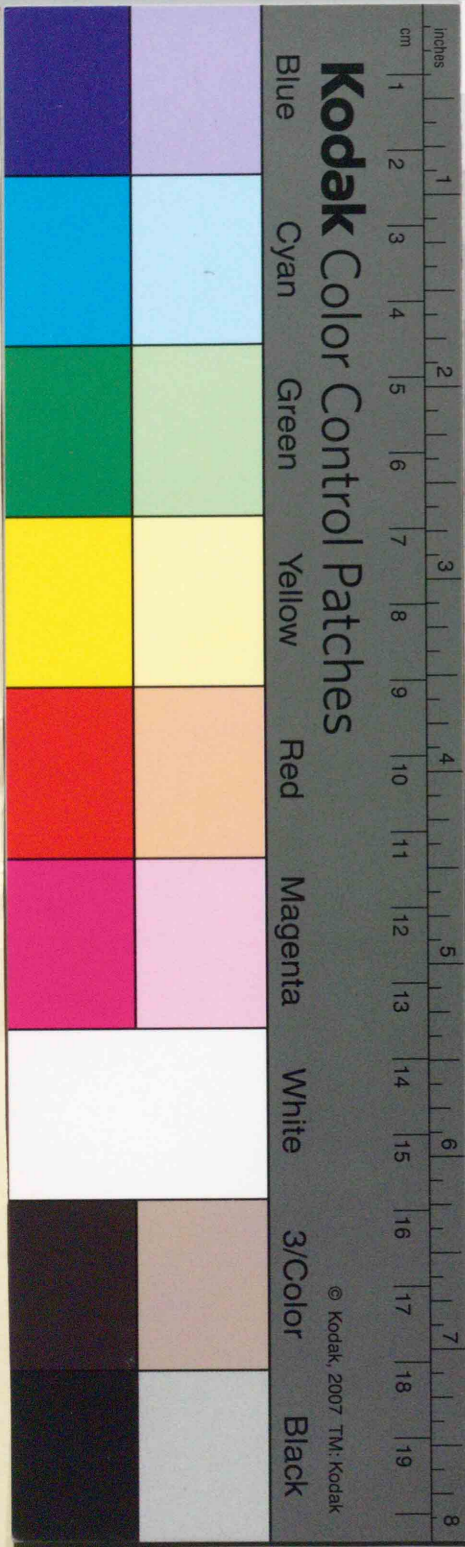


43416

教科書文庫

4
710
41-1941
20000 90699



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

© Kodak, 2007 TM: Kodak

C  
Y  
M

教科書文庫  
4  
710  
41-1941  
2000090699

中學  
維新圖畫の理論と實際  
實際篇 一



広島大学図書  
2000090699

天育振興會





中央図書館

資料室

4a  
710  
AB16

教科書文庫

4

710

41-1941

2000090699

維新圖畫の理論と實際  
實際篇



美育振興會

広島大学図書

2000090699





## 「維新圖畫」編纂の趣旨

1. 支那事變を契機として皇道日本の世界的建設が叫ばれつつある。これは東西の和親提携を實現し、世界永遠の福祉を確保せんがための皇國の理想で、所謂八紘一字の大精神の顯現に外ならない。しかしながら、この理想の遂行には容易ならざる努力が伴ふ。眞に舉國一致國家機構を總動員してこれに當らなければ、其の實現は期し得ないのである。
2. 教育はこの大理想に副ふて動かねばならない。即ち教育の理論及び方法の出發點は國家的觀念の養成であり、其の到達點は皇道日本の世界化であり、其の過程は日本精神を昂揚して舉國一致の實を擧げると共に、これを實踐に現して愈々國力の伸張を圖り皇運を扶翼し奉るやうに國民を導くことである。
3. この秋に際して圖畫教育上の力點はどこか。そこには國民的情操の涵養と、生産力の擴充と、生活の刷新とに獨自の使命が自覺される。即ち國家總動員の態勢を持して教育の理想を分擔する所以に外ならない。國民的情操は純情に育まれ、純情は美の教養から生れる。生産力の擴充は國力進展の動力で、これは創造と建設の教育に俟つこと多く、生活の刷新は衣食住の美的經濟的處理で、亦美と創造との教養に基調すること尠くない。

これが圖畫教育の眼目で、現在及び將來に於ける圖畫教育の方向を決定する據點であると共に、そこに指導上の方途を發見するのである。
4. 「維新圖畫」はこゝに呱呱の聲を擧げた。未曾有の時局下に於ける教育の重大性に鑑み、微力ながら本會も亦其の機構を



總動員してこれが編纂に當り、今これを公にすることを得たのである。

本書はこれを教科書と教師用書の二部に分けた。教科書は中學校用三冊、高等女學校用四冊で、固より之が編纂は如上圖畫教育の理想に基き、取材に排列にすべて國家的要求を具現したものである。尙本書がこの種教科書の多年の類型たる畫集式から脱して清新な様式を持つたことは特筆すべきであらう。

教師用書は理論及び實際の兩篇に分け、理論篇は全一冊貳百參拾八頁、實際篇は中學校用三冊、高等女學校用四冊、兩篇とも生徒用書の隨伴として之を編んだもので、一切の問題を解決する圖畫教育百科辭典たると共に教科書内容の解説敷衍、知識的教材の提供、其の他苟も教授上必要とするあらゆる參考資料を集録した圖畫教授の一大要覽である。

5. 聖戰下昭和十四年の曙光を浴びて「維新圖畫」は生れた。新らしき理想を盛り、躍進日本の姿を映して世に出たのである。本會にとつては眞に彫身鏤骨の作品であり、正に心血の結晶であるが、今や遠く故國を離れて朔北の寒風に戦ふ皇軍の將兵を思へば、我等の勞苦猶之に及ばざること遠いのを痛感する。

本會も亦斯道の戰士たるべく更に一層の精進を累ね研覈を積み愈々奉公の誠をいたしたく、希くは本書について實際家各位の批判と高教とを賜らんことを。

昭和十四年一月

美育振興會

## 卷一 目次

1 角なもの	説明用	
2 書物 その一	説明用	
3 書物 その二		木下孝則
4 圓いもの	説明用	
5 鐘詰		島野重之
6 盆と夏蜜柑	参考用	松村巽
7 燕子花 その一	説明用	常岡文龜
8 燕子花 その二		常岡文龜
9 幾何形體と器物	説明用	
10 スケッチ箱		齋藤素巖
11 瓶とプロッター		石井柏亭
12 バナナ		板倉賛治
13 模様 of 骨式		
14 紐による模様		板倉賛治
15 幾何的模様その他 その一		
16 幾何的模様その他 その二		鈴木豊次郎
17 梨と葡萄	参考用	清水良雄
18 葱と茄子	参考用	狩野探道
19 ハイライトの表現	説明用	
20 壺		松原郁二
21 柿		寺内萬治郎
22 スープ鍋とトマト	参考用	伊原宇三郎
23 便化の練習		
24 カットと便化		中田満雄
25 紋所とステンシル		
26 當嵌模様		杉浦非水
27 椿 その一	説明用	小泉勝衛
28 椿 その二		小泉勝衛
29 連続模様 その一		
30 連続模様 その二		山形駒太郎
31 招待券その他		越田喜作
教授指導の要項補遺		



# 1 角なもの (説明用)

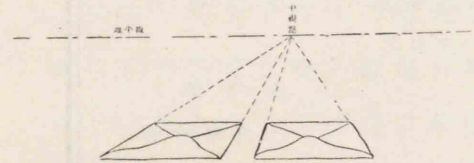
## 要旨

形體描寫の基本となるべき所謂「角なもの」について、視點の位置による形の變化、明暗の關係及び描法等の基礎的知識を與へようとするのが眼目である。

角なものゝ實例としてこゝには角封筒とインキ壺を包む紙箱とを擧げた。

## 説明

1. 上段の二圖は何れも白い角封筒を示してゐる。右の圖は正面に置いてあるところであり、左の圖はやく左に寄つた位置を示してゐる。兩圖とも封筒の裏が出てゐるのは、紙の織目を見せて封筒の特徴を出さうとしたためである。
2. 封筒の形は向ふにゆくに従つて狭くなつて見える。これは遠近による形の變化で、左右



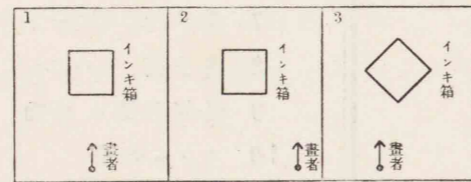
の兩邊は段々接近してゆくが、この兩邊を延長してみると遂には一點に交ることになる。この點を中視點といふ。いつも畫者の目の高さの真正面にあると假定する點である。

3. 中段の二圖の中、右は正面にあるインキの箱、左は左側にあるインキの箱である。何れも其の上にかいてある角封筒の原理の應用である。この場合右の圖に於ては角封筒の六面中、正面と上端面との二面しか見えないが、左の圖に於ては正面、右側面、上端面の三面が見える。奥行が段々狭まつて見えることは角封

筒の場合と同様である。

4. 下段の左圖は畫者のほぼ正面に置いて三面を見せたインキの箱で、置き方の角度を前の場合と變へたのである。

透視圖法ではこのやうな位置を成角透視の位置、中段兩圖(1.2)の如き場合を平行透視の位置といふ。



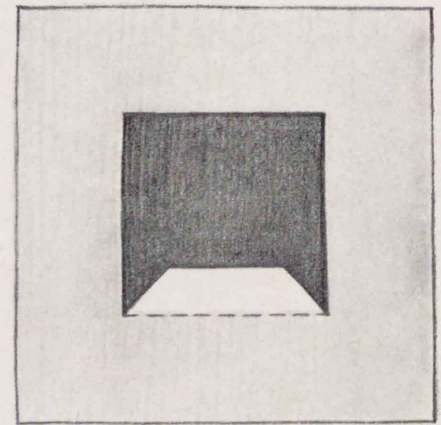
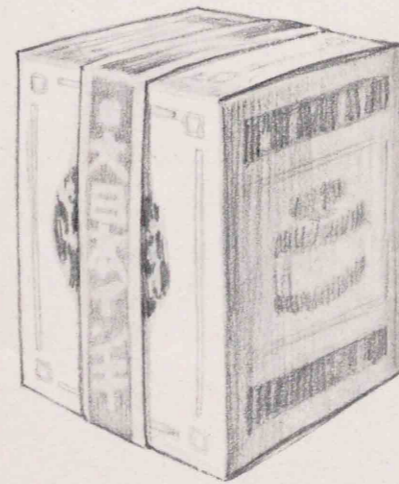
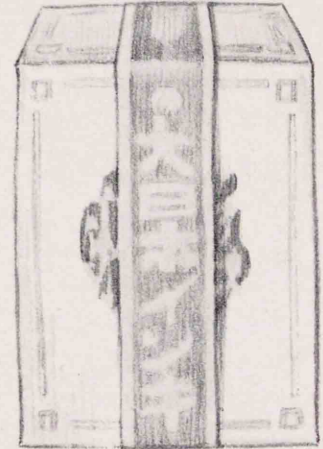
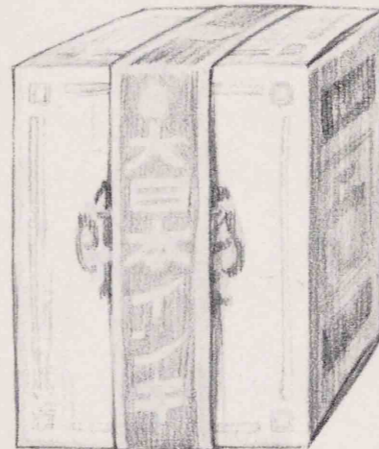
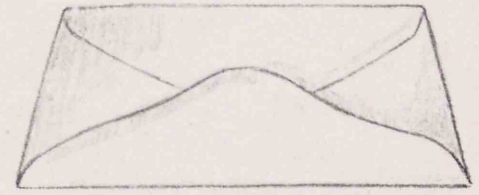
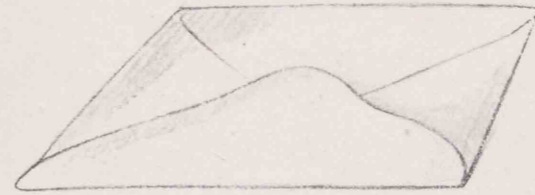
5. 下段の右圖は厚紙又は畫用紙の中央に正正方形を描きその三邊を切り離し、残つた一邊を折目としてその正正方形を奥の方へ折り曲げたもので、之によれば角なものゝ遠近による形の變化を容易に理解させることが出来る。
6. 明暗は光線の來る方向によつて定まる。インキの箱の場合は何れも左正面から投射してゐるから明るさは正面、上端面の順、右側面は陰になつてゐる。明るさも暗さも畫者の目に近い部分が一番強く他は順次弱くなる。

## 注意

1. 本教材は説明用のものであるが、場合によつては描かせてもよい。説明の時間を一時間取つてもよいが、特に時間を設けず適宜の時間にこれを利用することも出来る。
2. 遠近によつて形が變化して見えることは諸物の觀察によつて、これを實驗させるのがよい。又これを誤なく描寫することが形體描寫の基本であることを充分に理解させる。

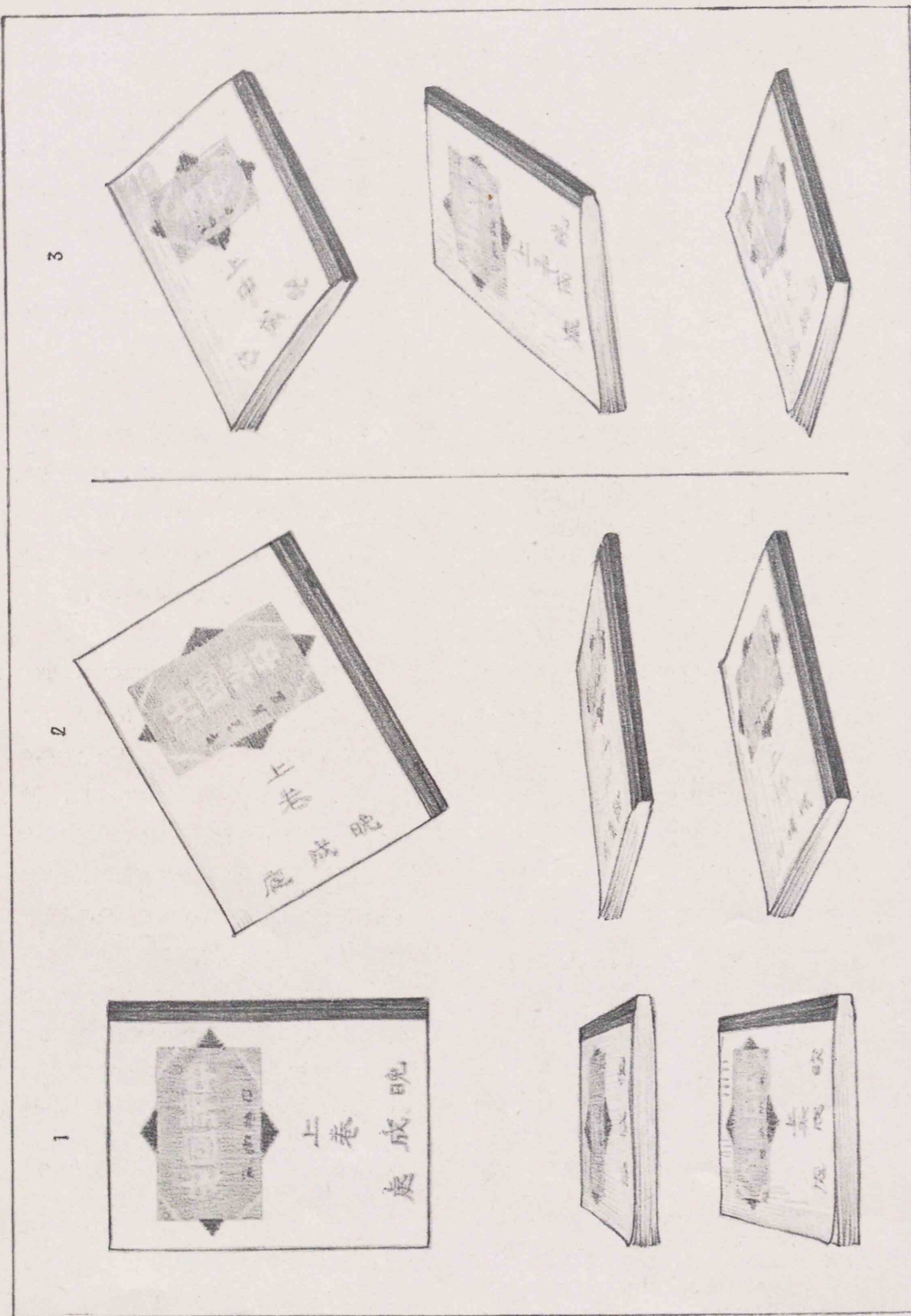
準備 角封筒、インキの箱、幾何形體模型、矩形板と正四角板、説明用ボール紙模型其他

参照 明暗及び表現に就ては理論篇60頁、封筒及びインキに就ては卷末詳解1頁



# 1 角なもの (説明用)





1・2は正しい形、3は不正な形である。

2 書物 その一 (説明用)

## 2 書物 その一 (説明用)

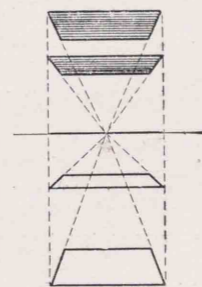
### 要旨

第三課に於て書物を描かせようとするための豫備教材として擧げたもので、角なもの描寫に當つて一般的に陥り易き寫形上の缺點を示して注意を與へ、且つ見る位置によつて、形が變化することを充分理解せしめる。

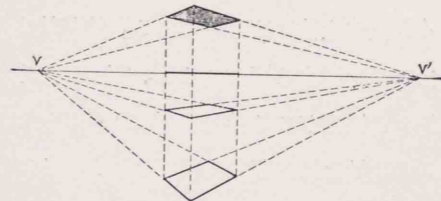
### 説明

1. 上左の二圖は書物の正しい平面圖で、1は平行透視、2は成角透視の位置に置いてある。

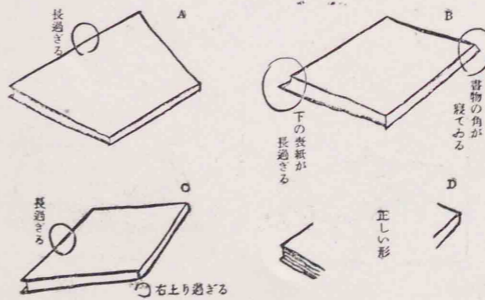
その下に描いた各々二冊の書物は何れも正しく寫生された形で、寫生する場合の目の位置によつて表紙面に廣狹の差が出来ることは圖の通りである。



挿圖はこれを透視圖法によつて示したものである。



右方の圖は何れも不正な寫形を例示したもので、その不可な部分は次の通りである。DはBの兩隅を訂正したところである。



3. こゝに示した不正な寫形は何れも最も誤り易い場合の例である。Aは遠近法の間違が多く、Bは全く安定感がなく、Cは立體感が無い。表紙に描かれた模様や文字も方向がまちまちで全く表紙から離れてゐる。
4. 物の高低遠近は、寫形の上に大きな影響がある。

### 注意

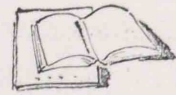
1. これは説明教材ではあるが、特別の時間を設けて取扱ふほどのことはない。第三課書物その二の取扱に際して附帶して説明する。
2. 目の高さや地平線と物の位置、及びその表はし方については確實な理解を持たせることが必要である。
3. そのためには板又は厚紙で表裏の色を變へたものをつくり、これを生徒に觀察せしめて形の變化を實驗させるがよい。即ち目の高さに水平に置かれてゐる場合にはこの板が一直線にあつて見え、位置が下へ下るに従つて板の表面が段々廣く見えるやうになり、又目の高さから板を上へ上げてゆくと、板の裏面が見えはじめ、段々廣く見えるやうになる。
4. これは矩形の相對する二邊が段々せまくなつて、その延長が必ず地平線の上で交はることと共に形體描寫上の重要な定則である。

準備 説明用に供するための洋書、なるべく大判のもの一冊、矩形の板又は厚紙

参照 書籍の装幀、種別、大き等は巻末詳解2頁



### 3 書物 その二



#### 要旨

書物二冊を寫生させて、直方體に屬するものの遠近による形の變化を觀察させ且つ鉛筆によるこれが表現力を養ふ。

#### 説明と鑑賞

1. この圖は大小二冊の書物を重ねたもので、下を大きくし上を小さくしてゐるのは構圖上に安定感を考慮したもの、又上下の書物を異つた向に置き且つその厚さを變へたのは組合せの上に變化を見せたのである。
2. 上の本は堅い一枚の表紙で全體を被ひ、背のところだけ柔かくなつてゐる。下の本は表紙がやや薄く、背にはクロスが貼られてゐる。これ等の構造や質感がこの簡素な鉛筆畫の中に極めてよく表現されてゐる。
3. 左上方から柔かい光がこの書物を照してゐる。従つて二冊とも背が暗くなり且つ弱い影を表紙の上と卓上とに落してゐる。色彩は現れてゐない。しかし鉛筆による調子の濃淡は色彩をも考へて描いてゐる筈である。
4. 下の書物の背に貼つたクロスが光を反射して見えることや、鉛筆の使ひ方に強弱緩急の違いがあつて實物を髣髴させることは、綿密な觀察と眞面目な描寫との結果で、我等の特に學ぶべき點である。
5. 木下孝則氏 洋畫家、東京帝大文科出身、一水會會員。(詳細は卷末3頁)

#### 指導

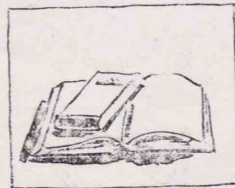
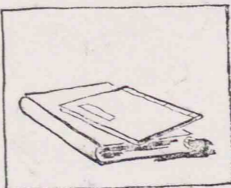
1. モデルを生徒各自の工夫によつて配置せしめ、その特性、形狀、色彩、明暗を觀察させる。

### 木下孝則

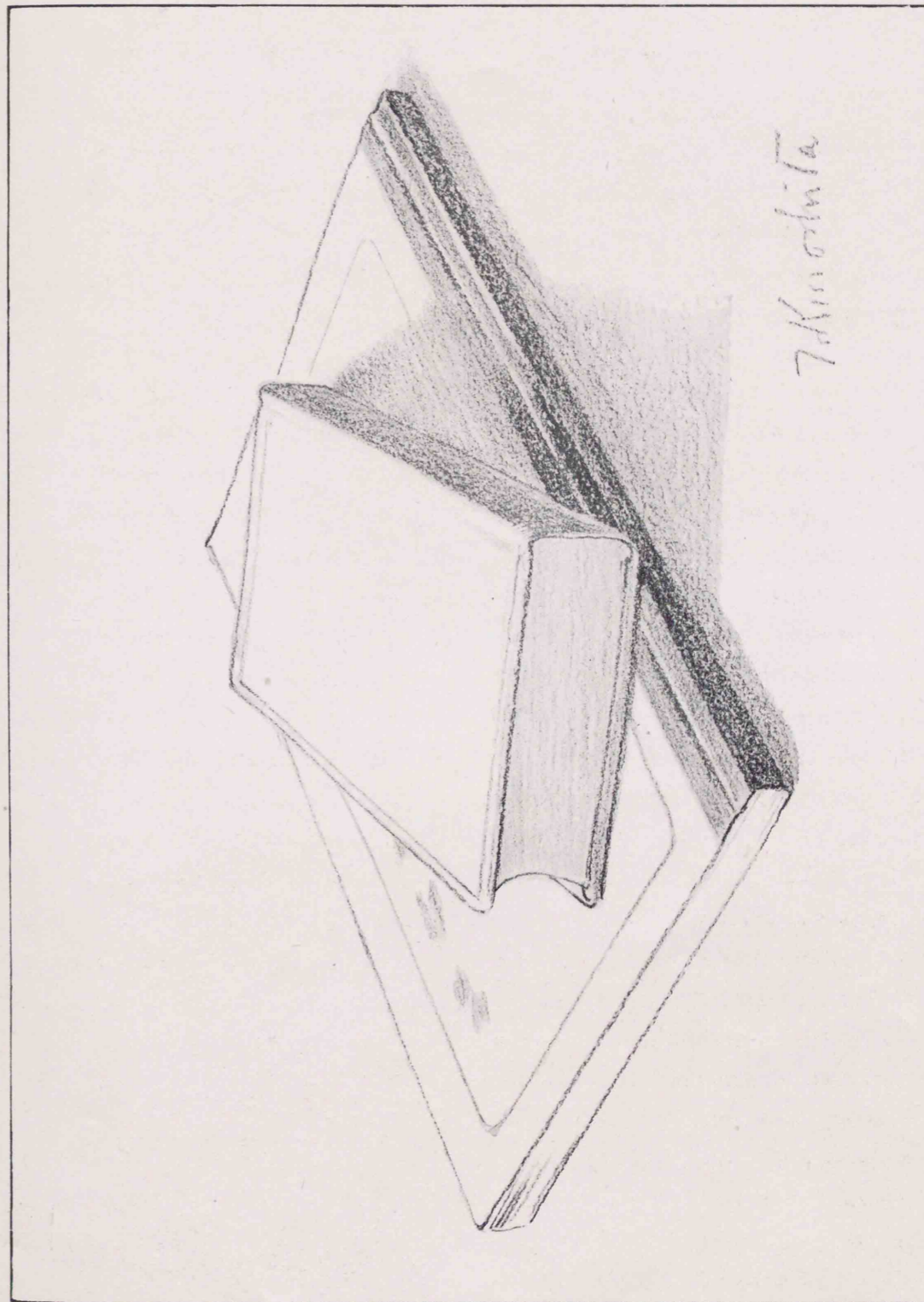
2. 構圖を考へ、位置を決定し、輪廓をとり、形を訂正しつゝ線書をさせる。輪廓には鉛筆を軽く用ゐ、本描には總じて強く使ふ。
3. 線書は大切な仕事である。モデルの質感を出すやうに、線の強弱、緩急、濃淡を工夫させる。
4. 線書がすんでから濃淡をつけさせる。それには色彩、陰影の調子をよく考へさせる。
5. 鉛筆で調子をつけるには線でかく場合と平塗にする場合とがある。その何れでもよく又併用してもよいが、筆致が餘りうるさくなくてはいけない。光る程強くかくのもよくない。

#### 注意

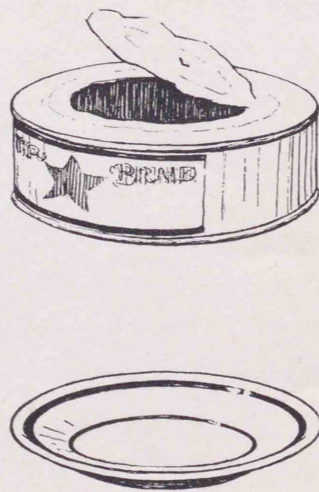
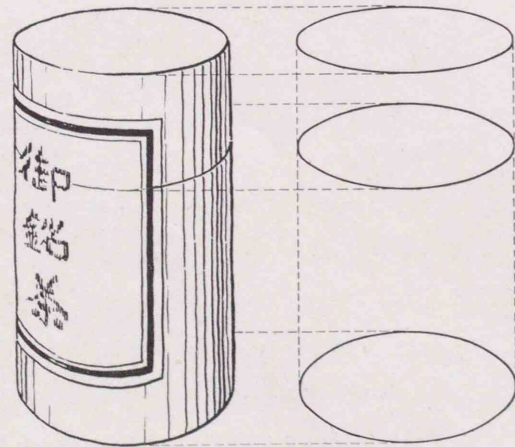
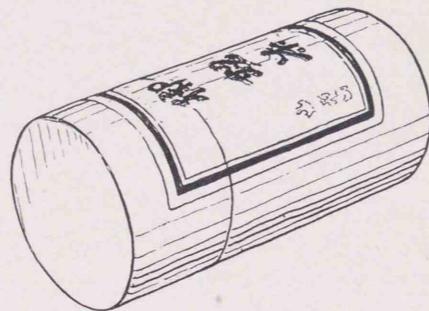
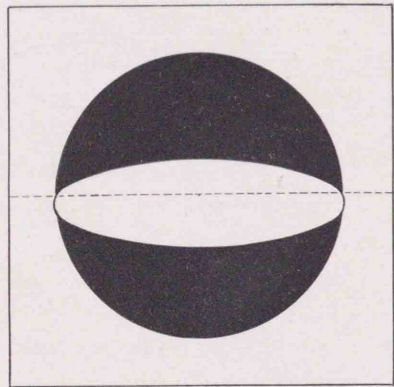
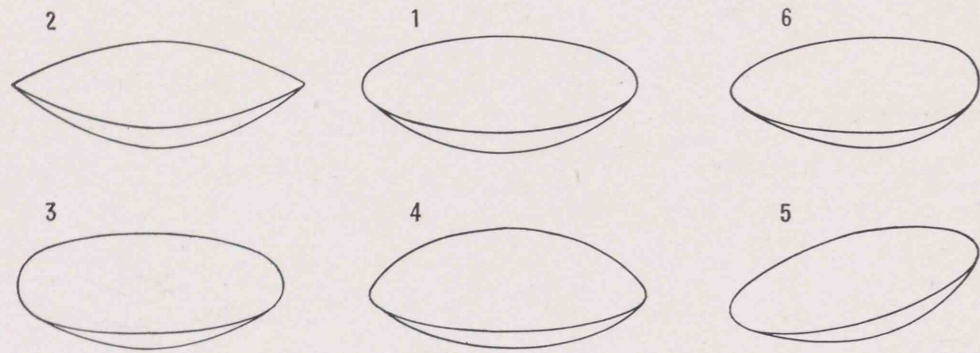
1. 第一課、第二課の教材と聯絡し形の正確さに充分注意を拂ふやう、又自分の形の不正な場合にこれをよく訂正するやう指導する。
2. 鉛筆は筆記用のHBでは稍々硬い。3Bか4B位が生徒には好適である。餘り軟い鉛筆は畫面を汚す心配があるし、調子が黒くなり過ぎる缺點がある。紙は白色の畫用紙がよい。
3. 本教材を二時間で完了しようとするには餘り細密な描寫は出來難い。簡素で、しかも、要領のよい作品をつくらせることを念とする。



準備 書物を生徒各自に用意せしめる。  
 参照 卷末3頁、理論篇60頁  
 参考 カット及び下圖は各種の構圖







1は正しい形、2・3・4・5・6は不正な形、その他は圓の變化である。

4 圓いもの (説明用)

4 圓いもの (説明用)

要旨

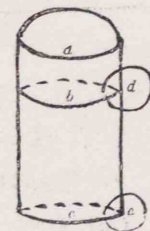
形體描寫の基本となるべき「圓いもの」について、視點の位置による形の變化、明暗の關係及び描法等の基礎的知識を與へようとするのが眼目である。

圓いもの實例として、こゝには茶筒、空罐、皿をあげてある。

説明

1. 生徒に一枚の皿の形を描かせて見ると、上段の六圖のうち何れかに似寄りのものが出来よう。この圖は中央の1が正しく、他の2より6までは皆不正である。
2. 下段左の圖は茶筒によつて圓錐の形及び明暗を示したものである。この圖で特に注意を要することは、上端、下端の兩面及び蓋と實との接目から横斷した面とが、各々廣さが違ふことで、これは畫者の目の位置に關係するのである。
3. 上端面、途中の横斷面、下端面は夫々橢圓形をなすが、その橢圓は上中下の三面の順に短徑が長くなつて來る。即ち畫者の目から遠くなる程廣く見え、橢圓周のカーブは上から順々に多くなる。このことは描畫上大切なことである。
4. それと共に下端面(底面)の兩端が圓くなることも注意を要する。その理由は橢圓の形を考へてみればすぐ分るであらう。

右の圖は茶筒の不正な寫生例である。a、b、eのカーブも誤つてをり、又d、eも誤である。

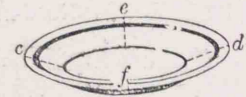


5. 中段右の茶筒は全く同様の理由によつて、上端面の橢圓周より下端面の橢圓周の方が強いカーブを示してゐる。

6. 下段右上は空罐、右下は皿である。各部の廣狹關係は次に示す通りである。



右圖 a と b は等しく、下圖 c と d は等しくて廣く、e は廣さこれに次ぎ、f は最も狭い。



7. 中央左の圖は紙の中央に圓を切抜きこの圓を傾斜させて形の變化を示したものである
8. この圖はペンで畫いてある、明暗などペンを縦と横とに使つて調子をつけてある。

**ペン畫** ペン畫は各種のペンを以て畫く方法で、畫用ペンとしては鐵ペンの外、筆ペンや驚ペンがある。ペンの使用は近時非常に多くなつたから、これを描畫に利用出来れば大變便利である。

現在雜誌等の挿繪畫にはペンを使用してゐるものが頗る多い。

注意

1. 本教材は説明用のものであるが、特に説明の時間を設けず、第五課に附帶して取扱ふことを可とする。
2. 形の變化については、實驗によつて充分理解せしむるがよい。又第一課の「角なもの」とも聯絡の必要がある。

**準備** 茶筒その他これに類するもの、空罐、皿及び厚紙で作つた説明板等



要 旨

罐詰と罐切とを寫生させて、眞埒に屬するものの形を觀察させ、鉛筆淡彩によるこれが表現力を養ふ。

説明と鑑賞

1. この圖は罐詰と罐切とを取り合せよく配置したもので、罐詰は立つて居り罐切は横はつてゐる。大きさに大小の變化があり、置き方には親しみが出てゐて、落ちついた構圖である。
2. 罐の上端面の曲線と帯模様の上下の曲線及び底面の曲線との間には順次その曲りが多くなつてゐるのが見える。視點が上方にあるからである。

又罐の上端面にある同心楕圓の變化、罐の略々中央につけられた帯模様の各單位の變化についても注意して見る方がよい。

3. 光は左上稍々前方から來てゐる。明部は左方にあり暗部は右方にある。上端面に光が反射してゐるところがあり、又罐の右の端にも反射光線による明部が見える。これによつて金屬の物質感を出してゐる。

罐切は木製の柄の先に刃物をつけたものである。木と鐵との部分は鉛筆の使ひ方に差別をつけて質感の表現に留意してゐる。

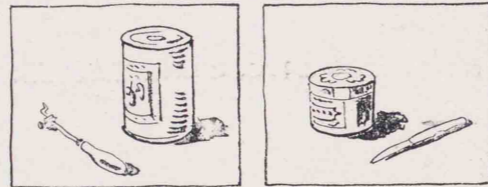
4. 罐の陰は鉛筆を縦横に重ねて居り、罐切及び兩方の影、その他は鉛筆を平行に使つてゐる。色彩は所謂淡彩で各部共殆ど輕快な一度塗に近い。

眞面目な描寫であつて、生徒の寫生參考として好適な作品である。

5. 島野重之氏 洋畫家、上社會會員、文展出品、特選、昭和洋畫獎勵賞受賞。(詳細は卷末5頁)

指 導

1. 生徒各自の工夫によつてモデルを適當な構圖に配置せしめ、その特性、形狀、色彩、明暗を觀察させる。(下圖は構圖の參考)



2. 紙上に位置を考へ配置を決定し、下描から本描をさせる。鉛筆の使ひ方については第三課書物の場合と同様である。
3. 時間の都合で鉛筆畫として仕上げしめるもよい。
4. 淡彩の場合と雖も鉛筆畫として完全な出来上りが必要である。その上に軽く着色する。着色の場合は筆にたつぷりと繪具を含ませ、一つの面積は一と筆で塗るやうにさせる。色彩の濁らぬやうに注意する。
5. 光澤又は反射のある部分はその調子に注意して、表現の工夫をさせる。

注 意

1. 第四課の教材と聯絡し、正確な形を描かせることを眼目として指導する。
2. 本教材は二時間完結であるから困難な構圖は不適當である。
3. 罐詰や罐切はどこ家庭にもあるから生徒各自にこれを用意せしめる。
4. 罐詰がなければこれに類するものでよい。海苔の瓶とスプーン、茶筒と茶匙その他のものを適宜に用意せしめる。

準備 罐詰類、罐切その他

参照 卷末 5 頁、理論篇 37 頁、48 頁





6 盆と夏蜜柑 (参考用) 松村 巽

要旨



盆と果物とを寫生させて圓及び球に屬するもの組合せと描寫との力を養ふ。鉛筆淡彩を以て表現させる。

説明と鑑賞

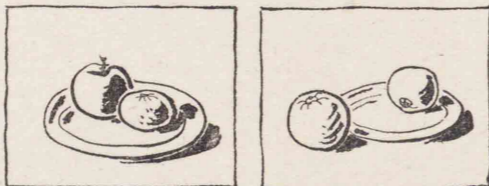
1. この圖は盆の上に夏蜜柑とネーブルとを載せたもので、蜜柑に大小があり、組合せがよく、三角形の安定な構圖である。しかも、暖かい類似色を以て構成されてをり、愉快な色感と落つた實在感とを與へる。
2. 表現は手軽い鉛筆描寫の上に、やや濃厚な着色をしてをり、殆ど水彩畫に近い、然し單純な描き方である。
3. 光線は右上方から來てゐて、影は左下に落ち、ハイライトは蜜柑及び盆の縁に塗り残されてゐる。しかし、ハイライトに就ては第十八課壺の教授の際充分説明する。
4. 盆は刳盆で、眞中は素地の儘、縁は漆塗であるから光澤が強い。
5. 松村 巽氏 洋畫家、文展無鑑査、靜物作家として著名。(詳細は卷末6頁)

指導

1. 果物や盆は教室內數個所のモデル臺上にこれを置いてやり、生徒夫々の位置から寫生せしめる。餘り遠いところから見たり、又前の生徒の體が邪魔になつたりするやうな場合は、生徒の位置を變へてやる。
2. 本圖の光線は右から來てゐるが、實際寫生せしめる場合にはこの通りでなくてもよい。場合々々に應じて適宜にすべきである。

又生徒の位置の關係で必ずしも全生徒が同じやうな光線で描くとは限らないが、逆光線のために全面暗くなるとか、或は正面光線のために全面明るくなるやうなことはこの場合避けた方がよい。

(挿圖及びカットは参考構圖)



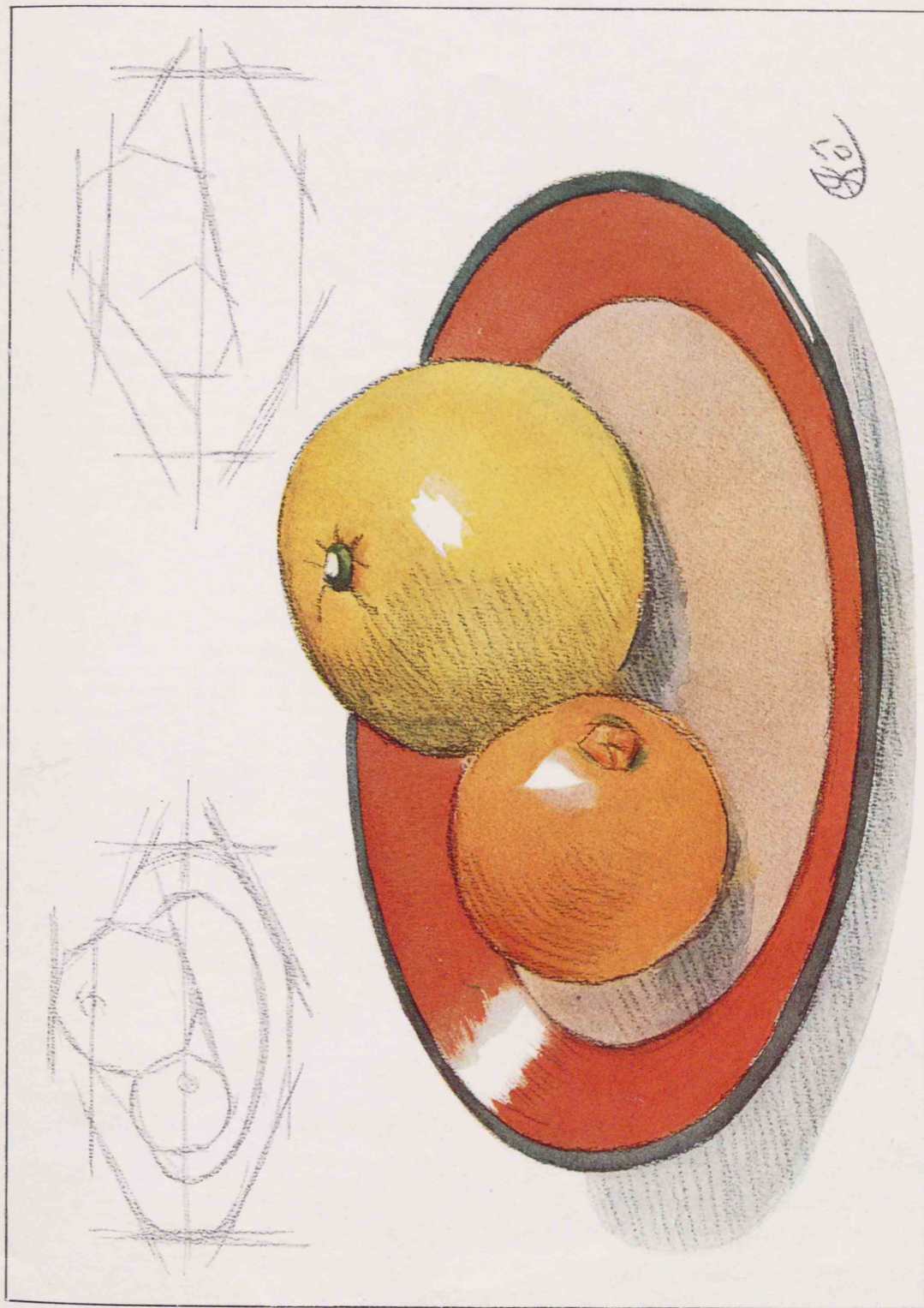
3. 圖の左右上段にかいてあるのは輪廓のとり方である。輪廓は餘り硬くない鉛筆を軽く使つて、直線を以て大體の形から始める。直線から曲線になり、大體から細部に及んで下描を完成する。線描及び調子のつけ方は前に述べた通りである。
4. 蜜柑類の圓さを出すためには、明暗をよく觀察してその陰影の表現に注意することである。又盆の圓さを出すことが本課の寫生に於ては最も難かしい點で、充分な觀察の下に適確な形をかくことを念とさせたい。第四課、第五課の知識について問答する。

注意

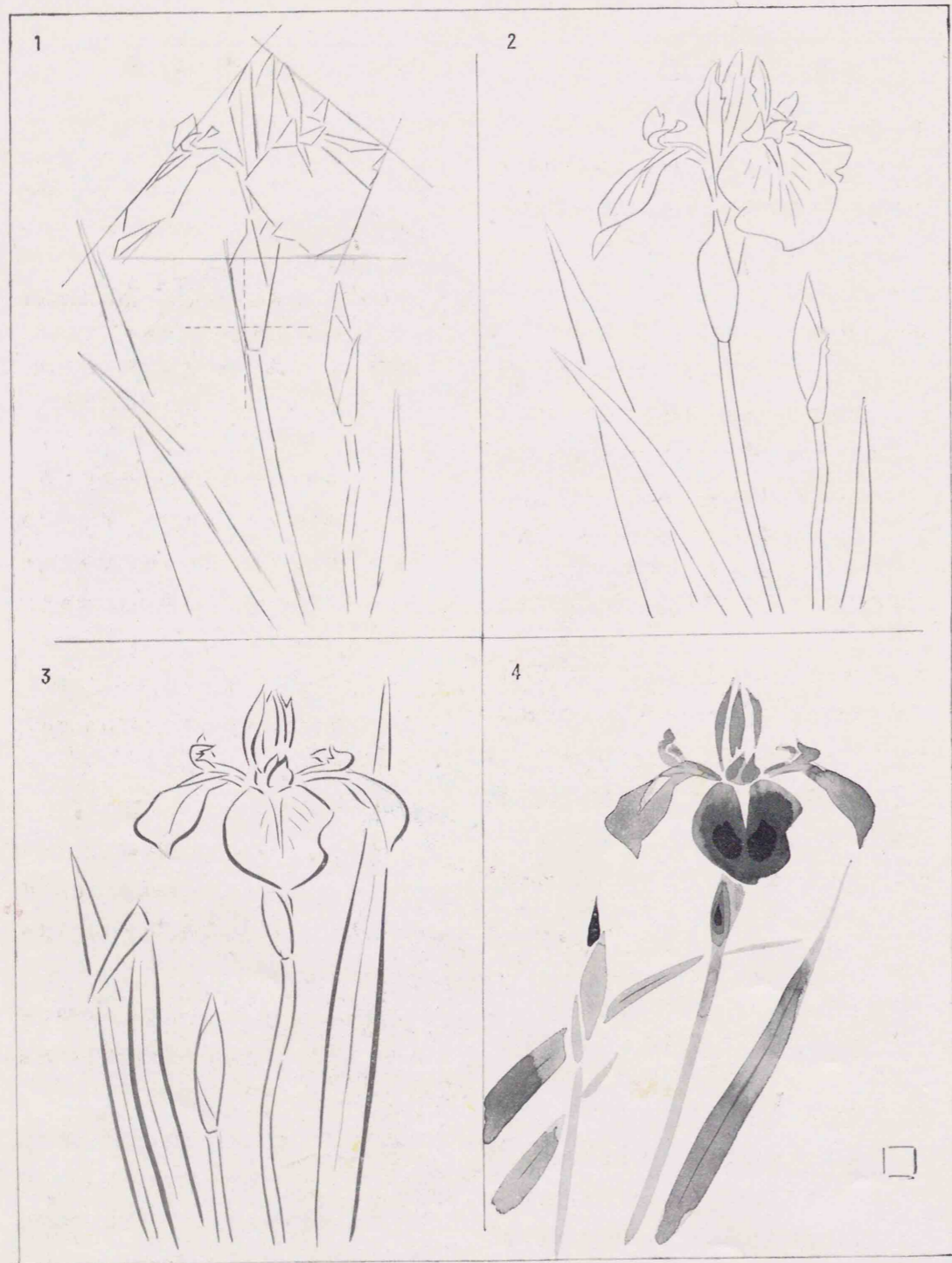
1. 第四課、第五課と聯絡して、正確な形を描かしめることを眼目として指導する。特に盆の形は描きにくいものであるから個別的に注意を與へたい。
2. 繪具の使用については、水繪具の性質に順應した明澄な筆法で描くことを注意する。

小學校時代の夫々の癖があつて、ともすれば本格的な水彩描法を心得ぬ生徒があるから、水繪具の使用法についての概念を正し、基礎的な扱ひ方を指導する。色が混濁することや、不透明になることを避けしめる。

準備 蜜柑類、盆  
参照 卷末6頁、理論篇32,37,50頁







●上圖は毛筆畫の描き方及びその下圖を示したものである。1は輪廓の取り方、2は鉛筆下圖、3は毛筆線畫、4は毛筆沒骨(つけたて)である。●この毛筆の抑揚ある線描と沒骨の表現とは日本畫独自の特色と稱すべきものである。

7 燕子花 その一 (説明用) 常岡文龜

要旨

右頁の「かきつばた」と對向して毛筆畫の描き方順序と描法の種類とを示した説明教材である。次課と聯絡をとりつつ毛筆畫の描法について理解せしめようとする。

説明と鑑賞

1. 毛筆畫といふのは毛筆を以て描く繪畫の意で、廣義に解すれば、油繪も水彩畫も日本畫も皆これに屬するが、普通は狹義に用ひて日本畫的描法による繪畫を指してゐる。
2. 毛筆畫は我國に於ける在來の描法で、其の發達過程には長い歴史と、數多い名作品と、著名な畫家とを持つてをり、すぐれた描法とされてゐる。
3. 圖例は燕子花の寫生によつて、毛筆畫の描き方順序を示したものである。1は下圖輪廓の取り方である。鉛筆を軽く使つたものである。鉛筆畫又は水彩畫の下圖の順序と少しも變りはない。
4. 2は下圖の出來上りである。餘分の線は消しゴムで消し取る。そのために鉛筆の下圖はあまり強かいてはいけない。鉛筆もあまり硬くないのがよい。  
從來は木炭(やきふで)で下圖を取ることが多かつたが、最近では小畫面のものは殆ど鉛筆下繪と限られてゐる。大畫面は木炭を用ひる。
5. 3は毛筆の線畫である。1及び2に示したものと別な構圖である。花は正面向、葉も蕾も他と異つてゐる。これは鉛筆下繪を辿つて毛筆で線を入れたものである。この生氣ある線描の美事さ。線描だけの繪を白描といふ。筆は削用を用ひてゐる。

線描がすめば着色をする。次課は着色の例

であるから、着色のことはそこで述べる。

6. 4は沒骨描法によつたものである。普通に附立といふ描き方である。線描によつて物の輪廓をとることなしに、直接墨や繪具で肉太に描く方法をいふ。

毛筆畫では、沒骨法と勾勒法との二様の描法がある。勾勒法は線描着色の方法である。

圖例は墨一色の濃淡によつて燕子花を描いたもの、圖の右下にある□は落款の位置を示してゐる。用筆は附立筆。

7. ここに載せた四圖共、用紙は竹紙である。畫箋紙の裏打、糝水引を用ひた。糝水引は墨や繪具が散らぬため、裏打は紙に厚みを持たせるための處置である。原畫の紙の大きさは一尺二寸五分に一尺七寸。

8. 毛筆畫では筆力、筆法を重んずる。殊に抑揚ある描線と沒骨表現の手法とは日本畫独自の特色と稱すべきものである。

注意

1. 本課に於ける1・2・3の三圖を経て右頁の燕子花が出來上るといふのが線描着色寫生の順序である。4は別の描法例として参考に載せたものである。
2. 本課は説明教材であるから特に一時間を配當しない。次課に於ける描寫に附帶して取扱はれたい。
3. 専門的の日本畫に於ては傳統的の筆法があつてこれを會得するには相當の時日を要するが、教育上に取扱ふところの毛筆畫では鉛筆畫及び水彩畫の氣持を多分に取入れてよい。

準備 日本畫各派の描法實例、毛筆畫に於ける花鳥寫生作品等

参照 卷末7頁、理論篇49頁



## 要旨

「かきつばた」を寫生せしめて毛筆線描着色による表現の力を養ひ、且つ日本畫の趣味に長じ理解を増さしむることを眼目とする。

## 説明と鑑賞

1. 燕子花を毛筆によつて寫生したもので、初め墨によつて線描をし、これに彩色したものである。線には抑揚があつて生々とした姿態が如實に寫されて居り、しかも素直な筆法で、これに美しい彩色が施され、まことに上品な溫和な感じが出てゐる。

用紙は裏打攀水引の畫箋紙、大きさは一尺×一尺三寸。繪具は顔彩、描法順序は前課に於て説明した方法によつたものである。

2. この描法に於ては陰影を扱つてゐない。花瓣や莖葉の各部の表現に多少の濃淡は出しているが、これは必ずしも光線による明暗ではない。かういふ描き方を専門的には日本畫と稱してゐる。

従来の日本畫の筆法には二種あつて、一は附立(没骨)といふ水彩シルエット風の描法であり、一は勾勒と呼ぶ線描着色の方法であることは前課に述べた。本圖は其の後者で、素直な描線のうちに花と莖と葉との特性がよく現はれてゐる。毛筆畫では洋風畫のやうに明瞭には陰影を扱はない。物質感も實在感も主として線によつて表現するのであるから頗る描線を重視する。

3. 題材は花と蕾と葉で、構圖は中央に主體となる花を置き、左右に葉と蕾を添へ、落ち着いた感じである。表現の傳統的手法に従へば花瓣の一片が正面にあるやうな構圖が多いのであるが、本圖ではこれをやめ、花の中心をやや左に置いて新味を加へた。

4. 畫面から受ける感じは頗る和やかである。そして平明、快裕、純眞、精神的であるところの所謂日本趣味も尠からず畫面に漂つてゐるやうである。

5. 常岡文龜氏 東京美術學校出身の日本畫家、母校助教授。(詳細は巻末7頁)

## 指導

1. 燕子花を左手に持ち、又は之を壺に挿して寫生せしめる。鉛筆の下描、墨による線描の後に彩色させる。

描線上の注意は、心を落ちつけ、平靜な態度で筆を運ぶことである。線はなるべく滯滞を避け、流麗に引けるやうそれには度々の練習が必要である

2. 莖葉花の姿態には微妙な自然の匂ひが漂ひ美しさが溢れてゐる。よく形を観察し、美しさを味ひながら雑念を避けて寫生せしめる。

3. 紫色の彩色は特にむづかしい。赤と青とを混ぜてつくるのであるが、先づパレットの上で調色してから豫め反古の畫用紙にためし塗をしてみる方がよい。紫色の繪具を用ひれば發色は特によい。

## 注意

1. 二時間教材として困ることは次週の時間まで花が持たぬことである。従つて第一時には下描の描線までとし、第二時に着色として、その場合は別の花を以て代用させるとする

2. 花は必しも燕子花に限らず、はなしやうぶやあやめ其の他鳶尾科植物を以て代用してもよい。

3. 紙は畫用紙、筆は習字用細書、繪具は水彩繪具を使ふことにする。

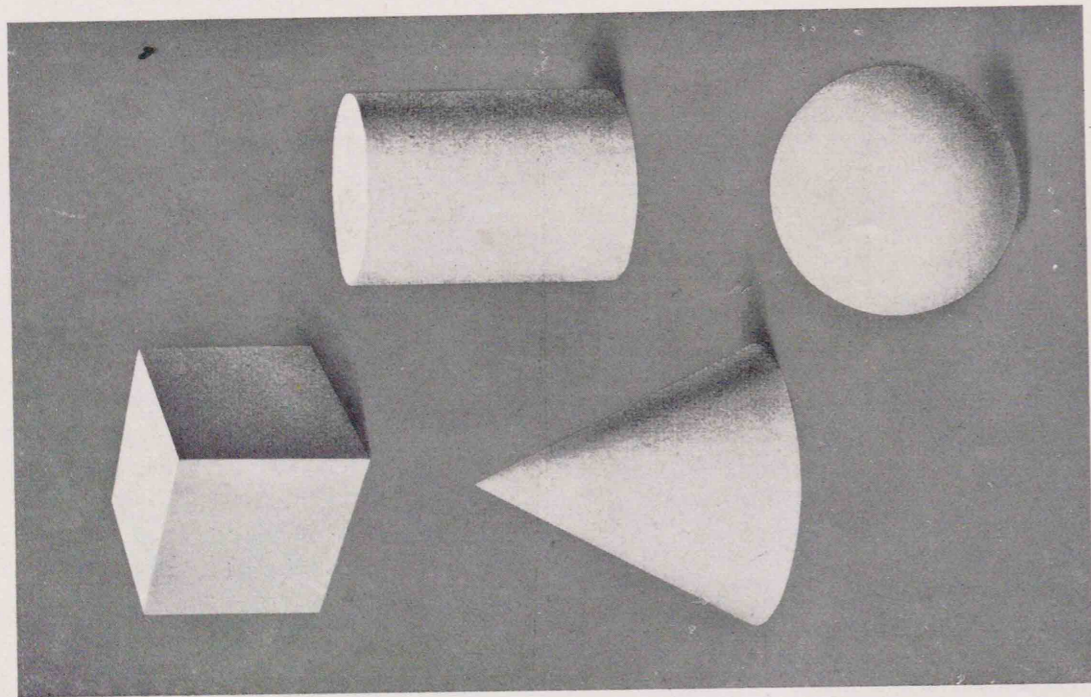
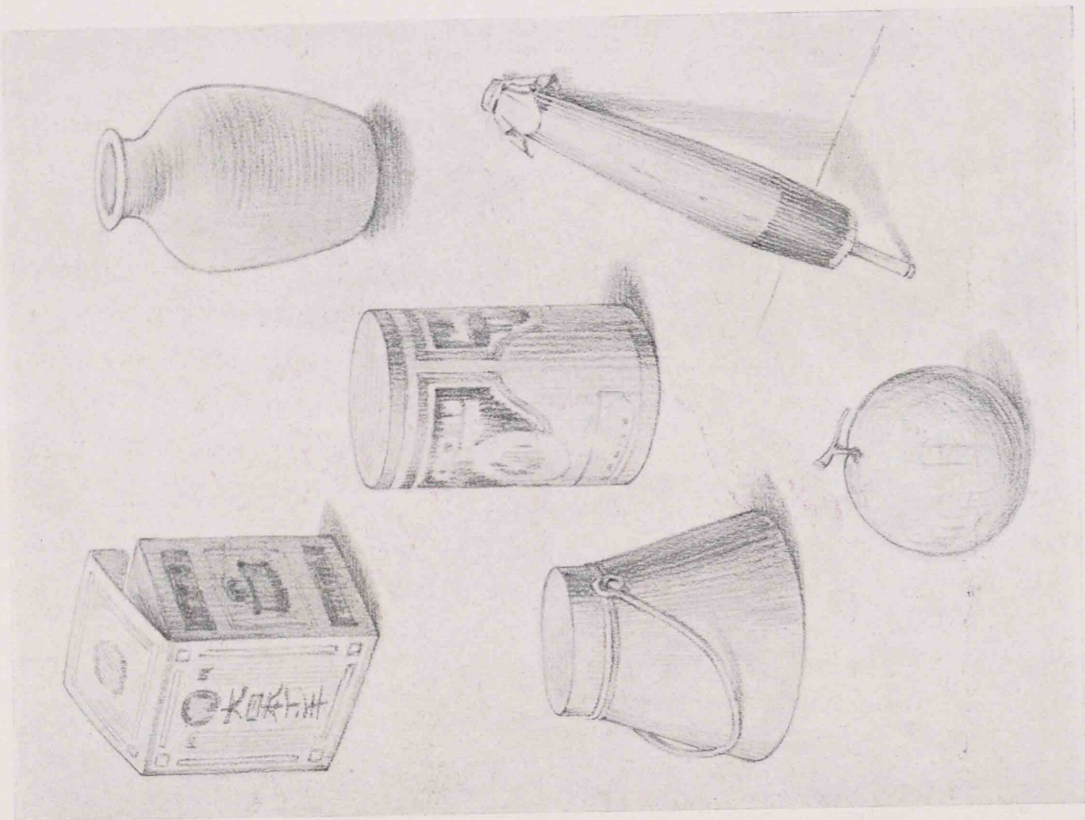
4. 本圖は臨畫として取扱つてもよい。

準備 燕子花其の他及び範畫

参照 巻末7頁8頁、理論篇49頁







9 幾何形體と器物 (説明用)

## 9 幾何形體と器物 (説明用)

### 要旨

幾何形體及びこれに属するものの明暗陰影の變化について説明し、立方體、圓錐、圓錐、球を基本とする諸物體の形狀、調子に關する知識を確實にすることを眼目とする。

### 説明

1. 左の圖は石膏模型の幾何形體で、上から立方體、直圓錐、直圓錐、球である。陰影の關係を示したもので、光線は左上部から投射して居り明暗及び影が明瞭に現はれてゐる。

立體には明暗の兩面があり、更に影がある。圖例の立方體では上の面が明るく、左の面これに次ぎ、右の面が暗くなつてゐる。明暗兩面ともに更に段階があつて、明暗の最も強いところは圖畫者の目に近いところである。他の模型に於ても同様である。但し曲面に於ては暗部の端が特に明るく見える。光澤のある物體に於て特に甚しい。(理論篇02頁参照)

2. 右の圖は基本的幾何形體を實物化したもので、インキの箱、壺、鐘詰、傘、油繪の筆洗、及びメロンである。

インキの箱、鐘詰、筆洗、メロンは左上からの光線によつて陰影をかいてゐるが、壺は背面からの光線による所謂逆光線になつて居り、傘は壁に立てかけられてをてつて、壁及び床に影を落してゐる。

3. これ等の物體に於ける明暗陰影の強さは光線の強さに比例する。圖例は何れも穩かな光をうけてゐる場合である。

日光は朝夕が弱く日中は強い。四季の中光の強いのは夏で、又戶外と室内とでは戶外の方が強い。

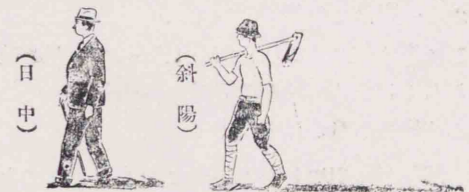
4. 燈火による明暗の差は劇然としてゐる。又その場合は光源が有限距離にあるために影の

形が實體よりも大きくなる。日光の場合は光源が無限距離にあるので影は實體の大きさに準ずる。

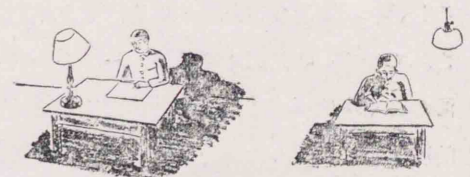
5. 影の長さは光線と床面との狭角に反比例する。即ち光が概ね上から來る場合の影は短く、側方から來る場合の影は長い。太陽による物體の影は朝夕は長く日中は短いわけである。室内に於ては窓の大小形狀によつて多少の變化をうける。

6. 平行光線の場合と輻射光線の場合とにつき二三の例を圖示する。

平行光線による影の長さの變化



輻射光線による影の長さの變化



### 注意

1. 特に時間を設けて説明するに及ばない。これと聯關ある教材の取扱に際して適宜に本圖を利用させたい。
2. 石膏模型は之を準備して特に燈火による實驗を生徒にやらせたい。
3. 本圖右側の六種は、生徒に學習時間の餘裕が出来た時臨畫教材として利用させたい。

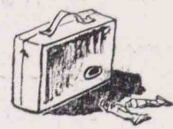
準備 石膏模型、インキ箱其の他

参照 理論篇02頁、卷末9頁



## 10 スケッチ箱

### 要旨



スケッチ箱を写生せしめて角なものを基本形とする

物体の形状明暗を観察し、鉛筆によるこれが表現の力を養ふ。特に主眼点を陰影の研究に置く

### 説明と鑑賞

- サムホール型スケッチ箱を立て、置き、一隅には繪具のチューブを二本無雑作に置いて構圖と色彩の上に變化を企圖したものである
- スケッチ箱は上と横と裏との三面が見えるやうな位置に置いてある。上には帯の提手がついてをり、横には自在金<sup>カナ</sup>共<sup>ト</sup>他の金物が見える。裏面には楕圓形の指穴を見せてある。これ等は何れも畫面に變化を與へて單調を破らうとしたものである。殊に指穴を見せたことは深き用意の結果である。
- 鉛筆が器用にしかも着實に驅使せられてゐる。楯材を以て作られた物質感もよく出てゐるし、又ラックを塗つたらしい光澤もよく表現されてゐる。繪具二本にもチューブの金屬光澤がよく現はれて居る使用された鉛筆は比較的軟かいもので心はあまり細く尖つてゐない
- 光線は左上前方から投じてをり、裏面、上面、側面の順で暗くなつてゐる。背後には影が見える。
- 齋藤素巖氏 彫刻家、素描家として最も有名である。(詳細は巻末10頁)
- スケッチ箱には油繪用と水彩用其の他の別がある。而して其の種類に大型、大長型、中長型、新小長型、小長型、三號型、サムホール型等種々あつて、その用材としては桐、胡桃、オーク、楡、櫻等が廣く使用される。これ等の大きさは次の通りである。

### 齋藤素巖

大型	38.5×29	大長型	38.5×19
中長型	38.5×17	新小長型	40.0×16
小長型	35.0×15	三號型	30.0×14
サムホール型	22.7×15		單位は厘

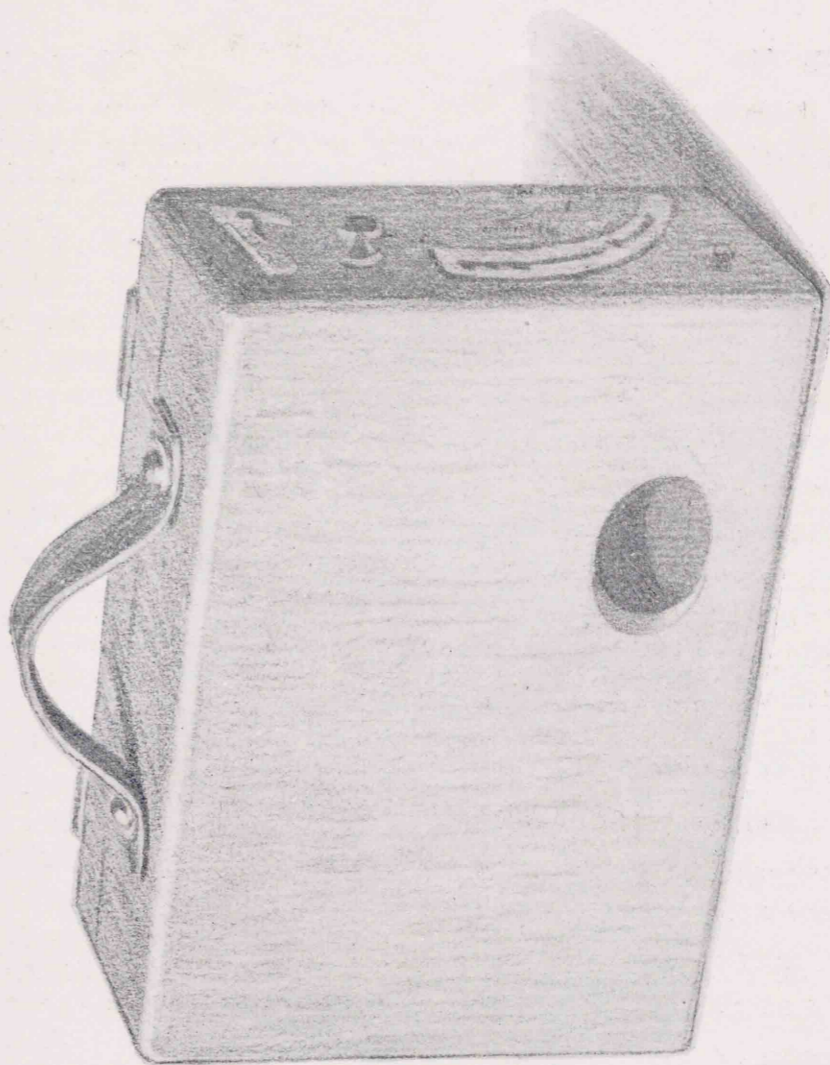
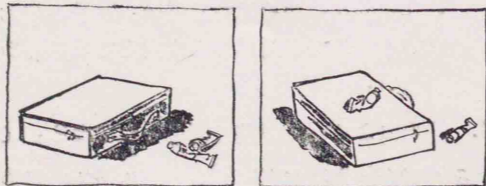
### 指導

- スケッチ箱數個を用意し、これを教室内適當のところに置き、更に繪具チューブ二三本を配してこれを写生せしめる。
- 構圖はなるべく本圖の場合と違ふ方がよい。適當なスケッチ箱のない場合は生徒用の繪具入木箱を写生してもよい。
- 描寫は器體の透視法によく注意し形の誤りは十分これを發見訂正するやうに導く。
- 陰影の描き方は自由であるが、餘り軟かい鉛筆の使用は畫面を汚すので適當とは思はれない。鉛筆の先を鋭く削つて金屬的な細い線を使ふことも面白くない。
- チューブはもつと大きいものを配してもよい。チューブの鉛管は明暗の美を強くして、光澤感を出させる。

### 注意

- 寫生材料が不自由の場合には、必ずしもスケッチ箱とは限らない。生徒用の繪具箱各種、硯箱、菓子箱等これに類するものを用意し、各自共用机上に配置して寫生せしめる。
- 臨畫教材として用ひてもよい。その場合は鉛筆の使用法について特に本圖と同様な筆致を研究せしめる。
- 第1、2、3課の教材との聯絡を考へる。

準備 スケッチ箱其の他  
参照 巻末10頁  
参考 カット及び下圖は各種の構圖



素巖  
齋藤



## 11 瓶とプロッター

石井 柏亭

### 要旨

圓罎に屬するインキ瓶と角形に類するプロッターとを寫生せしめて兩器體の組合せによる形状明暗を觀察し、鉛筆によるこれが表現の力を養ふ。特に陰影の描き方に注意せしめる。

### 説明と鑑賞

1. インキ瓶は陶製の大瓶で、普通二十四オンス入である。プロッター (Blotter) は吸取紙を挟んでインキの吸取に用ひる器物である。二つとも相互に聯絡ある品で、まことに自然な組合せである。
2. インキ瓶は畫面の中央に置かれて、畫面の首位を占めてゐる。これに配するに左側にはプロッターがあり、右側には影が描かれ、構圖上からは三角形の安定感が感じられる。
3. 形の正確さはいふまでもなく、質の感じがよく出てゐる。陶製の瓶の肌合から、それに貼られたレッテルの具合、プロッターの光つた板の感じや、これに挟まれた紙の柔かさ、調子も着實に描出されてゐる。
4. 光線は左斜やや上から來てゐる。右側に長い影を描いて畫面のスペースを調節した。
5. 石井柏亭氏 洋畫家、帝國藝術院會員、一水會會員。(詳細は卷末 11 頁)

### 指導

1. インキ瓶及びプロッターを用意して、これをモデル臺上に配置して觀察させ、構圖の研究をさせる。生徒各自にモデルの組合せと配置を考へしめてもよい。
2. 鉛筆を軽く用ひて輪廓をとらせ、充分訂正

して形を正確にする。瓶の圓みを出すこと及び圓味を出すための曲線を特に注意する。

3. 下描が出来れば、餘分の輪廓線を消して本描をする。本描は描線に注意し、描直しのないやう決定的の線を引くやうに心掛ける。
4. 線は各部分とも一様の濃淡では不十分である。本圖に示すやうに、瓶の左側の線は右側の線より強く、プロッターの摘みの線は他の部分より強い。要は畫者に近い線程強く、又明部の境界線ほど強く描くのが原則である。陰影をつけない場合の陽線陰線といふのは、陽線を細く、陰線を太くする。
5. 鉛筆の濃淡及び使ひ方が面の光澤を決定する。光澤ある面にはハイライトが多くなり、又反射光線も強くなる。このことは特に注意して觀察させ描寫させる。

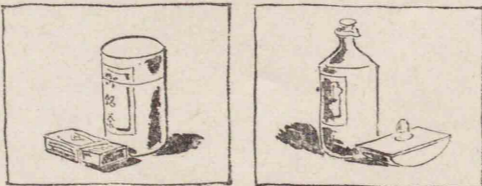
### 注意

1. 寫生材料はこれと同様なものでなくてもよい。ガラスの大瓶でも、又は圓罎形の陶製洋酒瓶でもよい。プロッターにも、この外二三の様式がある。何を用ひてもよく、或は全然種類の違ふものを組合せてもよい。
2. 臨畫教材として扱つてもよい。鉛筆の使ひ方、明暗の表現、光澤の描き方等、臨畫を通じて會得する點が多々あらう。
3. 第三課、第四課の教材を應用したものであるから、すでに夫々の課に於て學んだところを想起せしめ、更に表現の力を確實にするやうに導く。

準備 インキ瓶、プロッターその他

参照 卷末 11 頁

参考 カット及び下圖は各種の構圖





要旨

既に練習したところの角なもの、並に圓いものの折衷された應用形としてバナナを寫生せしめ、水彩による表現の力を養ふ。

説明と鑑賞

1. 一聯のバナナと一本離れたバナナとを配置よく寫生したものである。四本一聯のバナナが中心となつて、これに一本のバナナを取り合はせて構圖上の安定を圖つたものである。試にこの一本を白紙で隠してみると、構圖の安定は破れて、どこかに物足らなさが感ぜられる。
2. 少々軟かい鉛筆を以て齒切れのよい力強い線を引き、形状と陰影とを描寫してゐる。色彩も明快であり、筆觸は簡潔で生徒の寫生參考畫として誠に好適な表現である。
3. この繪は鉛筆の効果と繪具の効果とを狙つたもので、繪具を塗つたために鉛筆の消えてしまふやうな淡い線を用いたものではない。鉛筆淡彩畫と見てもよい作品である。
4. 左上から光線が來てゐるので右下に陰影がついてゐる。陰影は鉛筆で描いた上へ更に繪具で調子を濃くしてゐる。又着色の濃淡によつてバナナの面が表はれてゐる。

5. 板倉賛治氏、東京高師教授(詳細は巻末12頁)

指導

1. バナナを適宜モデル臺上に置き、見よい置方、描きよい位置を考慮させ、これを畫面に下描せしめる。
2. 畫用紙に對してバナナの大きさ、配置がどの程度でよいかを考へさせ、直線を軽くひいて大體の圖取りをする。
- 3 次にバナナの輪廓をとり、下描させ、鉛筆

を以て線描をさせる。それから陰影を描かせる。バナナの姿態明暗については十分行届いた觀察を必要とする。

4. 筆にたつぷりと繪具を含ませて全體を基調色の黄色で塗り、次いで塗り残してゐるバナナの兩端に緑色を塗る。其の時二つの色の接き目はお互に入り混つて穏やかなボカンが出来る。
5. 次に前に塗つた繪具が乾いてからこれに暗い色を軽く塗つてバナナの面を現はす。更に色の濃いところ、皮の傷んだところや影などに着色して仕上げる。
6. バナナを描くに主として用ひられる繪具はクロームエロー、エローオーカー、パーントシエンナ、ヴィリデイヤン等である。陰にはカーマイン、コバルトブリュー等を用ひる。

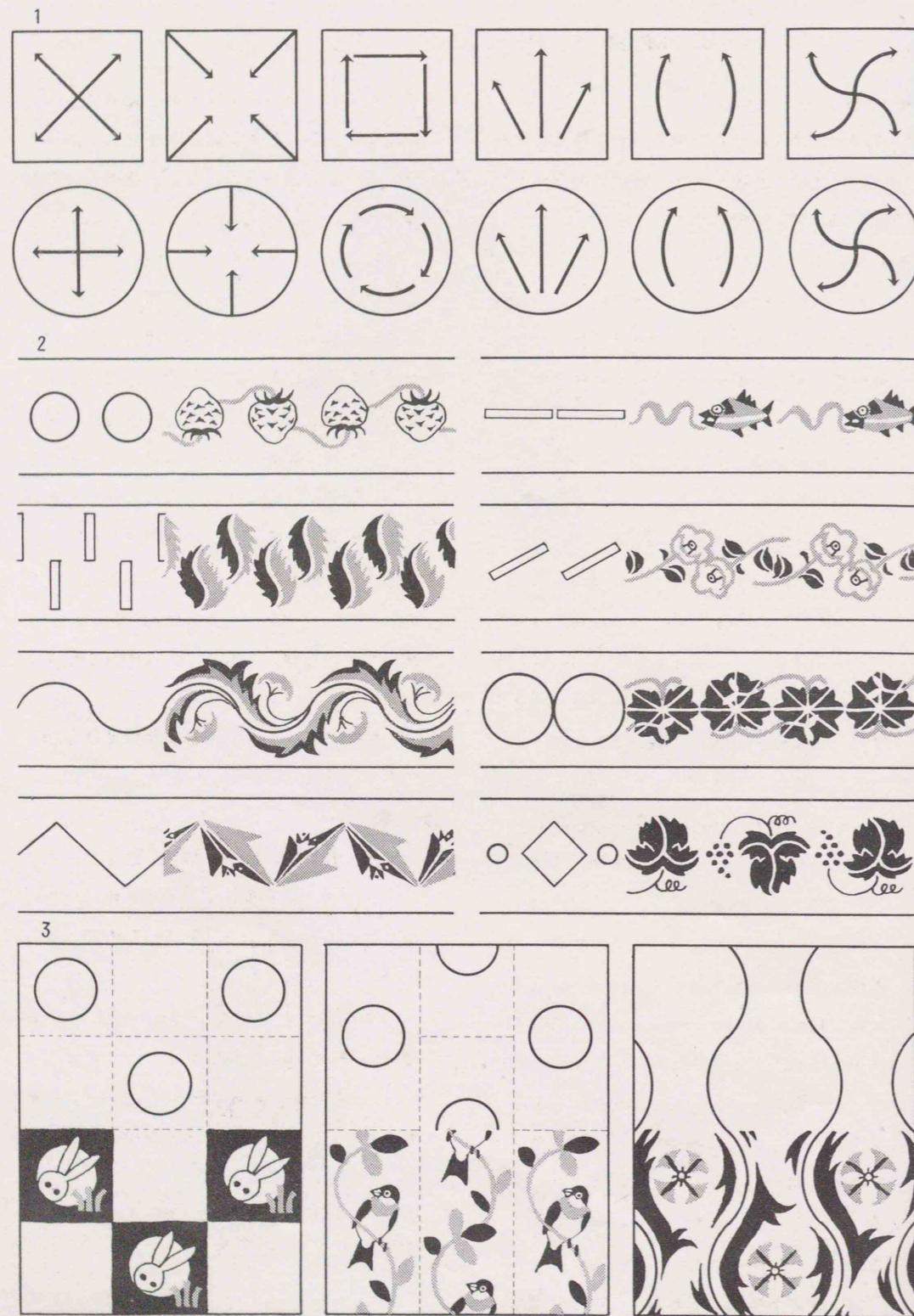
注意

1. バナナが用意出来ない場合は他の材料と取り替へて寫生する。胡瓜や大根などの野菜を以て代用してもよい。
2. 一時間教材とする。無理のやうならば二時間教材としてもよい。その間の扱方は燕子花の場合と同じやうに着色は第二時として、その時のモデルは必ずしも同一のバナナでなくても致し方ない。  
第一時に於て着色まで完了する生徒に對しては第二時はバナナのペン寫生、種々の方向から見た鉛筆クロツキー、毛筆を用ひた略畫、或は便化等を練習させることとする。
3. 臨畫教材として取扱つてもよい。

準備 バナナ  
参照 巻末 12 頁  
参考 各種の構圖







13 模様 の 骨 式

### 13. 模様 の 骨 式

#### 要 旨

各種平面模様の骨式を示しこれを説明して模様構成の基礎的知識を與へ、且つ次課による模様を指導する準備とする。

#### 説 明

1. 圖は何れも暗緑色の單色版である。次課に於ける各種の模様に従つて當嵌模様、二方連続模様、四方連続模様の三骨式を挙げたものである。
2. 1 は當嵌模様である。單獨模様、圍み模様、適合模様等の呼び方もある。與へられた輪廓内に適合するやうに單位を配置するのであつて、これに規則的と不規則的との排列があり、何れも統一、均衡を條件としてゐる。徽章、紋章、花瓶敷、皿、表紙のカツト其の他に應用される。圖示したものは正方形及び圓を輪廓とした方射式、求心式、沿周式、直立式、對立式、旋回式の諸骨法である。

この種の圖案は輪廓線をやめてもよい。その場合と雖もこれを當嵌模様と呼んでよい。

3. 2 は二方連続模様である。これは模様の單位が左右の二方に連続繰返される模様で帶狀模様ともいふ。實物としてはリボン、額縁、敷物の縁等に應用される。其の骨式は散點式、水平式、垂直式、傾斜式、波狀式、接圓式、及び以上の諸式を組合せたもの等色々である。圖示したものは其の各種骨式と簡単な應用例である。即ち苺、魚と藻、木の葉、椿、花と葉、楓の葉と實、水草、葡萄の葉と實を夫々資料として描かれてゐる。

4. 3 は四方連続模様である。これは又續き模

様ともいふ。單位が上下左右に連続繰返される模様で、周圍無限に廣がりを持つてゐるのである。應用範圍は頗る多く、染織物、壁紙等は主としてこの模様によつたものである。

圖示したものは方形式、階段式、立涌式の骨法で、夫々に兔、小鳥、草花がこの三骨式によつて描かれてゐる。方形式といふのは畫面を方形に區切り、その方眼の全部又は所々に單位を配置して模様を構成する方法、階段式といふのは畫面を階段に區切つて、そこに模様を配置し、立涌式といふのは波狀の曲線が上下に伸びようとする骨式である。

5. 以上の外尙數種の骨式が考へられる。又名稱も必ずしも一定してゐない。各骨式を知り、其の呼び方を覚えてゐることは圖案描寫上まことに便利である。

模様の骨式については卷末13頁及び理論篇75頁を参照せられたい。

#### 注 意

1. 本課の教材はこれを一時間に取扱つてもよいが、特に時間を設けず、次課を指導する場合、或は其の他の場合に隨時説明理解させるのも一法である。
2. 尙第15、16課幾何的模様其の他、第23課便化の練習、第25課紋所とステンシル、第26課當嵌模様、第29、30課連続模様の指導に當つては、特に本教材との聯絡が必要である。

準備 各種骨式の應用圖案又は實物各種  
 參照 卷末 13 頁、理論篇 74 頁



## 14 紐による模様

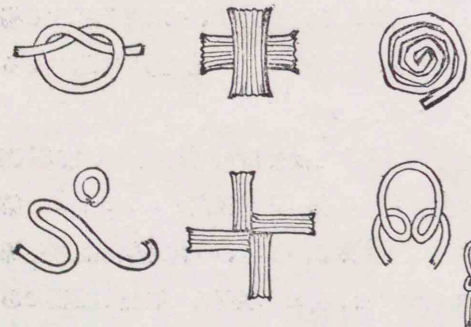
板倉 賛治

### 要旨

紐類の實物を使用して圖案を構成することを教へ、これを實習せしめる。組合せや配色や各種模様の骨法をもこれによつて知らしめる。

### 説明

1. 何れも色紙の上へ紐類を適宜の形に貼りつけたものである。これに用ひられた色紙は手工用の標準色色紙、紐類は木綿又は人絹製の真田紐、打紐、リリヤン Lily yorn、及び製荷紐等である。
2. 上段の四種は何れも二方連続模様、材料は夫々打紐、小包用糸テープ、真田紐、紙製荷紐、二種の打紐である。
3. 中段の二種は當嵌模様（單獨模様）で、材料は夫々真田紐、細太の打紐、二種の真田紐である。
4. 下段の二種は四方連続模様で、真田紐、打紐、リリヤンを用ひてゐる。
5. これ等の圖案中連続模様の資料となつた單位は次の形で、幾何形を基礎としたものと、人爲的な曲げ形によつたものとの二種である



6. 模様製作の過程は、最初に鉛筆を軽く用ひて色紙の上に下圖をかき、その上に模様の單位を糊で貼りつけてゆく。長短夫々の長さに紐を切断するのであるが、それは一度下圖の

上に紐を當ててみてからにしないと長さに過不足を生ずるから注意を要する。

7. 切り方は鋏を用ひる方がよい。真田紐の切口などは編目が廣がつて面白いものになる。
8. 糊で貼つても乾かないうちは模様が紙から離れる心配があるから一時重味のあるものを載せておくとよい。
9. 紙の地色と紐の色とは配色上極めて密接な關係を有する。どの紙にはどの紐が調和するか、又どの紐はどんな形にするのがよいかといふ圖案上の基礎練習が出来て、このやうな仕事は圖案の勉強には大變役に立つ。

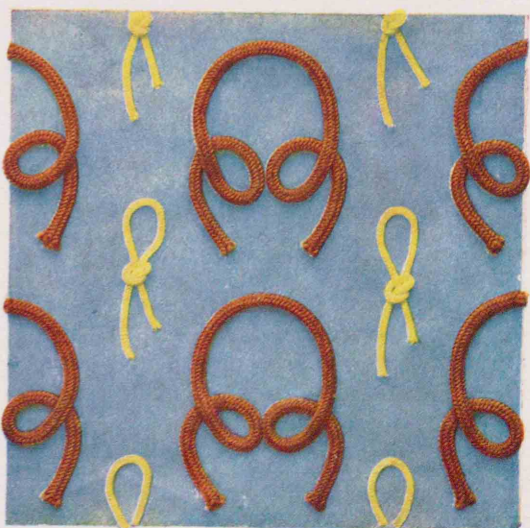
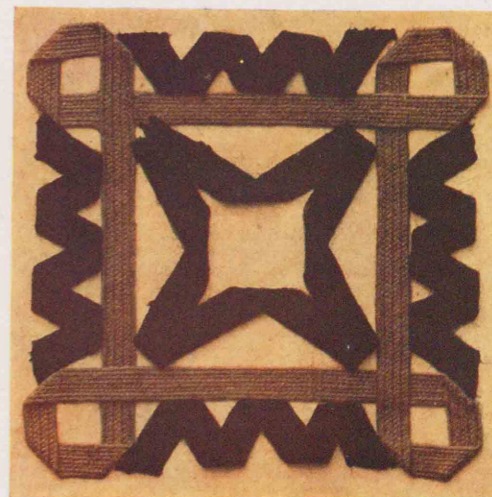
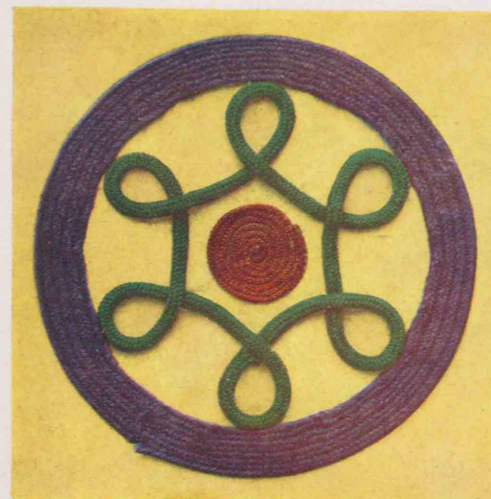
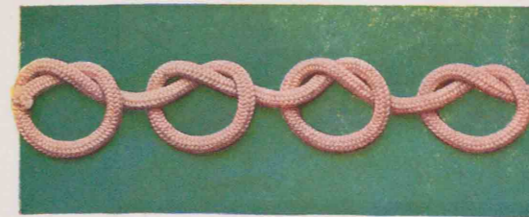
### 注意

1. この模様は板倉教授の創意製作に成るもので、圖案描寫の過程としては極めて基礎的な重要な意味がある。
2. 圖案の表現は繪具の扱ひ方が困難であるために其の初歩の間は構成や配色には手が廻らない状態であるが、形を考へるのに實物を用ひ繪具に代るに實物を以てすれば、構成配色は極めて容易であり、其の基礎練習が出来ると共に又圖案への興味を生徒に持たせることが出来る。
3. 本圖は實物其の儘を原色寫眞によつてこゝに示したものである。
4. 生徒にはこの模様を模作させてはいけな別々に各自の創作を試みるやうに指導する。二時間以内に出来る程度の種類にする。

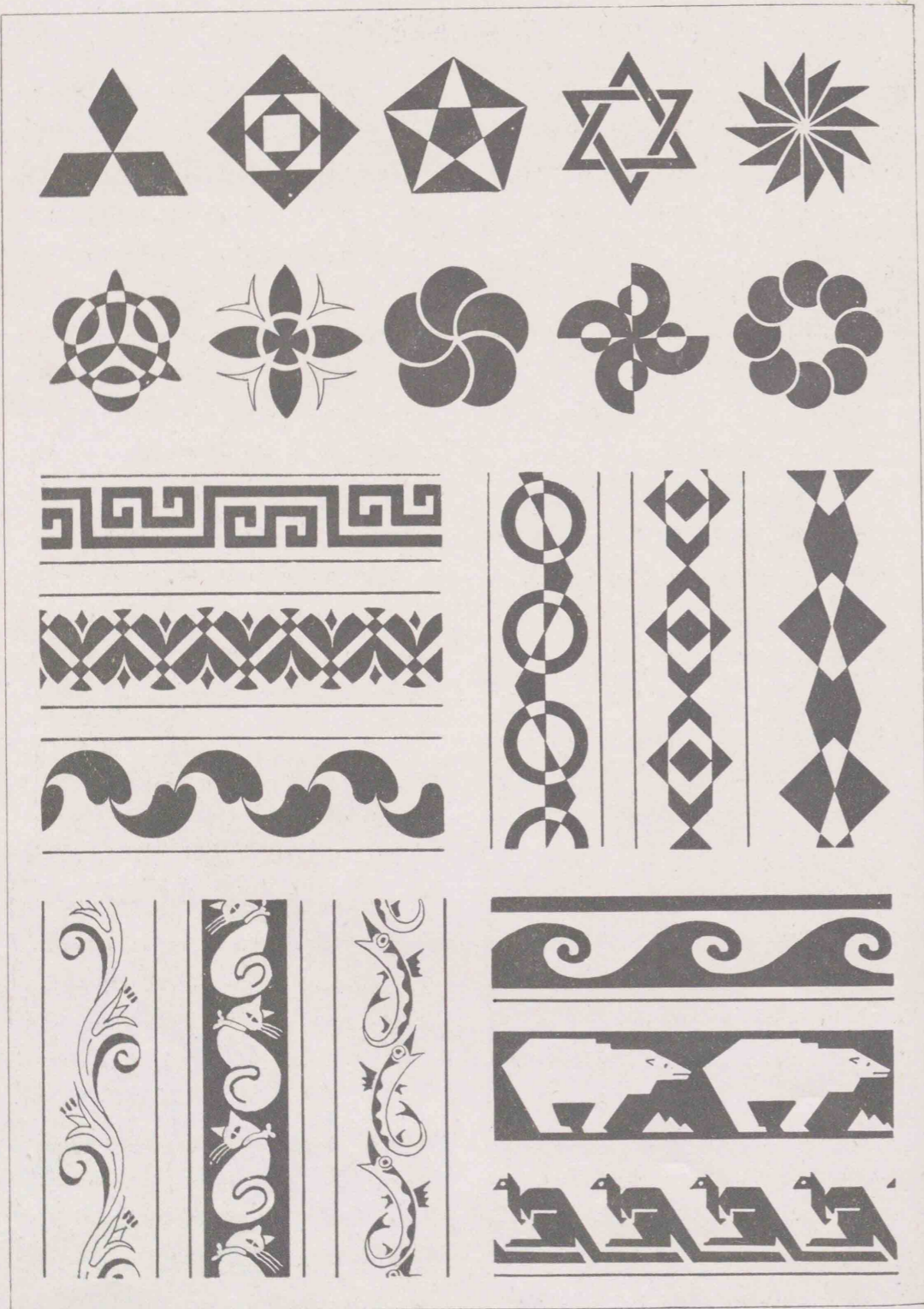
二方連続模様は單位が二方に連続してゆく模様である。四方連続模様は前後左右に單位が延びてゆく模様である。當嵌模様といふのは、一つの獨立した模様で或る輪廓の中へ適合する模様である

準備 各種の紐、色紙

参照 理論篇 74 頁







15 幾何的模様その他 その一

15 幾何的模様その他 その一

要旨

主として幾何的模様に関する當嵌模様、二方連続模様を描かして、幾何的模様の意味を知らしめ且つ資料の幾何的便化と其の構成とを練習せしめる。

説明と鑑賞

1. 幾何的模様といふのは幾何形化した平面圖案の意であつて、平面幾何圖法によつて描かれる模様のことである。即ち製圖器械を以て描寫し得る直線や曲線を用ひた平面圖案をいふのである。
2. 上段二列は何れも當嵌模様である。單獨模様ともいふ。第一列は正三角形、正方形、正五角形、正六角形、正多角形を輪廓としたもので其の描寫は何れも直線的である。
3. 第二列は第一列の各形を基礎とし、これに圓又は圓弧を配したもので、第一列の直線式に對してこれは曲線式である。
4. 中段及び下段は何れも二方連続模様で、縦と横との兩形式を示してゐる。表現の形式は概ね幾何的であるが、其の資料は人爲的と自然物との兩様で、即ち中段は幾何的資料、下段は自然物資料である。
5. 下段左は植物と猫と魚、右は波がしらと熊とカンガルーとを夫々なるべく幾何的に便化して排列したもので前者はペン描、後者は塗抹(シルエツト)によつたものである。
6. 圖版は淡墨の單色刷で、明暗の差がはつきりしてゐるから出来上りは引立つて見える。

指導

1. 畫用紙上に鉛筆を以て下描をし、その上を

墨又は他の繪具で塗り、乾いてから鉛筆の下描を消し去る。

2. 墨又は繪具を以て描く場合、出来上りを明快にするためには、ペン又は烏口の使用が必要である。同時に定規引の技法も心得て置きたい。
3. 毛筆の定規引によつて直線を描く方法もある。これは次課に於て詳述するが、線の強さ及び美しさは烏口を使つたものには及ばない。
4. 資料の決定、便化及び構成はなるべく獨創的のものがよい。餘り複雑冗漫なものよりは簡素明快のものの方が總じて好結果に出来る。
5. 同一の單位を繰り返す場合には厚紙を切抜いてこれを型にして描くこともあるが、その場合と雖も仕上は兩脚器及び定規を用ひるに如くはない。

注意

1. 本教材は時間の都合上説明にとどめて實習は次教材第16課に譲つてもよい。
2. 圖畫科に於ける平面幾何圖法は通例第三學年よりこれを課すのであるが、數學ではすでに第一學年に於て幾何初步を授くることになつてゐるから、數學との聯絡に留意することが必要である。
3. 製圖器具の扱ひ方については特に注意を與へる。
4. 實習の場合は必ずしも各種の模様を描くに及ばない。一箇乃至二箇を描く程度でよいであらう。

準備 幾何的模様範畫數種

参照 次課、卷末 15 頁、理論篇 67 頁



16 幾何的模様その他

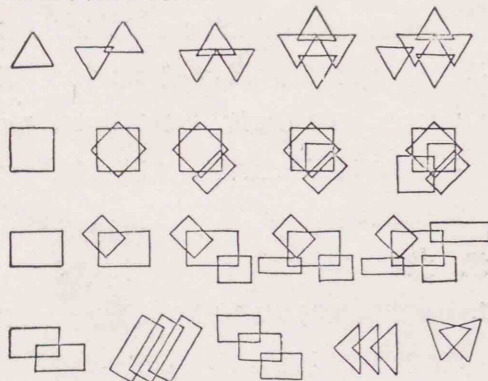
その二 鈴木豊次郎

要旨

正三角形、正方形、矩形等の幾何形及びコーヒー茶碗、椿の花等の自然物を資料とした二方連続模様を描かして、主として便化と構成とを練習せしめる。

説明と鑑賞

1. 上から四段が幾何的模様で、五段、六段は自然物を資料とした二方連続模様である。
2. 第一段は正三角形、第二段は正方形、第三段は矩形、これ等が各々資料となつて次のような単位が出来る。



上図第一段は正三角形を順次一つづつ組合せていって、三角形を五個組合せたものである。教科書ではこれを単位とし、左右に並べて、二方連続模様を作つた。上段右側はそれを示してゐる。他も同様である。

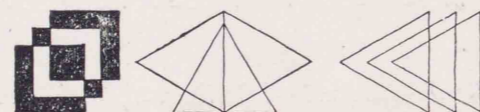
3. 第四段は矩形、二等邊三角形、正三角形を二個又は三個組合せて単位としたものである。
4. 以上の配色は同種色、類似色等が多く、何れも落つた感じであり、その構成は全く独自の手段によつたもので、清新な表現である。
5. 第五段と第六段とは器物及び花を資料にしてゐる。即ち上段はコーヒー茶碗、下段は椿の花で、構成には何れも幾何的直線及び曲線を多く用ひてゐる。

6. 二方連続模様は、リボン、帯、敷物の縁等に用ゐられる。

7. 鈴木豊次郎氏 圖案家、東京高等工藝學校助教。 (詳細は巻末 16 頁)

指導

1. 資料となるべき幾何形、例へば三角形、四角形、矩形、圓その他好みの形を畫用紙又は厚紙で切り抜き、これを型として紙の上にあてて形を描き、更に型の位置方向を變へて、形をその上に重ね単位をつくる。



2. 単位を左右に並べて二方連続模様を構成する。若し地色を白以外のものとする場合は模様を寫す前に豫め地色を塗つておく方がよい
3. 交錯した輪廓の線に従つて配色を考へ、直線はペン又は毛筆の定規引によつて描く。

毛筆定規

引の方法は

毛筆に添木

をし、これ

を手に持つ

て定規にあ

てて線を引

くのである。

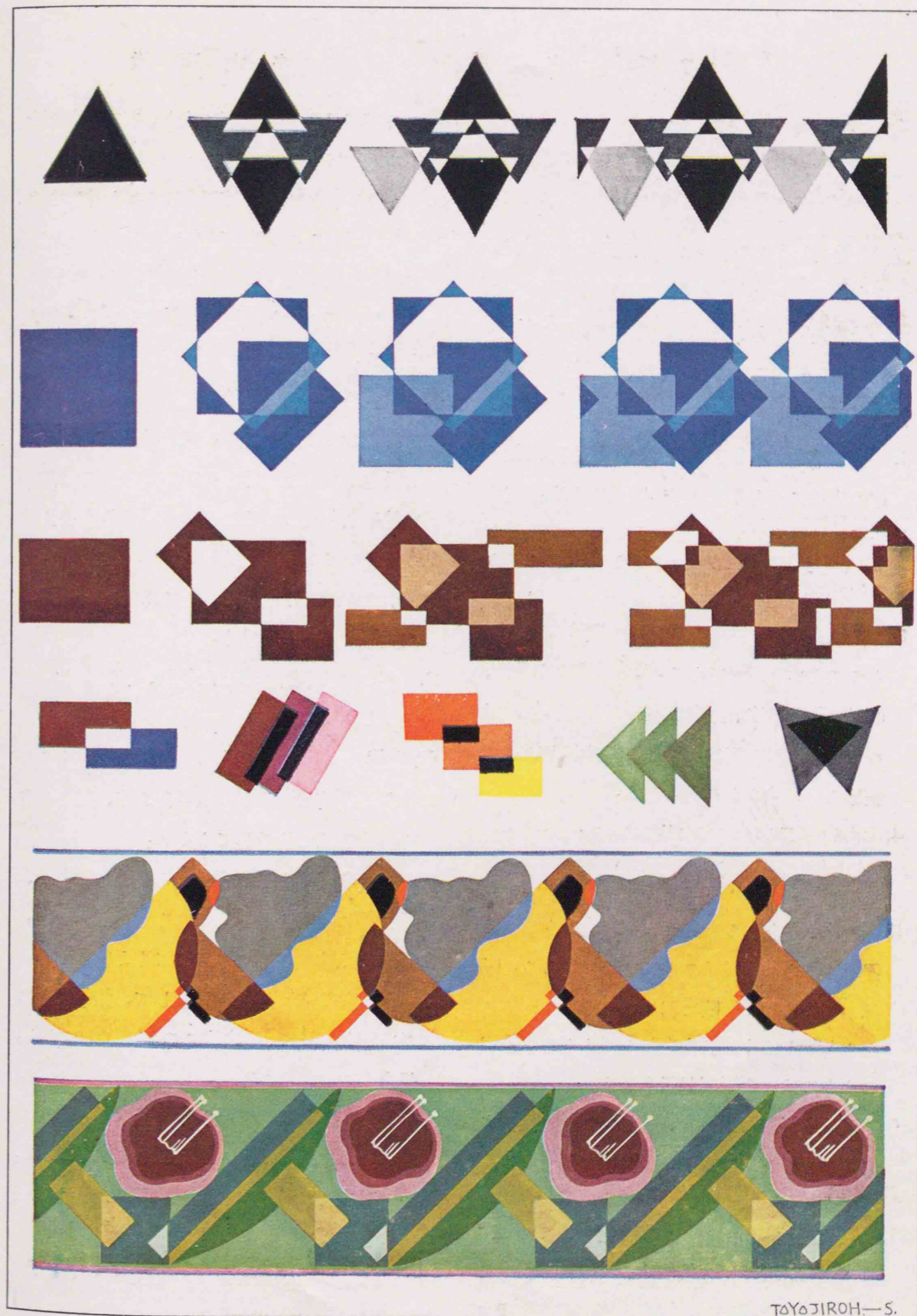
4. 繪具は不透明色を用ゐるがよい。水彩繪具に圖案用の白を加へて圖案繪具に代用する。

注意

1. 第一時に單位の考案と下描、第二時に着色をする。
2. 幾何的模様でなくて實物を資料とした二方連続模様を考案させてもよい。本圖第五段第六段の模様を参考として構成配色せしめる。

準備 正三角形、正方形、矩形等の幾何形、茶碗、花、その他

参照 巻末 15 頁、16 頁、理論篇 37 頁、70 頁



TOYOJIROH—S.



## 17 梨と葡萄 (参考用)

清水良雄

### 要旨

既に基本形體として角なもの、圓いもの及びその折衷形を練習したから、ここでは球體の應用として大小の球體を組合せた梨と葡萄とを寫生させて、鉛筆淡彩による表現の力を養ひ、特に陰影の描き方を確實にする。

### 説明と鑑賞

1. 梨と葡萄とは新秋を代表する果物で、生徒達の生活に最も親しみ多い畫材である。
2. 一個の梨が畫面の中央に置かれ、これに取り合せよく一房の葡萄と、三粒の葡萄とが描かれて美的な構圖をつくつてゐる。
3. 清水良雄氏の作品は常に潤達明澄で生徒にとつてよい参考品である。本圖に於ける形狀、明暗の鉛筆描寫、果實とバツクとの彩色、何れも氏の作風が現はれてゐて氣持がよい。立體感も物質感もよく出てゐる。
4. 本圖の基調となつてゐる繪具はエローオーカー、カドミウムエロー、コバルト、カーマイン、ヴィリヂェン等である。
5. 光線は左上から來てゐる。球體のものは角體のものより立體感の表現は困難である。暗部の最後に稍々明瞭に明るい部分の見えることも角體とは違ふ。尙光澤のあるものや透明のものにはこの明部が強くなる。
6. 清水良雄氏 洋畫家、文展無鑑査、舊帝展審査委員。(詳細は卷末 18 頁)

### 指導

1. 教室內數個所にモデル臺を置き、これに梨と葡萄を組合せて配置する。
2. 充分に形を觀察し、軽く鉛筆の下描をさせ

る。下描は大體から細部に入り、常に全體に目を通して部分的にならぬやうに氣をつける。

3. 葡萄のやうに小粒が集團してゐる場合は特にさうである。一粒一粒から描いてゆかないで、先づ葡萄全體の形狀大きさを描いて梨と比較し、更に他との關係を顧慮して下描をまとめる。
4. 着色はなるべく筆數を少くしてモデルの色を出すやうに指導する。度々同一個所を塗ると發色が鈍くなり易い。従つて着色に先立つて適確な色をつくる必要がある。
5. ハイライトは塗り残して紙の地色を出すやう、又半透明な葡萄の着色には特に表現上の工夫をするやうに導く。
6. バツクは本圖に準じた色彩、筆法のものを描かしめる。

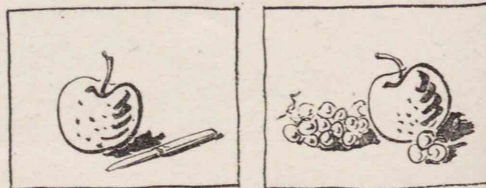
### 注意

1. 梨、葡萄が求められぬ場合は柿、栗その他の果實を以て代用してもよい。
2. 二時間教材として取扱上不都合な場合は、第二時には別な品を用ふるも止むを得ない。
3. 本圖は臨畫として取扱つてもよい。
4. 第六圖盆と夏蜜柑と比較して、鉛筆の使ひ方、光線の方向の差違等につき研究せしめる。

準備 梨、葡萄その他

参照 卷末 18 頁

参考 カット及び下圖は各種の構圖





## 18 葱と茄子 (参考用)

狩野探道

### 要旨

葱と茄子を寫生せしめて毛筆による表現の力を養ひ、且つ日本畫の趣味を味はしめることを眼目とする。

### 説明と鑑賞

1. 葱と茄子とを毛筆によつて寫生したもので初め墨によつて線描をし、これに着色し、又地色を塗つたものである。生地は絹である。
2. 葱には淡墨の少々太い線が使はれ、茄子は濃い細い線で描かれてゐる。實に美事な描線で、終始少しの淀みもなく、葱も茄子も唯描線だけでその質が十分うかがはれる程である。
3. 彩色は日本畫用の粉末繪具を解いて用ひてゐる。質の硬軟、色彩の濃淡、光の明暗にまで綿密な注意を拂つて、極めて寫實的に彩色してゐる。各部の特徴がよく表現され、立體感も相當に出てゐる。陰影は描いてゐない。
4. 細長いものを寫生することは構圖上うまくゆかないものであるが、本圖では實によく配置されてゐる。形の上にも色の上にも、濃淡の上にも變化があり、更に二箇の茄子が添へられて構圖は一段と引立つて見える。
5. 新鮮と高雅との感じを持つ作品である。そして特に目立つのは作者の技巧の冴えである。
6. 狩野探道氏 狩野探幽の末裔で、十六歳の少年時に日本畫會で受賞した程の腕達者である。(詳細は巻末 19 頁)
7. 第七課燕子花のところでも述べたが、本圖は日本畫の描法としては勾勒法によつたもの即ち描線着色がそれである。

### 指導

1. 葱及び茄子を生徒各自に用意せしめ、これ

を机上に配置よく組合はせしめる。

2. 鉛筆を以て極めて軽く淡く下描をさせ、次の描線に導く。描線については一般に軟いものは淡く弱く太く、硬いものは、濃く強く細くする。ここでは葱を弱く、茄子を強くするのであるが、更に葱や茄子の各部についても夫々描線の強弱濃淡に注意させる。

毛筆の線描が済めば鉛筆の下描は消し去る

3. 葱の莖や根の姿態、茄子の丸み、へたの感じ等には自然の微妙な美しさがある。その美を味ひ自然に親しみ、よく特徴を掴むやうにつとめさせる。
4. 着色は綠色と紫紺色とが基調になる。先づパレットの上でよく調色して見、更に反古の畫用紙に試し描き、試し塗をしてみしてから落筆、着色するやうに指導する。
5. 發色は潑刺として新鮮感あるやうに心掛けしめる。一度塗では十分深味が出ないが、度々加筆すれば色は濁るものであるから可成筆をよく洗ひ、パレットを清拭して描くやうに注意する。

### 注意

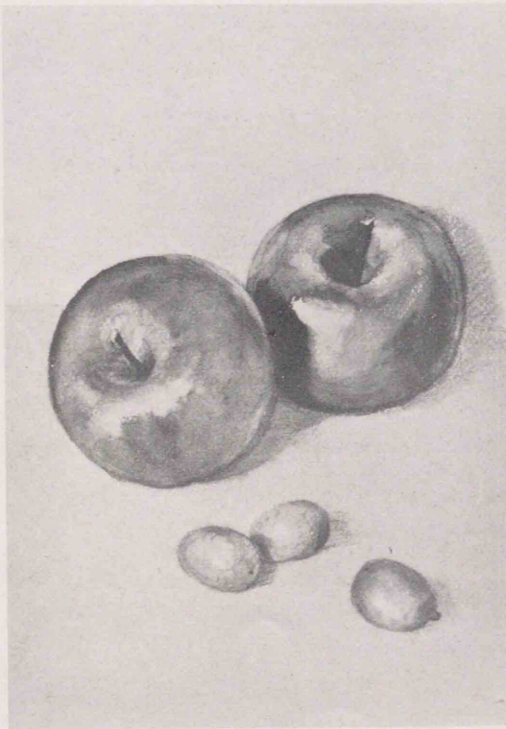
1. 豫定時間内に終らぬ生徒に對しては宿題として家庭に於て仕上げしめる。
2. 用紙は畫用紙、筆は習字用細筆、繪具は水繪具を以て代用せしめる。
3. 葱や茄子が得られない場合は他の野菜を以つて代用させる。
4. 本圖は臨畫教材として取扱つてもよい。

準備 葱、茄子

参照 本巻末 19 頁、理論篇 49 頁







●光澤のあるものの表現に於てはハイライトに注意しなければならない。ハイライトの形は表現されてゐる物體そのものの面の説明であると共に光源の説明でもあり、且その光度によつて物質をも説明するものであるから、ハイライトの位置形状及び光度は十分に観察研究すべきである。●暗部の中に見える明るい部分は、附近のものから来る光を反射するために生ずるものでこれが物の立體的なことを表はすのに有力な働きをなすのであるから、この暗部の中にある数々の明暗濃淡の調子と階段とをよく観察し注意しなければならない。

19 ハイライトの表現 (説明用)

## 19 ハイライトの表現 (説明用)

### 要旨

光澤ある器物の陰影と反射につき説明し、且つハイライトの意義と其の表現法につき知らしめる。本課は次課に於て光澤ある器物を寫生せしめんとする準備的の説明教材である。

### 説明

1. 圖は何れも黒の單色版である。上段二つの寫真は何れも實物を撮影したもので、左は陶器の壺、右は琺瑯鐵器の藥罐である。

陶器は白地に濃藍で牡丹圖があり、藥罐は紺青色大型のもの、夫々陶器と金屬のハイライトを示してゐる。

2. 下段の二圖の中左は鉛筆畫で瓶とコップを寫生したもの、右は水彩畫を以て林檎と金柑とを寫生したものである。透明體及び果物のハイライトを示してゐる。

3. この四圖を物體の質によつて別けると、陶器、金屬、硝子、果物の四種で、其の質感は遺憾なく表現されてゐる。

4. これを又光線の上からみると上段二圖は左上から來た光線を扱つて居り、下段左圖は右上から、下段右圖は前方、稍、左から照した場合である。

5. ハイライト High-light は物體の最明部でまともに光を受けて光つてゐる部分を指すのである。如何なる物體にもハイライトはあるけれども、光線の強弱、面の粗滑、物體の質によつて其の形と明るさに差異が生ずる。

6. 光線が強くて物體の面が平滑の場合にハイライトは其の形がいよいよ分明となり、且つ明度を増し、其の反對の場合には形が不明瞭

になり明度が減する。

7. ハイライトの形は物體の面の形状によつて異なる。平面と曲面とによつて違ひ、又圓錐、圓錐、球其の他夫々の形體に従つて變化する。勿論光源の位置によつても異なる。

陶器壺、藥罐、コーヒー瓶、林檎の夫々につき觀察させたい。

8. 光を受けた物體の暗部を観察すると、暗部の中にも明るい部分があるのを發見する。これは周囲のものから來た光を反射するために生ずる明るさで、光澤のある物體ほどこの變化が多い。概ね暗部の一端は却つて明いものである。

### 注意

1. 本課は説明教材であるが、このために一時間をとる必要はないであらう。次課壺の寫生に附帶してハイライトの描寫上の諸注意につき説明することにした。

2. 金屬器具、陶磁器、硝子器、果物類等についてはなるべく實物を用意し、且つ範畫をも提示して説明するのがよい。

3. ハイライトの描寫は鉛筆畫の場合は塗り残して紙の色をそのままとし、水彩畫の場合も塗り残しを原則とする。油繪では白を用ひて描出するのが原則であり、油繪式のこの方法は近時水彩畫の畫き方の上にも一方法として影響することになった。しかし普通教育に於てはかかる技法は歓迎すべきでない。

4. 本課は理論篇表現に關する解説中に詳述してゐるから参考に資せられたい。

準備 説明用實物及び範畫

参照 卷末 20 頁、理論篇 62 頁

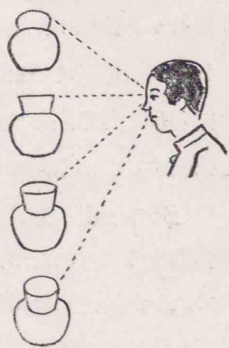


要旨

球と圓錐との折衷形として光澤ある壺を寫生させて水彩による表現の力を養ひ、特にハイライトの研究をなさしめるのを眼目とする。

説明と鑑賞

- 花瓶兼用の飾壺である。この形はオイノコエと稱する古代ギリシャの葡萄酒注ぎの片手壺が近代化されたものである。陶器の壺で口が長く、胴から口へかけて手がついてゐる。表面には強い光澤の釉薬がかけてあつて手觸りは極めて滑かである。
- 鉛筆で形をとり、大體の明暗が描かれ、その上にハイライトの部分を残して一面に色が塗られ、乾かぬうちに更に濃い色を重ねて光澤明暗を出してゐる。
- 筆觸は大きく達者で繪具はすつきりと水々しく使はれてゐる。質感、光澤感、立體感も遺憾なく發揮されてゐる。
- 光線は左上やや前方から來て壺の面にハイライトをつくつてゐる。
- 画面の上段左は實物を寫眞にしたもので、ハイライト及び明暗が如實に現はれてゐる。上段右の圖は黒一色を以てこの壺を描いたものであるが、この單色を以て尙且つ實物を髣髴させるのは唯ハイライトを塗り残してゐるからである。光澤ある曲面の表現にはハイライトの研究が極めて必要である。



壺の置き方

6. 松原郁二氏 東京高師訓導 (詳細は巻末)

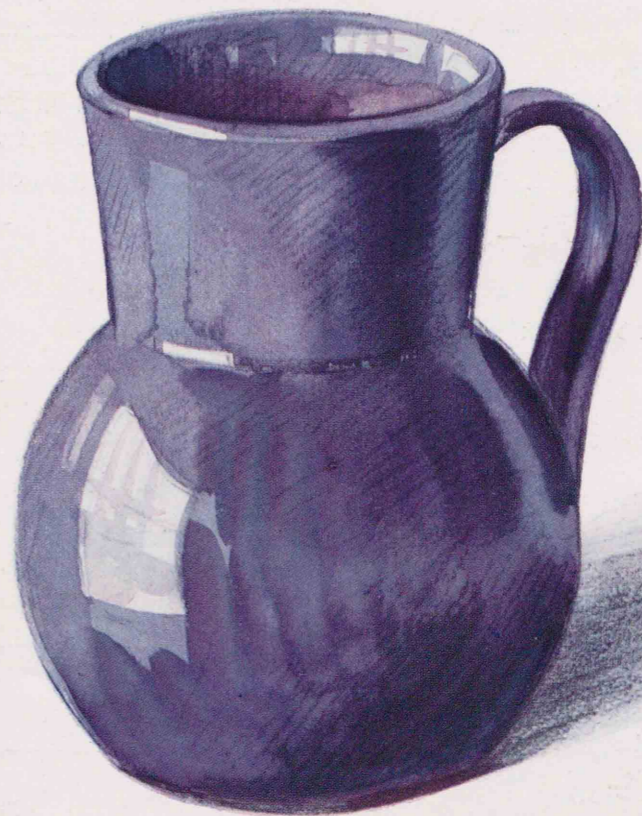
指導

- 光澤ある、しかも色の濃い壺を數個所に配置しこれを寫生させる。
- 壺の置き方は餘り高くてはいけない。生徒の目が壺を斜めに見おろすやうな位置に置かなくては壺の口が見えないから立體感の表現に不都合でもあり、美しい見方ではない。
- 鉛筆を以て形をとり心覺えの程度に鉛筆で明暗を描かせる。口の圓み、頸と胴との接目、底の圓み等に注意する。
- ハイライトの部分だけ残して他は基調色を以て全部塗つてしまふ。その乾かぬうちに更に面の濃淡又は色の變化に應じて加筆して仕上げる。
- 色彩を濃刺と出すためには、筆数はなるべく少い方がよい。だからこのやうな光澤あるものの描現は、はじめからその物の色を作つて塗つてゆくことが必要である。乾いてから塗るより、潤ひのある上へ塗る方が効果的の場合がある。共に生徒に研究せしめたい。

注意

- 寫生材料はなるべく無地で色の濃い光澤のあるものがよい。
- 本課は二時間寫生であるが、早く仕上がつた生徒に對しては上段右の單色描寫を臨畫させ、又はこの形式で寫生させてみるのもよい。
- 又本課の描寫に併せてガラス器のやうな透明なものハイライトの研究させることも必要である。

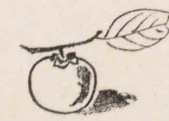
準備 壺各種  
 参照 卷末 21 頁、理論篇 62 頁  
 参考 種々なもののハイライト





## 21 柿

### 要旨



光澤ある球體果實の明暗の變化並に枝と葉の複雑な姿態を觀察させ、且つ水彩描寫によるこれが表現の力を養ふ。

### 説明と鑑賞

1. 柿は秋の王座を占める果實で、これは富有と稱する種類の一つである。十分に熟れた二つの果實と、蟲に傷められた四枚の葉とが枝についてゐる。
2. 畫面の主體となるものは二つの柿でこれが中央に置かれ、右半分に四枚の葉が自然の位置を保つて配されてゐる。左半分のスペースには枝が長く出て右側との釣合を圖つてゐる。
3. 色彩の上から見ると美しい朱色が中央を占め、これを取りまく枝や葉やバツクは濼い緑や灰色で、畫面は落ちついた色彩で統一されてゐる。
4. 光線は左上前方から來てゐて柿には強いハイライトが見える。
5. 表現は鉛筆を以て形と陰影を描き、これに水彩繪具を塗つて實物を髣髴たらしめてゐる。描き方は素朴であるが、線描も明暗も彩色も要を得、愛すべき作品である。
6. 本圖の基調となる繪具はクロームエロー、カドミウムエロー、ヴァーミリオン、ヴィリディアン、ライトレット、コバルトブルー等である。
7. 寺内萬治郎氏 洋畫家屢々文帝展審査に任ぜられてゐる。(詳細は卷末 23 頁)

### 指導

1. 柿を枝つきのまま適當に置いて寫生せしめる。先づ畫面との釣合をはかつて大きさを決

## 寺内萬治郎

め、枝の姿勢を中心にして柿と葉との配置を考へつつ大體の形から細部に描きすすめる。

2. 下描を辿つて線描をし、陰影を描いて、その上に着色する。
3. 柿が二つ重つた場合葉が重り合つた場合等は明暗に注意し、遠近の調子を考へ、近くは強く遠くは弱く描いて距離感を出すことに注意する。
4. ハイライトは紙の地を塗り残すやう、色彩は鮮明に出すやう、陰影の色は實物を十分觀察して表現するやう特に留意する。
5. 陰影の色は描かれた實物及びその周囲の色に支配されることが多い。赤い柿の陰は赤味を帯び、白布に投げられた影の色はあまり濃くはない。又反射によつて影響をうけることも大きい。陰影をとかく青や紫に描く癖を持つ生徒が多いが反省させる必要がある。
6. 本圖の場合には白布の上に置かれた静物の影とみることが出来る。

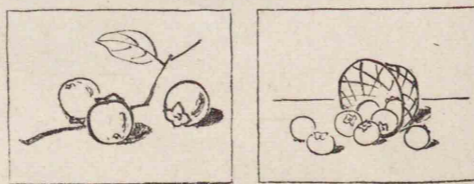
### 注意

1. 柿の實物が得られない場合は他の果實を以て代用してもよい。
2. 本圖は臨畫教材として扱つてもよい。
3. 二時間教材としては時間の不足を來さぬやう餘りに複雑な構圖は避けることにする。第二時に於て同一モデルの得られぬ場合は他の柿を以て代用することも止むを得ない。
4. しかし第一時を學校に於て描き半成畫を家庭に持ち歸つて仕上げさせてもよい。その場合にはモデルの柿は生徒各自に用意させる。

準備 柿

参照 卷末 22 頁、理論篇 55 頁

参考 カット及び下圖は各種の構圖





要旨



スープパンと野菜又は果  
實を写生させて光澤ある金  
屬並に果實の色彩、明暗の

變化、ハイライト等を観察させ且つ水彩繪具によるこれが表現の力を養ふ。

説明と鑑賞

1. 圖はアルミニウム製のスープパン Soup-pan とトマトである。スープパンはこれを火にかけて使ふもの、従つて火の廻りのよい金屬が利用される。トマトは夏から秋へかけての野菜で、其の滋養價と共に新鮮な色澤が喜ばれる。
2. これは器具と野菜とを組合せたものであるが、食器と食用品とであるから取り合せはまことによい。總じて二つ以上の物を同一畫面にかく時は縁のあるものを組合せるのが普通である。
3. 畫面の中心を占めるものはスープパンでスペースの上からも重要面積をとつてゐる。これに配するにトマトと其の葉である。構圖は一分の隙もないよき釣合を示してゐる。
4. 色彩の上から見れば全面はグレーがかつたバツクとスープパン、落着きはあるが、これのみでは如何にも寂しい。そこへ美しい朱と緑のトマトが配されて、畫面は眞に生々して來た。しかしこの華かな色彩があまり多過ぎるとは畫面が卑俗なものとなる。實に考慮された配色である。
5. スープパンとトマトの物質感、實在感がよく現はれてゐる。スープパンの金屬光澤、殊に磨かれた面のハイライト、かがやかしいまでに美しいトマトの肌と光澤が實物そのまゝである。實にすぐれた作品である。
6. 繪具は何回も塗られ、筆觸は穩かで、時間を相當かけ着實に描かれた作品である光は左上から來てゐて右下に強い陰影がついてゐる。
7. 特にテーブルラインを設けない。同一白布

の上へ置いた静物と見ることが出来る。

8. 伊原宇三郎氏 東京美術學校助教授、その作品は常に手堅く着實である。(詳細は巻末24頁)

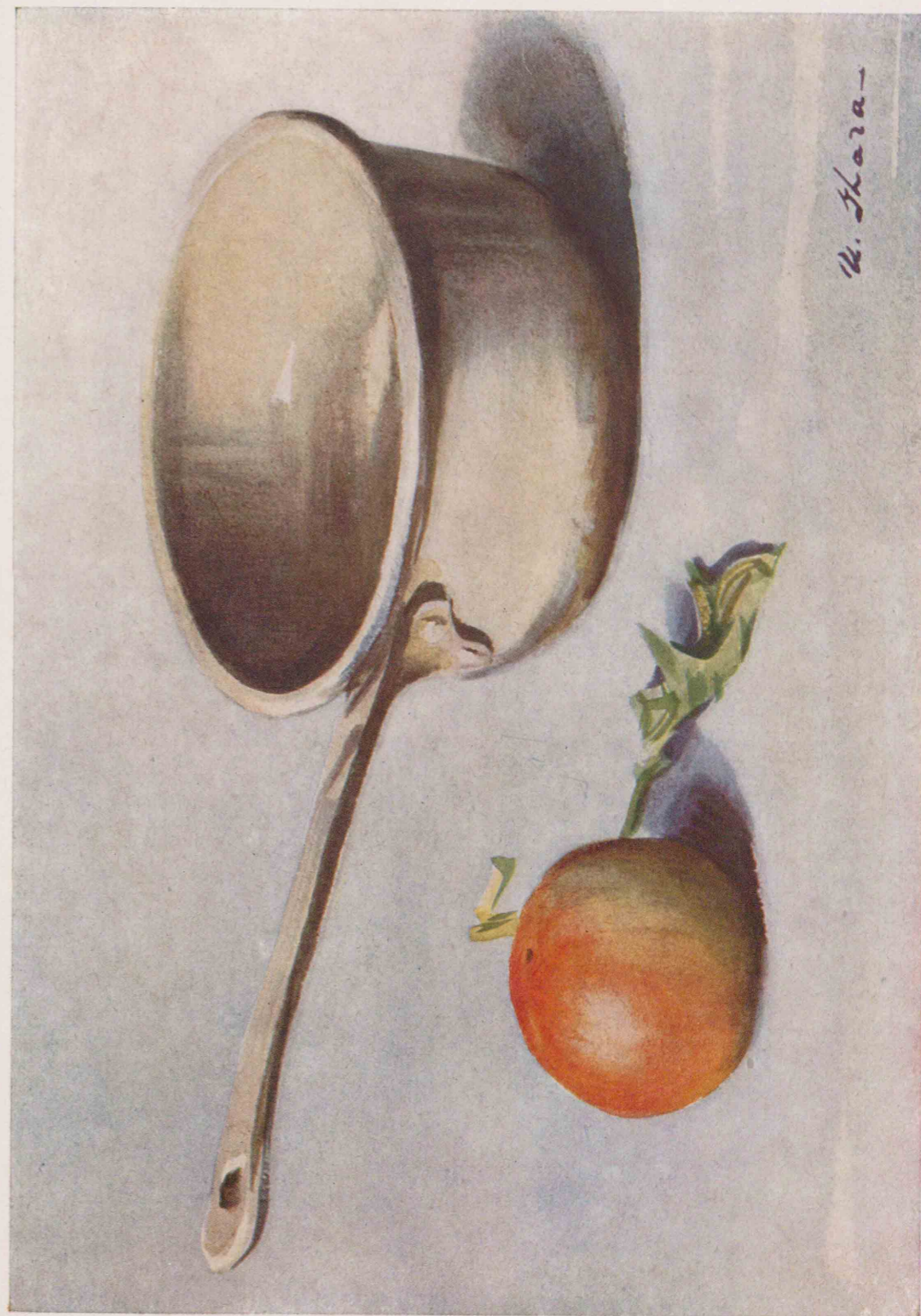
指導

1. トマトは季節によつて得難いものであるから、これに代るべきものを材料としてスープパンと組合せて寫生させる。スープパンの代りに鍋を用ひてもよい。
2. 鉛筆で下圖をかき、十分形を訂正して着色する。今までは鉛筆淡彩風の水彩をかいたのであるがこゝでは殆ど鉛筆の跡の見えぬやうな本格的な水彩畫を描かせる。従つて下描の線を淡く軽く使ふ。
3. 着色は部分的に割據的にならぬやうに全體を平行的に塗つてゆく。バツクも畫面構成の重要な色彩として最初からこれを考慮せねばならない。
4. スープパンの内側の調子は特によく観察し明暗の度合を考へて描く。ハイライトに注意する。
5. バツクも筆觸と調子とによつて遠近感があるやうに表現させる。

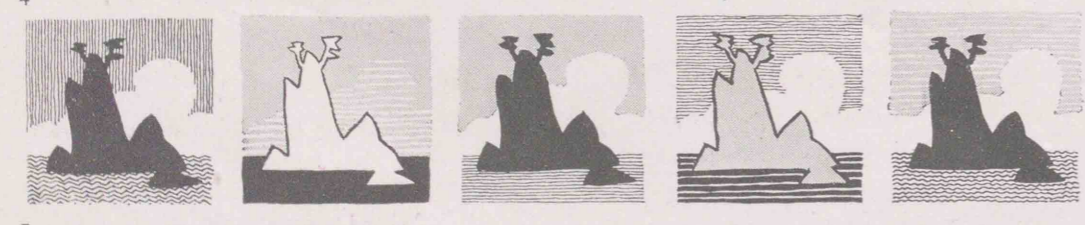
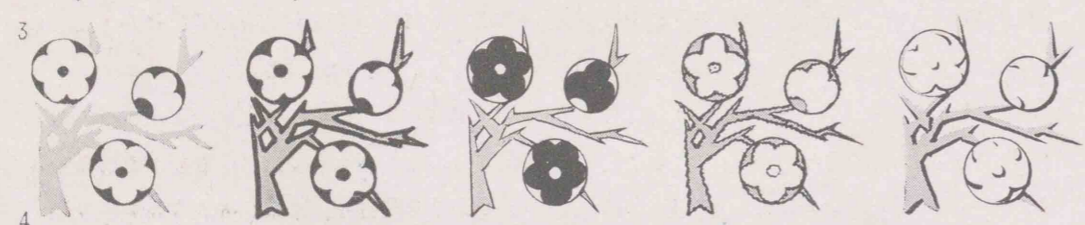
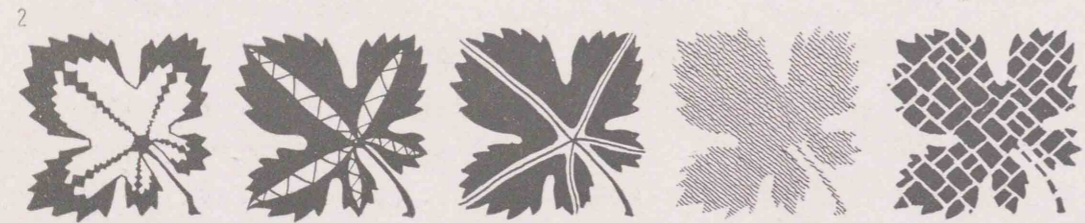
注意

1. 本課は材料と季節との關係で、臨畫教材として取扱つてもよい。
2. 臨畫の場合には形狀、明暗、筆致、色調等本圖に肉迫するやうに心がけしめる。表現上の練習教材として好適である。
3. 水彩畫の描法については理論篇50頁に詳細に説明してあるから参考に資せられたい。

準備 スープパン、トマト其他  
参照 巻末 24 頁、理論篇 50 頁  
参考 カット及び下圖は各種の構圖







●1はシルエット、2は表面の変化、3は輪廓線の變化、4は濃淡塗抹の變化、5は明暗による單化である。

23 便化の練習

23 便化の練習

要旨

模様描寫の上に必要な便化法について説明し便化の練習をさせ、次課に於てカット及び便化例を畫かしめる準備とする。

説明と鑑賞

1. 便化とは採擇した資料を圖案の目的に適するやうに便宜變化することで、其の一般的な態度として形状、色彩の單純化である。これを内容上から考へると聯想的な要素を整理して審美的又は感覺的ならしめることである。
2. 自然物象を寫生したまゝの資料では、其の形や色が複雑してゐて工藝としての製作に向向であることや、自然物象と人爲物象との調和が不自然であることに便化の理由がある。便化は又模様化ともいふ。
3. 便化の方法は二つに大別される。客觀的便化、主觀的便化これである。前者は物象の外観をなるべく寫實的にしておいて多少作者の創意を加へようといふのであり、後者は作者の意圖を主眼として理想的な形状色彩を表現しようとするので、多少は物象の面影を残す。以上二種は便化の大綱であつて其の個々の場合については無論多種多様である。
4. 1はシルエット Silhouette (影繪)によるもので、寫生による資料の輪廓線を残し中を塗りつぶしたものである。色が單化され、複雑さが省略されて明快な感じを與へる。圖例は樹枝に三光鳥、鯛、金魚、バツタ、薔薇の葉、土瓶と湯呑、蝙蝠、瓦斯燈と自動車、むつぼむぐら草、汽船と海鳥、鼠、狐、をだまき草の各種で、何れも原形が躍如としてゐる。このまゝカットにも用ひられる。

化したものである。資料は葡萄の葉で、同一輪廓形ではあるが、其の中の變化によつて全く異つた感じのものを得る。

6. 3は輪廓線の變化による實例である。資料は梅枝と花、同一の資料でも工夫によつてはかく多數の便化が出来る。
7. 4は地塗の變化による實例である。明暗濃淡、地塗の技法一描線及塗抹一によつて夫々異つた感じとなる。資料は海と島の風景。
8. 5は明暗による單化で、陰の部分のみを塗抹して原形の感じを出したものである。左から向日葵、壺、鳥、犬、生徒の顔である。

指導

1. 圖示された各便化の要領につき説明し、これを參考として便化の練習をさせる。
2. 植物、昆蟲等の實物又は繪畫を用意せしめ、これを資料として種々な形式に便化する。着色せしめるには及ばない。
3. 反古の畫用紙又は雜記帳の餘白等に鉛筆を以て自由に練習せしめる。綿密丁寧な圖を描くよりも略畫風に多數の便化を試みさせるのがよい。

注意

1. 説明と練習とのために一時間を充てる程度にしたがふ。
2. しかし本教材はこれを説明用にとどめ、次課の取扱に際し附帶せしめ特に時間を設けずともよい。
3. 圖案一般に關しては理論篇に詳述してあるから参照されたい。

準備 便化例の掛圖類、範畫、資料等  
 參照 卷末 25 頁、理論篇 73 頁

5. 2は寫生による資料について其の表面を變



要旨

前課に於て説明したる便化法について復習しその知識を確實にすると共に、便化の着色描寫をなさしめ、又カットの意義を知らしめ且つ之を描かせる。

説明と鑑賞

1. 上段諸種の単色畫はカットの例で、何れも人工物又は自然物から便化し、墨一色を以て描いたものである。何れも便化に新味があり表現は齒切れがよい。主にペンによる描寫である。
2. カットの資料となつたものは、皿と魚、飛行機、人形、工場、鳩、蝶、手袋、汽船、梨と葡萄、花、犬の諸種である。
3. カット Cut は一種の印刷圖案で簡単な挿繪とも見られるが、又獨立した意味を持つ宣傳繪畫ともなる。印刷物の見出しに用ひるカットは、そこに印刷された内容と關係ある場面事象等を資料とする場合もあり、或は單に裝飾化の目的を以て内容と何等關係のない繪畫を描くこともあり、宣傳を目的としてつくられるカットもある。
4. カットといふのは元複製するために繪畫や模様を木版に彫ることであつたが、現在は一般に木版小挿繪を初めとして書籍雜誌に挿入され主として文章の見出しに使はれる寫眞版、凸版等の小挿繪を意味する。
5. 便化の意義、其の様式については前課に述べたが、必ずしもこれに煩はされることなく、自由な態度で出来るだけ新しい美を表出するやうに工夫するのがよい。

6. 便化の實例がこゝに四種示されてゐる。資料は椿、葡萄、雞、及び鹿である。第一行は其の寫生畫、第二行はシルエット式（但し上の二圖は線描を加へた）によつたものである。第三行は直線的に便化されずつきりとした近代感覺を表現してゐる。第四行は曲線風に便化されたもので感じは穏和である。第五行は曲線直線並用であるが前者よりも稍々單化を心がけたもの、何れも色彩は上品、形は確實、しかも清新な感じが溢れてゐる。

7. 中田満雄氏 東京美術學校圖案科卒業の圖案家である。(詳細は巻末 26 頁)

指導

1. 便化の練習には實物又は原畫を用意し、紙上に鉛筆を以て初め略畫風に自由に工夫創作を試みさせるがよい。なるべくその中から秀でたものを見つけて本描させ着色をさせる。
2. 前課に於て工夫考案した鉛筆下描をそのまま利用してこれを仕上げさせるのもよい。着色圖案では各色とも繪具の白を混ぜて使用するのが便利である。
3. 同じ資料を用ひ、カットをも考案描寫させる、なるべく單色の素朴のものがよい。

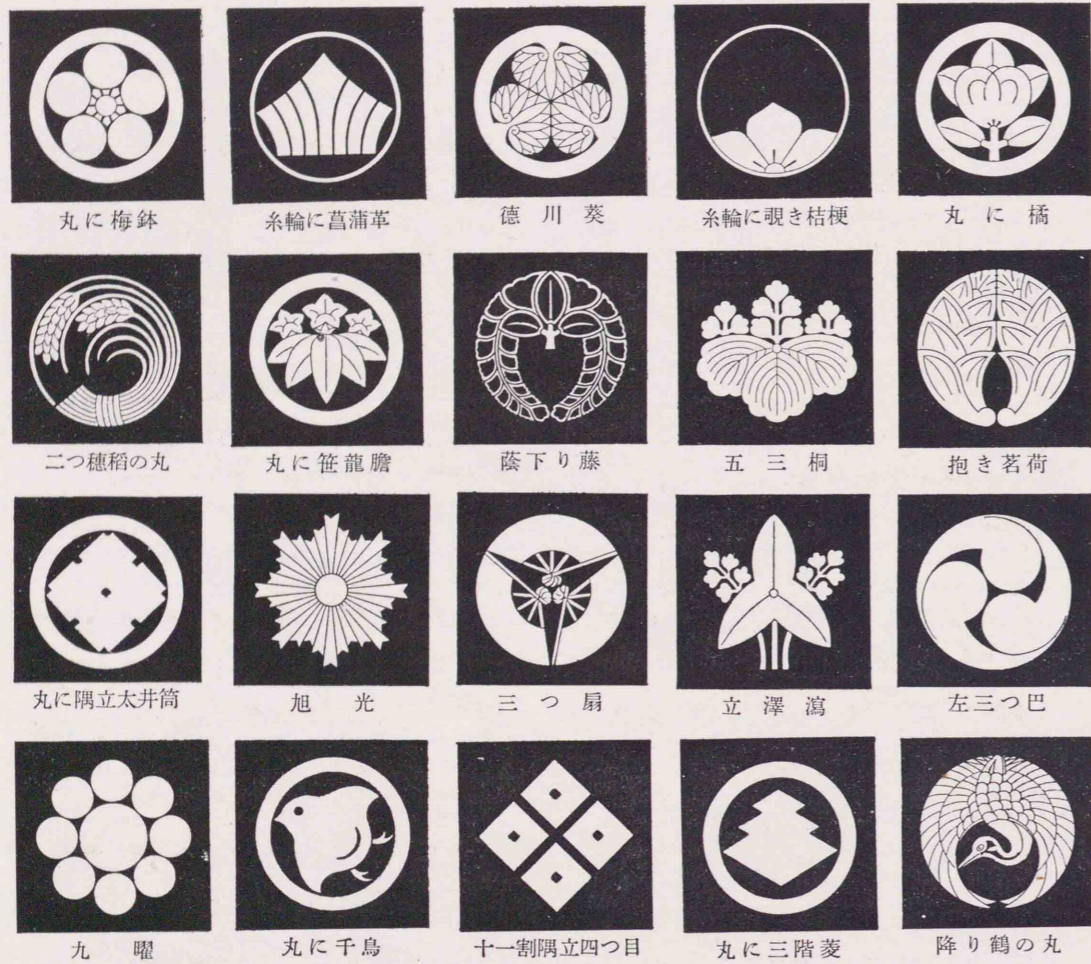
注意

1. カット及び便化の二つを練習せしめるには時間が不足するから、其の何れか一方を描寫させ、他を説明だけに止めてもよい。
2. 或は又便化圖を主體として之を描き、其の餘白に墨一色のカットを描くことにするのも一方法であり、カットを課外に考案描寫させてもよい。

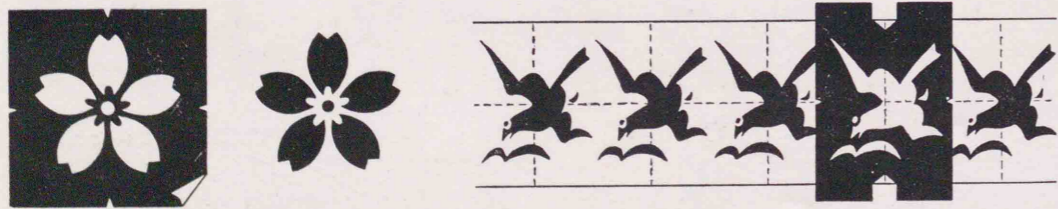
準備 便化の原形となるべき實物又は繪畫  
参照 巻末 26 頁、理論篇 73 頁







●日本の紋所は極めて日本の特色を有し、歴史上及び実用上からも重要な意味を持つてゐるが、當嵌模様としても非常に豪華且優美で圖案的價値に富んでゐる。●日本の紋所は均齊のとれた中にも變化を有し、その構成は頗る巧であるが、また白と黒との明暗對比の美を發揮する好適例といふことができる。



●同一の單獨模様を多數の物に畫く場合や、連續模様を作る場合に、ステンシル法によれば時間と勞力の無駄を省くことができる。

## 25 紋所とステンシル

### 要旨

我國の紋所の優秀なる圖案的價値と特異性を味はしめ、其の構成に關する概念を與へようとする。尙これに附帶してステンシル圖案につき知らしめる。

### 説明と鑑賞

1. 圖示したものは何れも家紋で、又紋所ともいふ長い傳統を持つた我國獨特の紋章である
2. 紋所は源平時代から用ひられ、初め武家から公家の間に發達し、後庶民にも傳はつた。そして家具、什器、衣服其の他につけるやうになつた。

3. 紋所の資料は幾何形、器物、自然物等で、其の選定には次のやうな意義がある。

**尙美的意義** 形姿優美なために紋章としたもの草花、木の葉、魚鳥等。

**指示的意義** 主として姓氏に因んだもの、橘、藤、松等。

**祥瑞的意義** 縁起よきもの、菊、桐、鳳凰、鶴、龜、末廣等。

**記念的意義** 家門の名譽又は祖先發祥の地を記念するため選んだもの、扇、葵等。

**尙武的意義** 武を尙ぶ意義に基いたもの、木瓜、劍梅鉢等。

**信仰的意義** 神佛、基督、儒教、禁欲等の信仰に基づいたもの、卍、龍目、阿部晴明紋、巴紋等。

4. 日本の紋所は白と黒の變化による單獨模様として、便化の直截明快、構成の美事さ、實に世界無比の優れた圖案であり、所謂日本の圖案として特色がある。

5. 圖示した紋所二十種、夫々に特徴があり、この中植物資料によるものは梅鉢、菖蒲草、徳川葵、桔梗、橘、稻の丸、笹龍膽、下り藤、五三桐、茗荷、澤瀉、菱の各種で、動物資料は千鳥、鶴、天體は旭光、九曜、器物は井筒、三つ扇、信仰上のものは三つ巴、幾何形としては四つ目である。

6. これ等の紋章について次に略解を述べる。  
**丸に梅鉢** 大圓の中に五小圓を内接させ梅を便化したもの。

**糸輪に菖蒲草** 菖蒲草は染草の一種で青又は萌黄地に菖蒲の花葉を白抜にし鍔や鞍や襷皮などに用ひたものである。

**徳川葵** 徳川家の紋所、葵の葉を實に美しく便化し排列してゐる。

**糸輪に桔梗** 細い輪に桔梗を覗かせたもの。

**丸に橘** 橘の花を美事に便化したもの。

**二つ穂稻の丸** 穂を便化して圓形に纏めたもの。

**丸に笹龍膽** りんどうの花の特徴がよく現はれた優れた圖案。

**蔭下り藤** 下り藤の圓、黒地に白抜にしたものが陽畫で、細い描線で現したものは陰繪である。

**五三桐** 桐の花の数によつてかくいふ五七の桐は長くも我皇室に於せられて使用になられる。

**抱き茗荷** 抱き合ふ形に排列された茗荷の丸。

**隅立井筒** 井戸杵を資料としたもの、隅で立つてゐるからかくいふ。

**旭光** 太陽の光、現に警察關係の紋章となつてゐる。

**三つ扇** 開いた扇面の組合せ。

**立澤瀉** 澤瀉の葉と花の便化。

**三つ巴** 巴の紋、二つ巴、三つ巴、左、右、長尾巴などがある。

**九曜** 日、月、火、水、木、金、土、<sup>ラゴ</sup>羅漢、<sup>ケツ</sup>計都を九曜といふにたとへたもの。

**丸に千鳥** 千鳥の便化、普遍化された形である。

**隅立四つ目** 幾何形を資料としたもの、十一割は端から端までを十一に割つて三、六、九の目を黒くし他を白抜きにした意。

**丸に三階菱** 菱形を三つ重ねたもの、資料は幾何形であり植物である。

**鶴の丸** 飛翔する鶴を便化して圓形にしたもの昇、降共にあり。

7. **ステンシル** Stencil とは型紙に模様を切り抜き、布、紙其の上のせて切り抜いた型の部分から色を塗抹することである。その方法を型置法、摺込法などといふ。紙の上に型紙を載せ直接に刷毛で色を摺込んで圖案をつくる。

8. 圖示したものは櫻の花の型紙とそれによつて描かれた模様、及び鳥の型紙とそれを使用した二方連続模様の實例である。

### 注意

1. この機會に生徒各自の家の紋所を描かせるのがよい。そして其の由來を調べさせ、我國の家族制度に於ける家系の重要さを考へさせたい。

2. 現在家紋がどんな風に實用化されてゐるかについても調べさせる。

**準備** 紋所のある實物數種

**参照** 卷末 27 頁、理論篇 75 頁



## 26 當嵌模様

### 要旨

幾何形又は自然物を資料として或る輪廓内に適合する模様の構成法を知らしめ、且つ之が考察描寫の練習を行はしめる。

### 説明と鑑賞

1. 當嵌模様とは或一定の輪廓内に適合して他に連続することなく全く獨立的に構成せられる模様で、圍み模様又は單獨模様、適合模様等ともいふ。
2. 當嵌模様はその輪廓内に單位一つをうまく適合させてもよく、又同一單位を繰り返へして配置してもよく、又違つた形のもの二三種組合せて適合せしめてもよい。詳細は理論篇第二篇第五章を参照されたい。
3. 上段左は特殊な八出形に當嵌められた百日草を資料とした圖案、左右均齊な單位を一つ入れたもの、赤系の類似色と綠及び紫により明快な上品な配色である。
4. 上段右は圓形内に適合された幾何的模様、資料は弧と直線と圓である。色彩は赤と紫と青の賑かな配合である。
5. 中段左は半圓形の中に描かれたとびうをの模様、版畫風の便化、色は青と黒の單色に銀白色の魚と浪である。便化も色もすつきりとした感じがある。
6. 中段右は正方形内におかめいんこの自由な手法による適合、橙色の類似色と綠及び黒による華麗な配色で、クレイオンの黒を使つてその排水性並に削取の手法を應用してある。
7. 左は正六角形の中に當嵌められた花瓶と花と蝶、杉浦氏の得意とする黒を基調とした描

## 杉浦非水

振りである。地色は暗朱、紫や黄や綠が使はれてゐるが、落ついた美しさである。

8. 下段右は正三角形の中に當嵌めた蜻蛉の模様、倒立の位置に置けば左右相稱の構成、色彩は青と黒と少許の赤と綠。
9. 杉浦非水氏 圖案界の第一人者、多摩帝國美術學校長(詳細は卷末 29 頁)

### 指導

1. 單純な幾何形を輪廓とし、その中に當嵌める模様を考案描寫させる。
2. 資料は幾何形又は既に寫生したところの花弁、果實の類からとり、これを如何様に當嵌めるかを工夫させ、便化構成せしめる。
3. 配色は餘り多數の色を使はず、又生の色を用ひず、泥繪具風の描方によつて着色せしめる。水彩繪具に圖案用の胡粉を用ゐればよい。
4. 下描は薄紙に描き、別に畫用紙上に地塗をした上にこれを當て、模様を轉寫し、着色仕上の順序とする。

### 注意

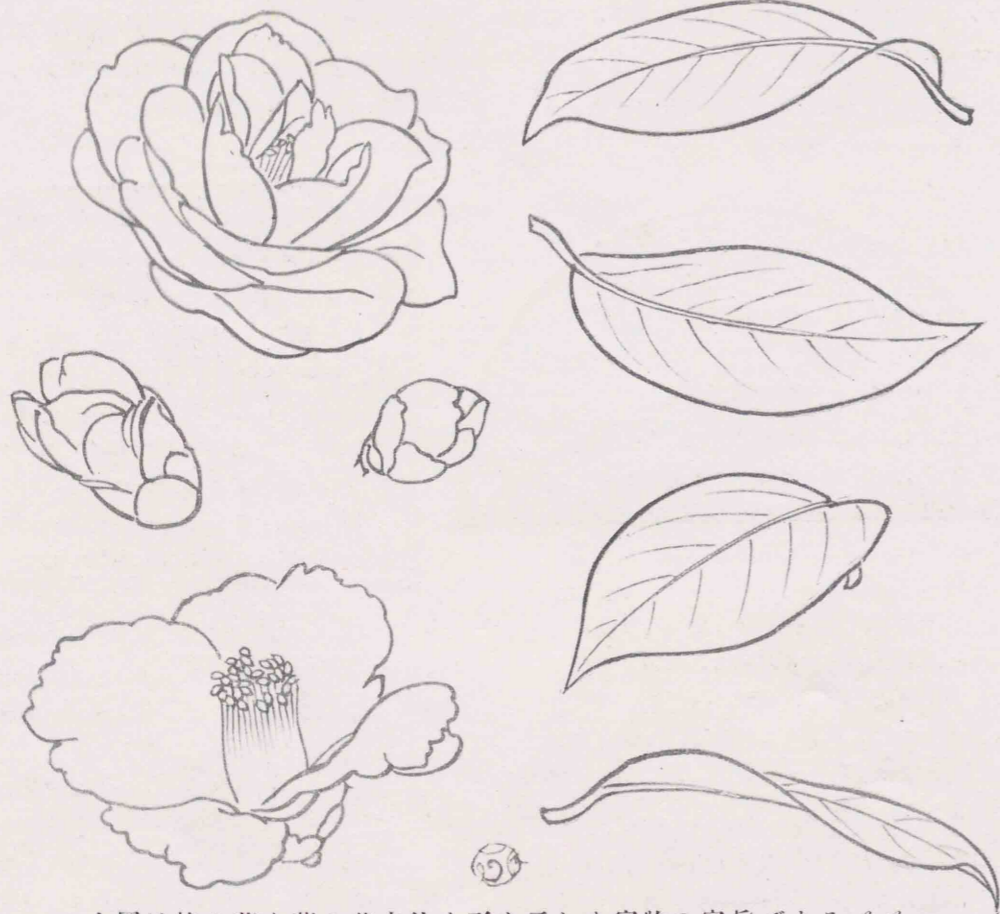
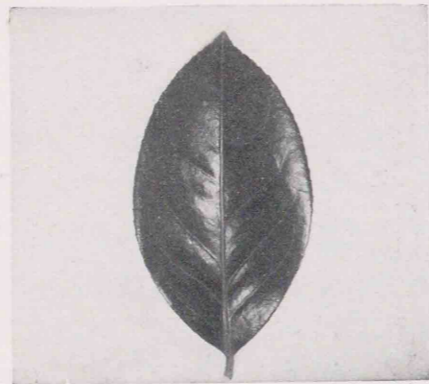
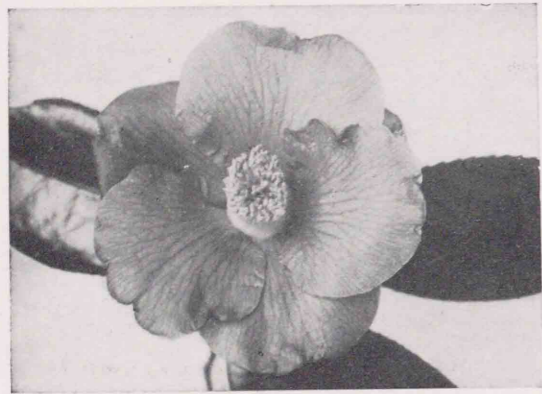
1. 當嵌模様の輪廓とすべき幾何形の描き方は第三學年の平面幾何圖法に於て授くるのであるが、便宜上ここで簡易な方法を教へるがよい。
2. 當嵌模様は、土瓶敷、紋章、皿、クツシオン等に利用される。木の盆に直接圖案せしめてこれにニスで塗仕上げし、實用に供することを試みてもよい。

準備 當嵌模様の成績品、資料とすべき實物及び繪畫その他。

参照 卷末 29 頁及び理論篇 70 頁。







●上圖は椿の花と葉の基本的な形を示した實物の寫眞である。かかる實物の基本的な形も、見様によつては色々の變化ある形に見えるものである。●下圖は種々の變化ある形を毛筆で畫いた寫生圖である。寫生に際して多くの場合はこのやうな自由な形を畫くものであるから、その變化の有様をよく觀察して畫くべきである。●毛筆の線描の濃淡・強弱・抑揚等は、そのものの形狀や質感を表現するに役立つことに注意し、工夫研究すべきである。

要旨

椿の葉と花の描き方を説明して毛筆畫に於ける形態描寫の基本となるべき描線の知識を與へようとするのが目的である。

説明

1. 上段は何れも寫眞による椿の葉及び花である。椿は觀賞用のものと山地に自生するものとある。葉は長楕圓形で先端尖り、光澤があつて厚く、縁邊に鋸齒がある。花は單瓣、重瓣、紅白、斑等多種多様であるが、ここに示した寫眞は單瓣のものである。

2. 毛筆の線を以て描かれた圖は花と蕾と、葉である。花は重瓣と單瓣、所謂八重椿と一重椿、蕾は固いものと少々咲きかけたところと二種である。

葉は裏表種々な姿態を寫してゐる。

3. 花瓣は柔く、蕊は固く、葉脈は勢がよい。これ等の感じは一々描線にうかがはれる。線には濃淡、強弱、緩急の使ひわけがあつて、質感はこれによつて表現される。

4. 花瓣にはふつくらとした柔い線が殆ど緩急なく使はれて居り、雌蕊には勢のよい緩急ある描線が用ひられ、蕾の描線には變化と強弱があり、又葉の外廓線は始め強く緩く終りは細く急に、しかも少々太くなつて厚みを現してゐる。葉脈は特に流暢に引かれ、始めと終りは緩急の差が著しい。

5. 線描だけで表現した繪畫を白描といふ。線描はその技巧が最も困難でこれが練習には専門家と雖も多年を要するものであるから生徒が僅かの時間に學習することは決して容易な業ではない。

6. 本圖は初め鉛筆を以て下描をし、次に毛筆を以て本描したものである。線描には専門的

には削用筆、線書筆等を用ひる。

7. 小泉勝爾氏 東京美術學校教授、日本畫家である。(詳細は卷末 30 頁)

指導

1. 本圖を臨畫して描線の練習をさせる。
2. 鉛筆で下描をさせ中墨を用ひて本描させる。中墨といふのは濃淡の中間にある墨色のことである。
3. 線の引方については總じて筆の運びは遅い方がよい。緩急強弱よく使ひ分けて實物の感じを出すやうにつとめる。

注意

1. 描線は墨と毛筆とによる表現であるが、下描としては鉛筆をかるく用ひて形をとらせる。用紙は日本紙を用ひてもよいが少々取扱に習熟を要するから、本時は畫用紙を用ひることにする。墨は毛筆畫に於ては大切な材料で、唐墨、和墨兩様用ひ、且つ相當高價なものであるから生徒にはかかる専門的の用意をさせるに及ばない。習字用の和墨でよく、又筆も同様の細筆を用意させる程度でよいと思ふ。尤も専門的の用意が出来ればこれに越すことはないが。墨は硯を用ひて十分に磨り、これを別にパレットに移して濃淡を自由に使ふやうにする。墨には濃淡に従つて上墨、中墨、淡墨の三色がある。その使ひわけは一般に強いところを濃く弱いところを淡く、筆法は線に滯滞なきやうに注意させる。
2. 毛筆畫に於ける精神陶冶としては心を落ちつけ、無我の境にあつて決定的の線を引かうとする努力精進が中心である。日本畫が寫形よりも寫意を尙び、精神的である點及び我國の長い傳統であるところの日本畫の美點についても描線を中心にして觸れるがよい。
3. 毛筆畫については理論篇 49 頁に詳述してあるからこれを参照せられたい。

準備 椿の葉及び花

参照 卷末 30 頁、理論篇 49 頁



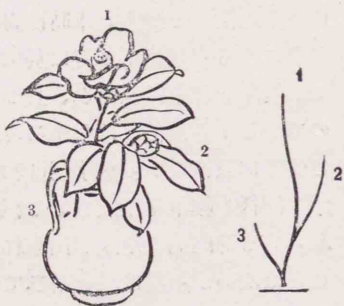
要旨

壺に挿した椿を寫生させて其の特性を觀察し毛筆による表現の力を養ひ、兼ねて日本畫の趣味を味はしめる。

説明と鑑賞

1. 本圖は青磁色の壺に挿した椿の枝で、花は單瓣の紅椿、十枚の葉と一つの花と一つの蕾である。
2. 繪の主題となるものは椿で畫面のスペースの大部分を占め、これに壺が配されてゐる。壺の形と大きさはこの場合作品の安定感の上に大きな關係があるが、本圖は胴の廣い壺に椿が二段の變化をなして挿入され釣合のとれた極めて美しい構圖をつくつてゐる。

由來花を活けるには花器の形と大ききとによつて花も其の形と大ききを顧慮してゐるが



總じて三段又は四段の變化を考へて釣合をよくしてゐるのである。

3. 描線は謹嚴な描き方で花や葉や蕾が着實に寫されてゐる。一線一劃苟もしないといふ態度で自然を觀察し表現して餘すところがない
4. 色彩のとり合せは實に美しい。青磁色の花瓶と、緑色の葉とは類似色の配合で穏和な感じを與へるが、これだけでは動的の美しさはない。然るに赤色の花と蕾とが所謂萬綠叢中紅一點の美しさを如實にし畫面を活動的な明快なものにしてゐる。赤と緑は互に餘色の關係であるが、凡て餘色の配合は派手な感じを與へる。
5. 小泉勝爾氏 東京美術學校教授(卷末30頁)

指導

1. 毛筆による描線を主とするためにはモデルは近くに置く方がよい。生徒各自の机の上にこれを置いて、各々適當な位置から寫生する。
2. 初め鉛筆を淡く使つて下描をする。全體から部分へ描き進めることについては前に述べた通りである。
3. 花、葉、蕾の特性についてはよく觀察して正しく寫しとるやうに心掛けしめる。花瓣の重なり具合、葉柄が枝についてゐる様子、葉脈の方向、葉の外廓、捻れた姿態等特に注意を要する。
4. 下描が終れば、その上へ線描をさせる。線をひくには呼吸を落着け姿勢を正し、最初にして最後の一筆といふつもりでかゝらねばならない。
5. 描線の緩急、強弱、鋭鈍、墨色の濃淡はモデルに即して考へるやうに、又必ずしも見えた通りの線を全部描く必要はない。適當に略筆することも大切である。
6. 着色は畫面の上部から下部に及ぼす。一回ですむ場合もあり、何回も塗り重ねる場合もあるが、個別的に仕上げて行かないで全體を並行的に描き進めるのがよい。花と葉にはぼかしの手法が用ひられ、花の蕊及び壺のハイライトは白が塗られてゐる。

線描は削用、着色には彩色筆、隈取筆を用ひ、繪具は日本畫用棒繪具及び粉繪具、用紙は禁水引畫箋紙を用ひるのがこの種の寫生畫には普通とされる。(理論篇49頁参照)

注意

1. 取扱上の便宜から用具材料は水彩畫用のものを用ひしめる。尙臨畫教材として取扱つてもよい。
2. 日本畫と稱してゐる畫風につき一般的の解説を與へる。(理論篇49頁参照)
3. 毛筆畫と水彩乃至鉛筆畫との差異につき考慮せしめ、毛筆畫が明暗陰影を明瞭に取扱はないで表現することについて知らせる。

準備 椿と壺

参照 卷末10頁、理論篇49頁







- 1・2・3は幾何的模様、4・5・6は自然物應用の模様である。
- 1は唯一つの曲線を単位として繰返へし、その曲線の間を塗りかへたに過ぎない。2は巾織ぎにした線の間を交互に塗りかへたものであるが、同一の形をした白地と黒地とは互に入替つて見えるから、この様な模様を入替模様といひ、6の様に一の単位の半分を陽畫にして半分を陰畫にしたものを片身替模様といふ。

## 29 連続模様 その一

### 要旨

規則的な排列による四方連続模様の構成法を知らしめ、且つ考案描寫を實習せしめる。四方連続模様の意義及び應用については既授教材と聯絡を圖りつゝ知識を確實にする。

### 説明と鑑賞

1. 連続模様には二方連続模様及び四方連続模様がある。二方連続模様は左右に連続進展し、四方連続模様は上下左右に連続展開する模様である。圖例は何れも後者に屬する。
2. 圖示したものは何れも四方連続模様の骨式と其の運用とを見せたもので、何れも規則的な排列によつてゐる。
3. 圖例1、2、3は何れも幾何的資料による平面模様であり、4、5、6は何れも自然物を應用した平面模様である。
4. 1は方形式を基礎とし、一曲線を移動した四方連続模様で、白と、濃淡の黒との三色の變化によつたものである。構成の上からは一釜内の曲線が上下左右に繰返へされたものである。
5. 2は方眼を基礎として萬字つなぎをつくり地塗の黑白二色によつて入替模様としたものである。黒と白との面積形状が皆等しい。
6. 3は斜方眼を利用し濃淡二色によつて小形の菱形をつくり、これを適當につないだものである。
7. 4は方形式を基礎とし一つ置きに單位を配した散點模様である。甲蟲を資料としこれが上下左右に續いてゐる。
8. 5は方眼を基礎とした散點模様であるが、

單位同志が繋り合ふ位置に配置されたので模様が大幅に広がつた。資料は草花である。

9. 6は階段式に排列されたさぼてんの模様である。一つの單位の半分を陽畫とし他の半分の陰畫にしたものを片身替といふ。

### 指導

1. 本課は六種の構成法と其の實例を示してゐるが、考案描寫はその中任意の一種でよい。
2. 何を資料とすべきかを豫め考へしめ、これを便化して單位とせしめる。便化は獨創的な清新なものを心掛けしめる。本課に於てはあまり複雑したものより、なるべく簡素なものを扱ふやうにさせたい。
3. 構成は規則的なものとして下圖をつくり、墨一色の濃淡によつて本描をさせる。

### 注意

1. 圖案の考案描寫は案外に時間を要するもので、二時間教材としては正課授業だけでは無理である。自然家庭に於て自習せしめることにならう。
2. 模様の資料は生徒の自由選擇に任せるか、或は適當なものを教授者に於て提示するか、何れにしても便化は獨創的に、表現はきれいにしたい。
3. 都合によつては本課はこれを説明用教材とし、實習をやめさせ、次教材に附帶させるがよい。

準備 四方連続模様の作品各種

参照 卷末31頁、理論篇77頁



30 連続模様 その二 山形 駒太郎

要旨

13 模様の骨式、14 紐による模様、15、16 幾何的模様及び前課連続模様に於ける既授事項を復習しつつ四方連続模様の不規則構成法を知らしめ、且つ考案描寫をなさしめる。

説明と鑑賞

1. 四方連続模様とは上下左右に連続展開する模様で、広い部面を模様で埋めるには四方連続模様によるのが普通である。四方連続模様は染織物、壁紙等に應用される。
2. 本圖に示したものは何れも不規則式の散らし連続模様で、上段右は鳥居と國旗、左は雲と鳥、下段右は幾何形、左は朝顔を夫々資料として模様を構成したものである。
3. 何れも不規則式であるから単位は決定してゐても、必ずしも同一の形ではなく、又排列にも一定の距離、間隔、方向がなく一箇の間に自由に単位を散らして美的構成を試みたものである。
4. これ等各圖案の構成法は先づ一箇の輪廓枠内に模様を自由に散らし、上下左右の模様が互に連絡するやうに配置すればよいのである。
5. 上段右の鳥居と國旗は如何にも日本的の資料で、小豆色地に赤と白の強い表現、それに鳥居の樺色が軟かさを見せて濃刺たる中に上品さが漂つてゐる。印刷物圖案に好適。
6. 上段左はグレーがかつた空色地に暗いブルーの隈をとつて飛鳥をあしらひ、雲に緑と群青と赤と白線とを用ひて澁さのうちに高尚な趣味がうかがはれる。染織圖案に好適。
7. 下段右は一種の幾何的模様ではあるが、方眼にも大小の差があり、模様の大きさも多少の違いを持ち、黄色地に群青と緑と朱とを散

らした美しい明るい模様である。染織圖案に好適。

8. 下段左は青磁色地に濃緑の葉と、赤白の朝顔の花を散らして若々しい美しさと清新な感じを出してゐる。印刷物圖案に好適。
9. 山形駒太郎氏 光風會會員、日本工藝美術會會員。(詳細は巻末 34 頁)

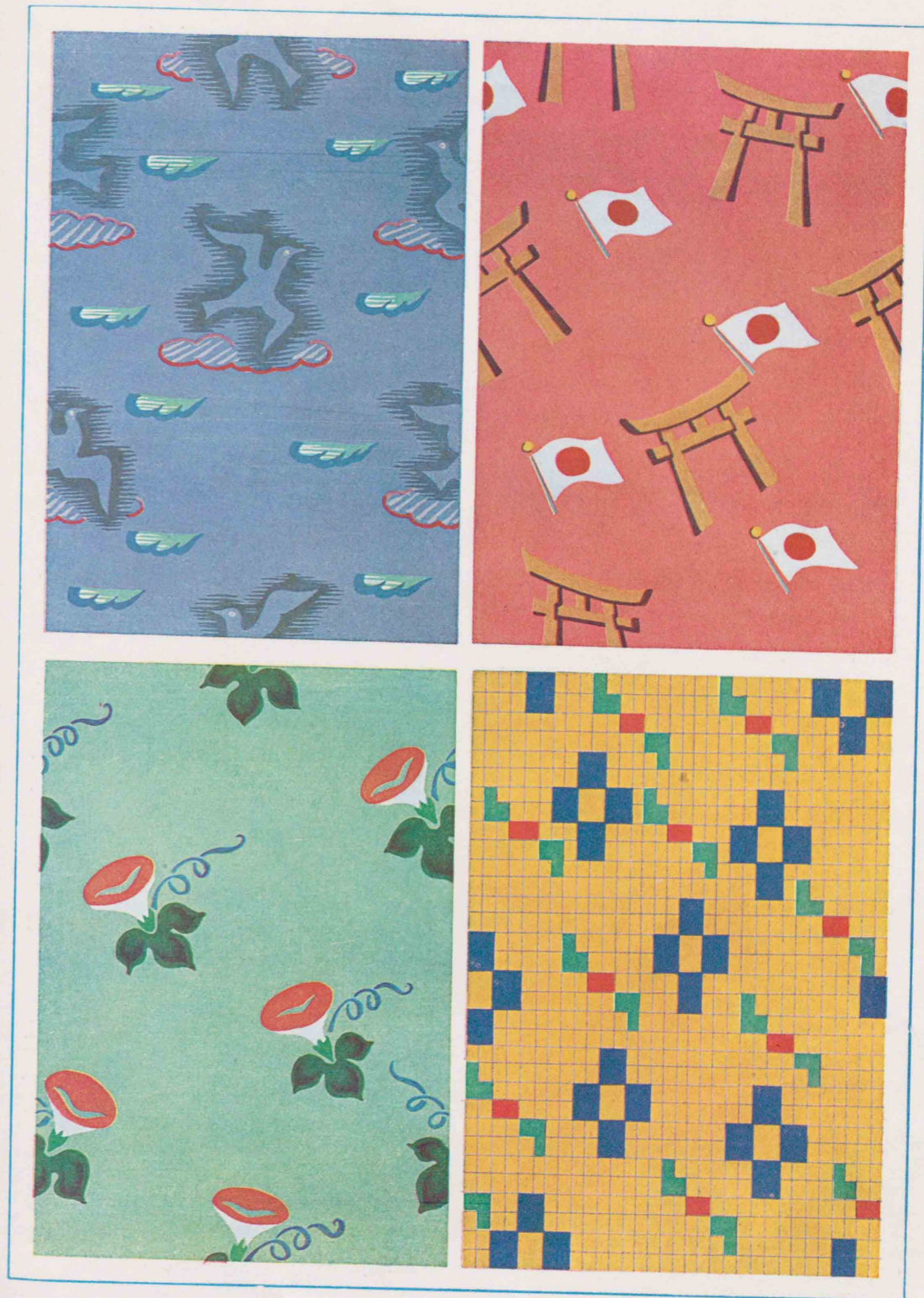
指導

1. 何を資料とすべきかを先づ定めしめ、それを便化して単位とする。
2. 排列は本圖に示すやうな自由散點とし、輪廓枠内に描かせる。上と下、右と左が互に食ひつくやうな模様の置方とする。
3. 単位の繰りかへしを行ふには薄葉紙又はパラフィン紙に形を描き、これを轉寫せしめる。
4. 配色は各自の好みによつてどのやうな色を用ひてもよいが、調和あるものを工夫するやうに指導する。
5. 地色あるものは輪廓枠内に先づ地塗をし、その上に下描をし、後不透明色を以て描いてゆくやうにする。

注意

1. 本課は模様の構成と描寫を主として、単位の便化には多くの時間をかけないやうにする。
2. 四方連続模様の他の構成形式の一般についても説明して置く。
3. 本圖のやうな自由な構成形式に於ては単位は其の形に多少の變化があつてもよい。
4. 二時間教材としては時間が不足するから下描及び仕上は家庭に於てやらせる。
5. 四方連続模様については理論篇 77 頁に詳述してあるから、これを参照せられたい。

準備 四方連続模様の各種作品  
参照 巻末 32 頁、理論篇 77 頁





要旨

既習圖案の應用練習として招待券その他の印刷物圖案を課し、其の考案描寫の力を養ふと共に印刷物圖案の概念を與へることを目的とする

説明と鑑賞

1. 招待券、プログラム、體操大會プログラム表紙、校友會記念帖表紙、學藝會プログラム表紙、入場券、美術展圖録表紙の七種が示されてゐるが、これ等は何れも印刷物に屬する集團會合用の圖案である。
2. 印刷によるべき圖案はこの外繪葉書、レツテル、壁紙、包紙其の他頗る多く、其の構成形式は當嵌模様の外、繪畫模様、續き模様等色々である。
3. 印刷の版式は凹版、凸版、平版に屬する多種多様でこれが詳細は理論篇 87 頁について見られたい。ここに圖示したものは何れも平版中の石版印刷に屬するものである。
4. 次に各圖案の簡単な解説を述べる。

**招待券** 音樂會の招待券である。色は濃淡二色、圖案資料は五線とリーラである。リーラは十七世紀の西歐に發明された樂器。

**プログラム** 番組又は目錄の地圖案で、日本風な風景が上品な色彩で描かれてゐる。文字はこの上へ活字で刷り込む。

**體操大會** プログラムの表紙である。赤と黒と灰の三色の力強い圖案。資料は直線コースと人物である。

**五拾周年記念帖** 櫻に太陽を資料とした、如何にもお祝らしい日本的な圖案、色は空色と黄と赤と桃色。

**學藝會プログラム** 花と舞臺を現はし、臙脂と樺色と灰色と青を使つた新鮮なる圖案。

**入場券** 庭球大會の入場券である。ボールとネットとを資料とした氣のきいた圖案、色彩は岱楮の單色に濃茶の文字の刷込。

**美術展圖録** 展覽會出品目錄の表紙圖案で黄と群青と空色と白其の他を使つた堂々たる圖案で力強い感じを與へる。資料の富士山や五重の塔や青海波が日本趣味で、この展覽會が日本畫並に新日本美術を陳列してゐることが分る。

5. **越田喜作氏** 東京美術學校出身の新進圖案家。(詳細は卷末 36 頁)

指導

1. 右の各圖案を通して印刷物圖案の一般的知識を與へ且つ其の實例をなるべく多く見せる
2. この中一二種を選んで考案及描寫をする。資料は描かんとする目的物に緣故のあるものを用ひるのが普通である。
3. 便化の様式及び配色もその目的物の意味によつて工夫したい。季節のことも顧慮する。
4. 描法は前課に述べた通りである。着色は泥繪具風にする。

注意

1. 教科書所載の圖例を模倣し、又はこの圖案其の儘を資料としてはいけない。新案による獨創的な圖案を作らせることに努める。
2. 印刷の工程も其の大要を附し且つ機會あらば其の實狀を見學せしめたい。

**準備** 各種印刷圖案の實物殊に招待券其の他  
**参照** 卷末35頁、理論篇87頁





教授指導の要項補遺





## 第一圖 角なもの

### 1. 封筒

書状を封入して送る紙袋のことで、状袋又は書翰袋ともいふ。包状の手数を省くために作り出されたもので、その起原は明和の頃と言ふ。封筒はもと略儀のものであるから、初は中以下で行はれたものであるが、好事家が清雅な繪様を刷出して朋友間に用ひ、それが流行して上下の差別なく用ふる様になつたといふ。随つてその形も大小種々あり、繪様に意匠を凝らすものも出来たが、正式には無色を選び、儀式用及び師長への手筒は純白無地、凶禮には無色又は鼠藍色無地を用ふるを禮とし、型紙繪様を刷出したものは略儀用とする。而してその表面には先方の宿所氏名、宛名の脇には協附を書く。凶事の手筒には協附を附けない。

本書第一圖にあるのは、西洋の制に倣つた角形の封筒で、書翰袋として用ふるのみならず、祝儀袋その他にも盛んに用ひられる。

**封筒と郵便規程** 一時封筒に開き窓をつけたものが流行し郵便に使用されたが、昭和十三年五月一日からは、開き窓の封筒を禁止し、セロハン等透明の紙を貼つた透し窓封筒を奨励してゐる。この窓の大きさは縦10糎、横4糎以上で、居所氏名のはつきり讀めるものでなければならぬ事になつてゐる。

封筒の大きさについては、臨時産業合理局内用紙標準化委員会でその標準が定められたが、郵便規則では角型一號封筒（縦382糎、横287糎）を最大限度と定められてゐる外制限はない。

### 2. インキ Ink

本圖はガラス製のインキ壺を入れた箱を題材としたものである。

インキは、發明の年代が明かではないが、支那及び埃及などの古代にすでに使はれてゐた。古代のインキは、油煙をゴム質或は膠の溶液と混合したもので、現在の墨汁に似てゐた。

タンニン鐵インキ即ち今日用ひる黒インキは、十五世紀の頃から用ゐられてゐる。

アリザリンインキその他コールタール染料を用ゐるインキは、凡て十九世紀以後に發明されたものである。

**インキの製法** インキは色により赤インキ、青インキ、黒インキ等ある。

赤インキはブラジル木の澱粉2封度を3ゲレンの醋酸中に入れ、その溶液を1ゲレン半に煮つめ、明礬1封度半を加へて攪拌し製出する。又ブラジル木4分を60分の水に溶解して36分に煮つめ、アラビアゴムの四分の一及び第一鹽化錫の八分の一を混和する別法がある。

普通の青色インキは洋靛<sup>ヘレンス</sup>の6分と蓼酸の1分とを粉末にし、少しづつ水を加へて捏ね交ぜ、全く平滑な糊状塊となし、この糊状塊を多量の蒸溜水に溶かして製する。

黒色インキはタンニン酸40、硫酸第一鐵25、木醋酸15、アラビアゴム15、アモリン青5、水900の割合に混和し、密閉し、放置しておき、更に濾したものである。



第二圖 書物 その一

1. 装幀

装幀とは書籍の外装のことで表紙、見返し、扉、帙、外箱などに關する材料、意匠、模様、文字、色彩、構造などの一切を指していふのである。

**表紙** 表紙は書籍の表裏に添へて綴る紙のことで、普通は文字通り紙を使用するが、板を用ひた板表紙、革表紙、クロス表紙もある。その表につけられたのを表表紙、裏にあるのを裏表紙と稱する。

**見返し** 書籍の表紙をめくつた裏即ち表紙裏と、それに相對してゐる頁とを合せていふのである。裏表紙の所にも見返しのあることは勿論である。

**扉** 書籍の巻頭頁のことで、英語でタイトル・ページ Title-Page といふ、こゝには本の標題や著者の名を記すのが例である。そして扉に書いた繪を扉繪といふ。

**帙** 書籍の被とするもので、厚い紙に布を貼つて、折り疊むやうに作るのが普通である、そして洋書には帙を用ふることも少く、和書には現在も盛に用ゐられる。

**外箱** 書籍の破損を防ぐために用ふるボール紙製の箱で、普通の黄ボール紙に他の紙を貼つたものもあり、茶ボール紙のもの、鼠ボール紙のものもある。

2. 書籍の大きさ

書籍はその様式上から大別すれば和本と洋本とに分ち、更にこれを製本上から見れば、大和綴、和装假綴、同本綴、洋装假綴、同本綴などに分けることが出来る。

**大和綴** は又都綴、結綴などとも稱して、二ツ折し

た和紙を正しく裁つて耳貼をするか、或は豫め縦綴をして耳貼りをしたものに表紙を添へ、二箇所で見返し多くの糸で綴ぢ、その結目を表に出して結切りとするものである。

**和装假綴** は二ツ折した和紙を簡単に縦綴して上下及び背の三方を正しく裁つて後表紙をつけ、摺糸で綴ぢ合はせたものである。

**和装本綴** は和装假綴に耳貼りをなし、摺糸又は絹糸の類を以て丁寧に綴ぢ合はせたものである。

**洋装假綴** 数枚づつ紙を重ねて一度折をしたものを若干積み重ね、其の折目の部分即ち背部を正しく揃へ、上下及び小口の三方を正しく裁つた後、一枚の表紙を貼附するか、或は本紙と共に表紙を針金で綴ぢ、三方を裁ちて其の綴目を被ふ爲めにクロスを以て背巻したものである。

**洋装本綴** 假綴のやうに本紙を積み重ねて背部を正しく揃へたものを、綴糸と麻又は布片とで之れを綴ぢ上下及び小口の三方を裁ち、背部に駒みをつけ(圓味をつけないものもある)膠と強靱な紙とで背固めをなし、後表紙を貼附したものである。

3. 書籍の種類

書籍の大きさは和本と洋本とで相違し、古來和本は美濃紙半折判(縦9寸に横6寸5分)と、半紙半折判(8寸5分に6寸)との二種を普通としたが、近時は洋本の菊判に則る寸法のものが多くなつた。下に洋書の大きさを挙げる。(單位は寸)

菊判	7.3—5.0	菊半裁判	5.0—3.7
菊相判	4.8—3.3	四六判	6.2—4.2
四六縮刷判	5.8—4.2	四六倍判	8.5—6.2
四六半裁判	4.3—3.0	三六判	5.7—3.0
大形菊判	8.0—5.5	大形菊半裁判	5.5—4.0

最近規格判といふ型が行はれる。その大きさは次の通りである。

A列5番(菊判に相當)	148耗(4,884)—210耗(6,93)
B列6番(四六判に相當)	128耗(4,224)—182耗(6,006)
B列5番(四六倍判)	182耗(6,006)—256耗(8,448)

尙是等の外に、袖珍判と稱してポケットに入るものの出来るやうな小さなものもある。

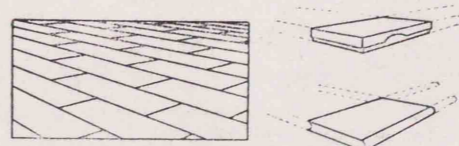
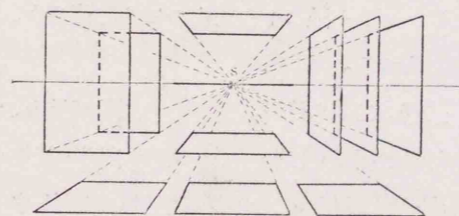
第三圖 書物 その二 木下孝則

1. 書物の遠近法

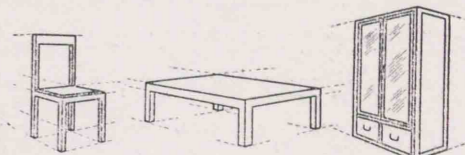
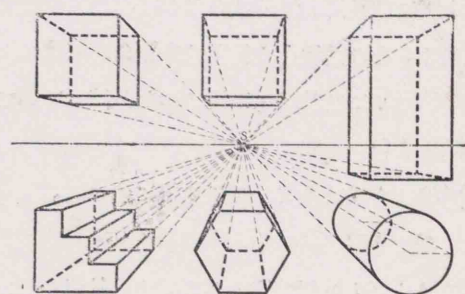
書物の寫生に當つて形の最も誤り易いのは遠近法である。すべて我等の目に映する物體は遠近によつて形に大小長短の差を生ずるのであるが、生徒は往々にしてこれを無視し、遠くにある物體を却つて大きく表現したり、幅廣く描いたりするものであるから、遠近法の概念を與へて置く方がよい。

遠近の理を合理的に扱つてこれを圖法に示したものを透視圖法といふ。

畫者がその前に横はる二條の平行線の行方を注視したとき、この直線は段々接近しあつて遂に遙か遠方に於て一點に會するやうに見える。これを透視圖では、消失點といふ。消失點は畫者の目の高さに相當する點で、これを通つて水平に引いた線は地平線(水平線)である。即ち畫者の前に置かれた書物の相對する二邊は、畫者との距離が多くなるにつれて狭くなり、これを延長すれば遂に一點に會するやうになるのである。このことは寫生上極めて重要な點である。この關係を種々の場合につき次に圖示する。



平面形の透視



立體の透視

2. 作家小傳

木下孝則氏

明治二十六年東京生。前明治大學長法學博士木下友三郎氏の長男で、學習院卒業、京大法科から東大文科美學哲學科に學ばれた。

大正十年二科展初入選、同年渡佛、大正十二年歸朝、同十三年二科展出品樗牛賞、同十四年二科展出品、二科賞を受け、大正十五年前田寛治、佐伯祐三、里見勝藏、小島善太郎の四氏と共に「一九三〇年協會」を創立し、同年春陽會員に推された。

昭和三年再度渡佛、滯佛中、サロン・アンテナンダン、サロン・ドウトンスに出品。昭和九年春陽會を退會。昭和十年歸朝。昭和十年二科會員に推され、第廿三回二科展に特別出品「マドモワゼル・レイモンド」は李王家御買上げの榮を賜り京城德壽宮美術館に納めらる。「I氏の肖像」國民美術協會買上げ、帝室博物館に納められた。

昭和十年二科退會、石井柏亭、安井曾太郎、山下新太郎、有島生馬、裕伊之助、小山敬三の六氏並に令弟義謙氏と共に一水會創立。

〔住所〕 東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ九〇二



#### 第四圖 圓いもの

本圖には茶筒、罐詰及び皿が説明用に示されてゐる。その描法上の説明は本欄に於て述べたから、こゝには説明用に供された茶筒について解説する。

罐詰は次課に於て、又皿は後に述べる。

#### 1. 茶筒

茶筒はブリキ製の筒である。充分乾燥を保てるために空気の流通を断つ必要があり、それには蓋がよく密着する金属がよいのである。普通内蓋を設け、更に被せ蓋をする。

鐵葉は薄い鐵板の表面に錫を引いたものである。鐵葉を展開圖通りに切斷して半田鐵付をすればよい。

#### 2. 煎茶

茶樹の嫩葉を蒸して製するのである。濃綠色で東洋人は勿論、歐米人も愛用する嗜好飲料である。茶葉は摘採の時季により、一番茶、二番茶、三番茶に別つ。その時季は地方で異なるが、大體一番茶は、四月中旬頃より五月中旬、二番茶は六月下旬より七月上旬、三番茶は七月下旬に製造する。

製造は蒸葉・乾燥揉揉・選別の三工程に分つてゐる。

**蒸葉** は釜で水を煮沸し、その上に生葉を入れた蒸籠をおき、蓋をして竹箸にて攪拌、蒸氣の青臭減じて甘い良香を發する頃、蒸籠を卸して急に冷し、蒸葉は葉中の酸化酵素を殺すのが目的である。

**乾燥揉揉** 蒸葉は熔爐場に運び熔爐上で乾燥と揉揉を同時にする。熔爐に木炭を入れて水加減し、助炭ををいてこれに蒸葉を入れ、乾

燥しながら揉揉をする。近來機械によるものが増加、手揉と機械揉の別が出来た。

**選別** 乾燥後茶篩で選別、粉茶と葉柄を除き各等級に分ける。

#### 3. 番茶

摘遅れの茶樹の古芽・古葉等の乾製品である。性質は紅茶と綠茶の中間にある。原料を5分位に切斷し、熱した釜で炙り、茶褐色となり、芳香を發してから取り出して、充分に乾燥する。番茶は風味軽く、且つ製造中に茶素が減少するから常用としても害は少く、廉價で廣く賞用する。

#### 4. 碾茶

覆下園(日覆せる茶園)の茶葉で製造した上等茶で、我國固有の茶道に用ひる。1寸2分位に伸長した嫩葉を摘採り、直ちに篩別して蒸氣を通し、揉揉をせずそのまま乾燥する。乾燥品は篩別けして上茶と粉茶と別け、なほ細目の篩で細度を一定する。これは嚴密に濕氣を防いで貯藏・販賣直前茶臼で挽く。これは細末となれば急に水を吸ひ、品質が悪變するからである。

碾茶は抹茶ともいふ。これは茶道に用ひるもので、ブリキ罐のやうなものには貯藏せず、茶器に入れる。

**茶器** は即ち陶器、漆器、金屬等で造り、陶器では肩衝・文琳・丸壺・茄子・鶴首・瓢單・大海・尻膨等種々の形がある。漆器では棗・中次・吹雪・平棗等の種類があり、金屬木竹器も亦此の形に倣つてゐる。

#### 第五圖 罐詰

島野重之

#### 1. 罐詰

鳥獸・魚介肉・果實・蔬菜等の食品を罐につめて密封し、これに高熱を加へて殺菌したもので、食品の貯藏法としては最も進歩したものである。

**種類** 罐詰はその製法に依り水煮製・味付製・油漬製・砂糖漬製・酢漬製等に區別する。

水煮製は原料を罐につめ加熱したもので、水鹽の外には調味料を加へない。

その主なるものは、鮭・鱒・鮪・蟹・鰻・鮑・牡蠣・帆立貝・北寄貝・松茸・筍・人蔘・牛蒡・落・慈姑・青豌豆・アスパラガス等、味付製は醤油・砂糖・味淋その他の調味料で味付したもので、鰯・鯔・鯖・鰹・鮪・鮎・鮎・鯨・浅蜆・蛤・海苔等の大和煮・甘露煮・照燒・蒲燒・佃煮等とその外に羹汁・福神漬等がある。

油漬製には鰯・鮪、酢漬製には、鯀・小鯖・鰯・鯔等、又トマトソース漬もある。

砂糖漬には、水蜜桃・梨・櫻桃・巴丹杏・栗・鳳梨等及び葡萄や無花果、莓等のジャムがある。その他練乳等種々ある。

**製法** 食品を適當に調理しそのまま又は注入液と共に罐に八分目程入れて密封する。罐はブリキ板を機械にかけて罐胴や蓋底を作り、これを白鐵で鐵付し、又は卷縮機で卷縮めて製する。昨今は二重卷縮罐(サ=タリ罐又は衛生罐といふ)がよく使用される。肉詰め及び密封を終つた罐は、これを沸湯中に入れるか又は蒸釜に入れて罐が膨脹するまで加熱し、後取り出して蓋に細い錐を用ひて小孔を穿ち、内部に發生した瓦斯を脱出させると同

時に、白鐵で密封する。これを瓦斯抜といふ。

多量生産を行ふ場合には先づ假縮機にかけてゆるく蓋附し、脱氣函を通過させて加熱し、罐胴及び蓋の間から瓦斯を脱出させた後直ちに卷縮機

で蓋と胴とを卷縮め、完全に密封する。この



各種の罐詰

密封した罐詰は、再び蒸釜に入れて殺菌した後、釜より取り出し或は釜中に冷水を注入して速かに冷却させ、こゝにその製造を終る。脱氣、殺菌、加熱の温度や時間は内容物の種類によつて一定しない。

#### 2. 作家小傳

島野重之氏

明治三十五年四月、滋賀縣彦根町生。

昭和二年東京美術學校西洋畫科を卒業。現に聖學院中學、女子聖學院等に教鞭をとられる。

美術學校在學中、光風會、白日會、中央美術展等に出品、昭和二年第八回帝展へ「手紙」初入選。それ以來帝展及び新文展にも毎回入選。昭和十二年第一回文展にて「水邊初夏」三百號特選。昭和二年以來美校當時の同級生にて上社會展を年一回開會。

昭和十二年度昭和洋畫獎勵賞受賞。光風會展で光風賞一回受賞、白日會展で三回受賞された。現に光風會並に上社會員である。

近作としては、昭和十三年第二回文展「室内」、昭和十四年第三回文展「お茶時」等がある。

〔住所〕 東京市瀧野川區田端町一四九



1. 盆

よく知られた容器の一種で、角型、長方形、丸型などある。材料は木材を主とするが、銀、アルミニウム、ブリキ等も使用される。ガラスを填込んだものもある。木材製のものは、松、樺などが普通使用され、割盆とする。漆塗のものや、ニス塗りのものがあるが、松盆は生地のまゝよく拭込んだものは茶人に愛賞される。

漆器に就て 漆の塗方には、春慶塗、搦合塗、固地塗、蠟色塗、變塗等多くの種類がある。漆器に就ては理論篇に詳しいからこゝには省く。(理論篇第二篇第五章・圖案に關すること73頁参照)

産地は和歌山の黒江、能登の輪島、飛騨の高山、金澤、山中、静岡、福島の間津、京都、若狹、富山、高岡等著名である。

2. なつみかん Citrus aurantium

夏橙 芸香科

主として暖地に栽培する常緑の灌木で、葉は廣く長く綠色で葉柄は翼状を呈してゐる。五月頃白色の五瓣花を開き後果實を結ぶ。冬季に黄色となるが充分の佳味がない。翌年の盛夏になれば果皮が黄白色となり美味となる。本種の變種には左の種類がある。

なるともかん 鳴戸蜜柑 淡路洲本原産で果實が圓く皮厚く表面は粗糙で熟すると青黄色となる。初夏に採取し始め盛夏の頃に及ぶ。

やまぶきみかん 山吹蜜柑 肥後熊本原産で、果實は山吹色、形は稍圓形で頂部が少しく尖り、果皮は厚く平滑で光澤がある。

あなともかん 穴門蜜柑 長門萩に産する小形で翼状のない葉柄を有し、果形は最も大で

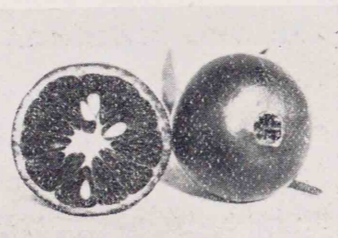
圓く、稍扁圓形をなす。果皮は厚く外面は粗糙で高低を有する。開花は他の蜜柑類と同様に翌年三四月頃に青黄色となり、夏に至つて黄熟する漿液が最も多い。

3. ネーブル Navel orange

臍甜橙 芸香科

米國カリフォルニア州より輸入した種類で、一名ワシントンネーブルオレンジといふ。樹質が

強壯で果實は中等大で圓形若くは橢圓形をなし、皮は平滑で鮮紅色



ネーブル

囊は極めて薄く、10個乃至13個を有し、漿液が多く味が甘く、他の柑類に優つた佳香を有するのみならず、久しく貯蔵に堪へ五六月頃まで樹上においても漿液が乾固することなく夏蜜柑と同様に夏まで保存し得られる。

4. 作家小傳

松村 巽氏

明治二十六年一月東京生。

初め白馬會研究所に入つて洋畫の手ほどきを受け、のち太平洋畫會研究所に移つて中村不折、満谷國四郎氏等の指導を受けられた。

明治四十四年文展第五回に「静物」を出して褒状を受けらる。大正六年第十一回文展、七年第十二回文展、十年第三回帝展、十三年第五回帝展等に出品。大正十四年第六回帝展に「面ある静物」を出して特選の榮譽を膺はる。

大正十五年第七回帝展には、無鑑査出品となり、昭和三年第九回帝展に「黄布の静物」を出して再び特選となり、昭和四年四月帝國美術院より推薦され新文展にも出品を續けられてゐる。〔住所〕 東京市本郷區駒込林町一七七

1. 日本畫

東洋畫のうち支那畫印度畫等に對して日本畫の稱呼がある。尤も日本に於ける繪畫の遺跡には佛教渡來以前のものはないから、日本畫は佛教渡來以後日本に行はれた繪の全部を指すことになる。しかし初めが支那朝鮮から渡來されたものであるから、その初期の作品に於ては異邦人の手になつたもの、若干をも含んでゐる。

明治になつてから日本畫の稱呼は一方新に輸入された西洋畫との對比の上に用ひられるやうになつた。洋畫家、日本畫家といふ區別が現在に於ても存してゐる。しかし其の畫風、用材の如何に拘らず日本人の手になつたものはすべて日本畫であると主張する聲も多くなつた。またさうあるべき筈である。日本畫についての詳細は理論篇を参照せられたい。

2. 勾勒法沒骨法

日本畫の筆法ではこの二つを基礎とする。勾勒法といふのは所謂線描である。勾勒はもと支那の言葉で和譯して二重描きといふ。即ち物の輪廓を骨描して後、其の間に色を填充する方法で、着實且つ嚴格な表現形式である。描線は日本畫では特に重要な仕事とされてゐる。

沒骨とは所謂骨をかくすことで、東洋畫の術語である。勾勒描法に對していふ。和譯して附立と呼んでゐる。勾勒描法の如く輪廓線をひくことなしに直接墨汁なり繪具なり、或は又墨に繪具を含ませつゝ肉々に物の形を描くのである即ち形と色と同時に描き表はすのが沒骨法の特徴である。西洋畫の水彩畫は殆ど沒骨法による筆致であるといへる。

3. 礬水引

用紙に礬水を引くことは墨や繪具がにじまぬためである。繪絹にも紙にも礬水を引く。礬水とは膠を水に溶解させ、それに少量の明礬を加へたもので、量は一定してゐないが、普通は水一合に膠一匁と明礬半匁位を入れたものが適當されてゐる。先づ數時間水に浸して軟かにした膠を鍋に入れて湯煎し、膠がよく煮立つたのを待つてそれを冷やしてから明礬を投ずる。次いで之を布で漉して刷毛で斑なく絹や紙に引くのである。絹は特に張り、紙は張り板が假眼に張つて施工する。三千本膠又はゼラチンを用ひる。紙にはすべて礬水を引くとは限つてゐない。礬水を

引かぬ畫紙などは、墨のにじみ具合が面白く、頗るその墨色を珍重する。

4. 顔彩

日本畫用繪具の普通品を顔彩と呼ぶ。煉製で磁器の小さい長方形の皿にはいつた輕便安價なものである。朱、黄、岱赭、藍、紅、草、紺、胡粉等が一組となつて小箱にはいつてゐる。

日本畫繪具はこの外は粉末繪具、棒繪具等で、其中植物質、動物質のものは少く、大抵は礦物質のものである。詳細は理論篇を参照。

5. 落款

書畫、彫刻、工藝品等に作者が自署し又は雅印をおすことである。其の位置及巧拙如何によつて作品が引立ち又は傷つけられる。落款には圖案的考慮が必要である。

落款は雅號又は氏名を書いただけでもよし、或は雅印を捺しただけでもよし、尙又雅號や姓名の下へ雅印を捺してもよい。作者の自由であ

6. 作家小傳

常岡文龜氏

明治卅一年十一月、兵庫縣水上郡柏原町上小倉生。大正十一年東京美術學校日本畫科本科卒業。結城素明門下。昭和十四年文展審査員。

昭和三年母校日本畫科助教授となり今日に至り後進の指導に當られつつあり、又新樹會、日本畫院、九阜會等の會員、大日美術院無鑑査として斯道に活躍せられつつある。

大正十年美校在學中、第三回帝展に「百日紅」初入選。爾來、第四回帝展「茶園の初秋」、第九回帝展「竹間秋色」出品。昭和四年第拾回帝展出品作「鷄頭花」特選となり、第拾一回帝展「涼鷄」無鑑査出品。第拾二回帝展「深翠濃綠」、第拾三回帝展「茶園」出品。昭和八年第拾四回帝展出品作「棕桐」にて再度特選となり、第拾五回帝展「カンナ」は政府買上の光榮を膺はれ、帝展改組後の新文展にも無鑑査の地位を得られた。氏はまた海外美術展に對して出品多く、昭和四年巴里日本美術展覽會には「栗鼠」を、翌五年柏林日本美術展覽會には「ひるがほ」を、同年西班牙トレド日本美術展覽會には「柳の花」を、昭和六年バンコック日本美術展覽會には「朝顔」を出品され、邦畫のために氣を吐かれてゐる。

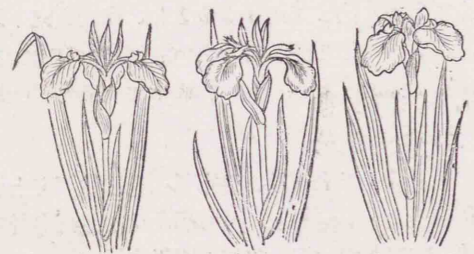
〔住所〕 東京市瀧野川區田端町六〇八



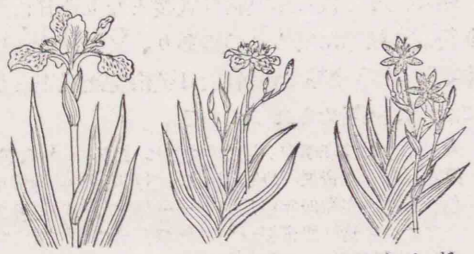
1. かきつばた *Iris laevigata*

杜若・燕子花 鳶尾科

西比利亞の中部以東、滿洲及び本州中部地方以北の池沼水邊濕地等に自生する草本で、地下の根莖は多年生存する。葉は劍狀で60種より90種に達する。柔靱で淡色、主に花よりも超出してゐる。あやめ、はなしやうぶの如き顯著な中肋狀の脈がないのを特徴とする。夏日花莖を出して莖頭に通常紫藍色の花を開き、花は比較的小形である。内花蓋は筒狀披針形で、直生して先端の尖るものが普通であるが、複雑化してゐるものも園藝品種にはある。觀賞用として栽培される。



かきつばた あやめ はなしやうぶ



いちはつ しやが ひあふぎ

2. あやめ *Iris sanguinea*

溪蓀 鳶尾科

はなあやめとも稱する。山野に自生するものもあるが、多く觀賞用として庭園池邊に栽培される多年生草本で、かきつばたより小形で葉もややせまい。外花蓋の中央は黄色を呈する。瓣

部は廣濶で内面に暗紫色の網狀斑紋を有してゐるのでかきつばたと區別されやすい。

しろあやめ、くるまあやめ、こあやめ、スペインあやめ、ねぢあやめ、なんきんあやめ、オランダあやめ、ひなあやめなどある。

3. はなしやうぶ *Iris ensata*

花菖蒲・玉蟬花 鳶尾科

あやめと共にかきつばたによく似てゐる植物である。觀賞用として水邊濕地等に培養される多年生草本で、葉は劍狀で先端が尖り、中肋狀の脈を有してゐることはあやめに似てゐるが、この種の中肋は彼に比して最も顯著である故、判別の特徴とする。六月頃葉間より花莖を出して其の頂に近く普通三花を開く。高さ1米以上に及ぶものがある。花の色は濃紫、淡紫、白紋等種々あつて内外三枚宛の花蓋より成る。内花蓋は小形で上向するのが普通であるが、その園藝品種には外花蓋と同大になつて垂れてゐるものがある。

〔いちはつ〕鳶尾 一名こやすぐさ。高さは45種乃至48種で、葉は短廣劍狀をなし、淡綠色を呈する。花は白色又は淡碧紫色で外花蓋の中央上面の基部に毛様突起を具へてゐる。根は吐劑及下劑に用ふる。

〔しやが〕蝴蝶花 陰地に自生する鳶尾科植物で、高さ60種に達するものがある。葉はいちはつよりも光澤があり廣い。花莖は枝を分ちて數花をつける。花は細い花梗を有し白色で紫色を帯びてゐる。外花蓋の中央上面に毛狀の突起があり縁邊に鋸齒を具へてゐる。

〔ひあふぎ〕射干 山野に自生する高さ80種以上に達するものがある。葉は廣い劍狀で尖り平行脈を有し二列に排列する。花は帶赤色、帶黄色等で六片の花被を有する。

右の外鳶尾科植物には、さふらん、にはせきしよろ、グラチオラス、フリージア、せいやういちぼうなどがある。

1. 石膏 Gypsum

石膏は硫酸カルシウムに水の加はつたものでこの石膏を穩かに熱して結晶水の大部分を除くと燒石膏となる。このものは水を加へると再び結晶性となつて容積を減することなく固まる故模型、塑像、ギブス繻帶などに用ひられる。一度固まつたものは再度やいて粉末としても、前の様な針狀結晶とならない故堅固なものとならない。白墨や塗料として使用される。

石膏の成因 火山温泉の作用による場合と、湖水内海の蒸發沈澱による場合とある。火山温泉などでは硫氣孔より出るSO<sub>2</sub>が酸化してSO<sub>3</sub>となり、H<sub>2</sub>Oを得てH<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>となり、カルシウムCaの岩石に働いてCaSO<sub>4</sub>・2H<sub>2</sub>O 即ち石膏となる。湖水内海の蒸發沈澱によるのは、海水の蒸發により先づ石膏を沈澱し次に鹽化ナトリウム、次ぎに鹽化マグネシウムを沈澱する。故に鹽と互層をなして産する。獨逸のスタツスフルトは最も有名である。この鹽の産地は我國には無いが鑛山地方で産出される。結晶は單斜晶系に屬し、斜方形の結晶又はその雙晶をなす白色塊狀のものを雪花石膏といひ、纖維狀のものを纖維石膏といふ。

2. 壺

壺については第二十圖を参照されたい。

3. 傘

からかさ又はさしかさといふ。その種類多く古くは爪折傘といつて爪折に即ち骨の端を内にかゝめて作つた長柄の傘が用ひられたが、今は皆骨が平らである。雨傘は蛇の目・紺蛇の目・黒蛇の目・濫蛇の目等を普通とし、深蛇の目・半蛇の目の二種に分れる。妻黒、白張蛇の目・番傘・松葉傘等がある。

蛇の目といふのは傘を開いた時、全體黒い圓形の中に大きな白い環があつて大蛇の瞳孔に似

てゐる所から名づけたのである。紺蛇の目は紺土佐又は青土佐紙を用ひたもの。黒蛇の目は黒色で、妻黒は外縁のみ黒く内部は白い。番傘は下等の品で全部白く、町名・家號を大書する。松葉傘は美濃産のものである。

傘の構造 傘の構造は數多の竹骨を二つの轆轤で括り、之に竹又は木の柄を貫き、骨の間に紙を貼り油を塗り乾し上げるのである。骨の数は少いものは40本であるが、普通50本、女物は60本から多いのは100本などの美術的なものもある。紙は土佐西の内のものがよい。油は榧の油をひく、産地は東京・伊賀・伊勢・越後・九州等である。

日傘 日傘は蝙蝠傘のなかつた時代に用ひたもので、絹又は紙製で、骨の長さは大抵1尺5寸位、柄は割合にながく輸出品は殊に長い。關西地方に多く、美しい繪模様や派手な色彩のものが多い。又墨繪のものもある。

4. 罐

ブリキの小罐である。食物を入れて蓋をなし、蒸氣殺菌の後、白鐵づけとしたものが罐詰である。罐容器はその他茶壺、菓子入れ、海苔入れ等とするに用ひる。

5. メロン *Cucumis Melo*

マスクメロン 胡蘆科

まくわりの栽培品種である。佛蘭西で改良せられたもので葉莖共にまくわりに酷似してゐるけれども果實は普通圓形なものが多く熟すると黄色となり、纖維は緑白色の網條紋を生ずる。味が頗る甘く香氣が深い。本種の種類中珍重せらるるものには、サツトンスカーレット、ベストオフオール、ヒーロー等がある。温室で栽培するが、露天栽培を行ふ事も出来る。



第十圖 スケッチ箱 齋藤素巖

この短い文章は某氏の隨筆である。スケッチ箱に關聯して生徒に讀んで聞かせたいと思つてこれに採録したのである。

1. 私のスケッチ箱

私の持つてゐるスケッチ箱の中で一番古くてよごれてゐるのは大型スケッチ箱である。總柄の柾目の通つた厚い板を用ひ、金具をつけた部分には何れも櫻の嵌木をして破損を防ぎ、特に入念につくられてゐる。蓋の内側には三枚のスケッチ板を挿す溝が出来て居り、繪具箱の方には數個の仕切があつて、その上に櫻のパレットが載つてゐる。

箱は油でよごれてをり、パレットには繪具が染みこんでゐる。勿論どこへの寫生にも私のお供を仰せつかつてゐるのである。

このスケッチ箱は今から二十五年も前にS先生から戴いたのである。その頃私は中學の一年生でS先生は圖畫の先生であつた。

或る放課後に私はS先生の準備室へよばれた。「今度の展覽會には油繪も出してみたいから一枚かいてみてはどうか。この箱は僕の使ひ古しだが繪具も筆も油もはいつてゐるから、これでかいて見給へ。君にあげるから。」

あゝあそこがれの油繪具とスケッチ箱！しかもその箱は先生が學生時代に自ら作られたといふ古いけれど立派な品であつた。

私はこみ上げて来る嬉しさで碌々お禮も言へなかつた。その箱をかゝへたまま長い廊下を全く夢中で寄宿舎へ歸つて來た。あの特有な油と繪具の匂ひ、私はいつまでも其の箱を手から離し得なかつた。

私が油繪をはじめたのはそれからである。そ

して私も又先生と同じ道を選んで繪をかくやうになつた。爾來この箱は私の身邊から離れない。西に東に、汽車に汽船に、山に海に、いたるところ私に従つて私を激勵してくれてゐる。

今S先生とは遠く離れてお目にかかる機会は少いが、スケッチ箱を通して私は絶えず先生から指導を受けてゐるのである。

製作の度に先生の御恩を思つて目頭のあつくなるのを覚える。

2. 作家小傳

齋藤素巖氏

明治二十二年十月、東京市麴町區平河町生。

明治四十五年東京美術學校西洋畫科卒業。

大正二年英國に赴きローヤルアカデミー美術學校で彫塑を學ぶ。大正九年帝展推薦。大正十一年平和記念東京博覽會審査官となり、大正十一年帝展審査員、大正十三年帝展委員となる。

大正十五年構造社を組織し、昭和二年九月第一回展を開き爾後年々一回づつ開催せらる。

昭和十年六月帝國美術院會員となり、昭和十一年文展委員、昭和十二年帝國藝術院會員となり、文展審査員を兼ねらる。次の傑作がある。

第二回帝展特選「敗殘」等身五人の勞働者の群像、第三回「朝暁」、第四回「遺された人達」(推薦)、第六回「空」(横二間半のレリーフ)人物九人。

第一回構造社展に「相」(五十人の群像レリーフ)、「像を彫る」(六人の群像)等。

第二回「行路」(七人の等身人物群像)、其後「射手」(九尺人物)、泉(薄肉五人群像)、母子像(等身)、楠公像(一丈二尺)、農工商人物(各腰かけた八尺の人物)等その他數十。

昭和十一年文展には「貝」(男女六人のレリーフ)、十二年文展に「避難者」(五人の群像)を出品。

〔住所〕 東京市豊島區池袋四丁目三八三

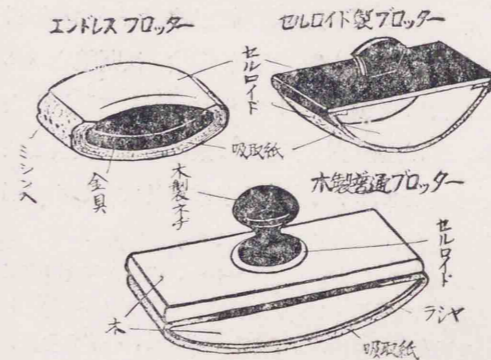
第十一圖 瓶とブロツター 石井柏亭

1. インキの元瓶

インキの元瓶は、常滑焼である。蓋はキルクの蓋で、多く黒色に塗つてある。普通24オンス入れである。今は多く硝子瓶に入れてある。内が見えるから常滑より都合がよい。丸善インキの筆記用は常滑製のもの、アテナインキはガラス製のものである。

2. ブロツター Blotter

ブロツターは普通吸取器といふ。手は螺旋製で、吸取紙を取換へるやうに出来てゐる。その下に羅紗があり、その下が木製である。價は十錢位である。近頃エンドレス吸取器といふ別圖のやうなものも販賣されてゐる。



吸取紙 液體殊にインキや墨等の乾き切らないのを吸取らせる紙である。原料纖維は柔軟で弾性に富むものがよい。最も適当な原料は綿パルプで、屢々これに曹達法木材パルプ、亞麻パルプ、碎木パルプ等を配合することがある。碎木パルプのみから作つたものは、下級品である。市販品には種々の色を着色したものがあつた。吸水性が強く毛ば立ちが少なく、灰分の少量のものがよい。

吸取紙は便箋や筆記用紙等の如くサイズを

施さない。但し填料は添加する場合もある。漉き方は圓網式または手漉による。吸取紙の吸水性は一部は纖維素自身が水分を吸ふことによるが主として纖維素の間隙に存在する毛細管作用による。

3. 作家小傳

石井柏亭氏

石井柏亭氏は名を滿吉と云ひ、明治十五年三月東京下谷生。

最初嚴父石井鼎湖氏に日本畫を學び、二十八年から三十七年まで印刷局に勤め専ら彫刻圖案に従事せらる。三十年に父を喪つたので翌年から淺井忠氏について洋畫を修め、更に中村不折氏の門に學んだ。その後无聲會に加入し、中央新聞に關係し、東京美術學校選科に一年在籍し雑誌「方寸」を出された。

明治四十三年渡歐、大正元年歸朝、國民美術協會を創立、水彩畫會を同志と共に起し、大正三年には時の文展に反對して有島生馬、山下新太郎等十氏と共に二科會を組織す。昭和十年帝展改組に際して帝國美術院會員の任命を受け同會を去り、昭和十一年には安井、有島、木下諸氏と共に一水會を創立された。

文展へは明治四十年の第一回以來殆ど毎回出品して第三回「龍野河口」、第五回「サンミシエル橋畔」、第六回「荷蘭の子供」は共に褒狀。大正二年文展第七回に「滯船」(N氏と其一家)並「並藏」の三點を出して「滯船」は二等賞の榮冠を得た。二科會創立後は文展及び其の後の帝展へは全く出品せず、多く二科會に發表されたが、今は一水會に發表してゐられる。

氏は油繪に長ずるばかりでなく、水彩畫、テンペラ畫、日本畫にも特技を有してをられる。かの二等賞になつた「滯船」はテンペラで描いたものである。文筆にも長じ、「我が水彩」柏亭日本畫式「歐洲美術通路」「マネエ」「滯歐手記」結城素明・黒田鵬心兩氏との共著「美術辭典」、西村貞氏との共編「畫の科學」、自傳「明暗」等多數の著書がある。

〔住所〕 東京市荒川區日暮里渡邊町一〇五〇



第十二圖 パナナ 板倉 賛治

1. パナナ Musa paradisiaca

甘蕉 芭蕉科

一名ミバセウ又はセイタカミバセウといふ。

元來印度馬來半島の原産なれ共、現時にては瓜哇、伊太利、メキシコ、北米フロリダ地方の熱帯又は亞熱帯地方に互つて栽培され、我國では臺灣、小笠原島に産する。

多年生草本で全形がバセウに似てゐて、莖の高さ六米以上に達する。葉はバセウに似た大葉で莖の頂上に八葉から十葉を叢生する。夏の日叢葉間より大形の花叢を出し、淡黄色で多数の花を二列に着生した花苞を穂状花序に排列し、花苞は赤紫色を呈する。

果實は漿果で三稜橢圓形をなし、長さ12—18釐、徑3釐許り、黄色の柔かい果肉を有し、一花穂に多いものは十數段の穂をなし、一穂に12—13箇の果實を着生する。果實は芳香と甘味があり榮養に富む。熟したるものは生食し或は火酒及び酢を醸すに用ふる。

觀賞用植物として栽培するの外、纖維を取りて芭蕉布を織り又製紙原料とする。

2. 寫生材料としてのバナナ

我々が食用に供するバナナは主に臺灣小笠原島等の産であるが、貯藏に耐へるので、殆ど一年中これを果實店に見ることが出来る。

従つて寫生材料として求め易いのである。靜物寫生の材料として多くの時間をかけて寫生するには數聯のバナナに他の果物器具等を配して大がかりな構圖をつくることも出来るし、又短時間に之を寫生せしめるためには一本でも二本でも素材となり得るので選擇は自由である。

形は手頃の大きさであり、簡單であるから描き

易い。面の變化が大まかであるために調子の研究には都合がよいし、色は溫和な暖色で誰にでも塗れる色である。

以上のやうな諸點から、寫生材料としてのバナナは相當重要な位置を占むべきものである。小學生にも中學生にもまた専門家にも都合のいいモデルといふことが出来るであらう。これを寫生した作例も尠くはない。

3. 作家小傳

板倉 賛治氏

明治十年一月愛知縣碧海郡新川町に出生された。初め愛知縣師範學校に學ばれたが、在學中から特に圖畫手工方面に天才的の才能を發揮され卒業後は母校に留つて後進の指導に當られた。後上京して東京高等師範學校圖畫手工專修科に入り、明治四十一年同校卒業、又囑望せられて母校に残り教諭、助教授を歴任して教授となり、現に圖畫手工專修科の主任として教員養成を擔當せられる外附屬中學校に於て親しく中學生の指導にも當つて居られる。

更に國定教科書編纂委員として、或は文部省圖畫科檢定試驗委員として、又各地の圖畫講習會講師として東奔西走の傍、日本水彩畫會會員、一曜會會長、日本手工研究會理事評議員、桐光會理事等を兼ねて居られる。斯道に功績を累ねられること四十年、東京高師だけでも三十年に餘る。實に氏の如きは尠いであらう。正に本邦圖畫手工教育の最高權威、現に従四位勳四等に叙せられてゐる。

大正十一年第三回帝展に水彩畫「靜物」を出品された外日本水彩畫會展には毎年力作を出品著書にはスケッチの實際、繪畫の手ほどき、中等圖法教本、テープ畫集、圖畫教育、板倉賛治畫集等がある。

猶趣味として工藝品の鑑賞、時計の蒐集と修繕、果物道樂等著名である。

〔住所〕 東京市小石川區小日向臺町一ノ三〇

第十三圖 模様 の 骨式  
第十四圖 紐 による 模様 板倉 賛治

模様の骨式及び圖案法の一般については理論篇 67 頁に詳述してあるからそれを参照せられたい。次に本課に示された没骨法について敷衍する。

1. 當嵌模様

ここに六種の形式が載せられ、夫々正方形と圓とに適合された場合の骨式が例示されてゐる。  
方射式 模様の單位の方向が四方に輻射するやうに置かれた形式で、嚴格な均齊狀をなしてゐる。

求心式 これも輻射の場合と同じく嚴格な均齊狀をなすもので、單位の方向が中心に向つて置かれてゐる。

沿周式 輪廓の周縁に沿つて配置されたものである。従つて正方形の場合は四個の單位を普通とするが、圓の場合は必ずしも四個とは限らない。

直立式 大體の同形が直立狀のものをいふ。

對立式 單位が左右對立して配置されたもの

旋回式 巴狀のもので輻射狀の變化とも見られる。

以上の三骨式も皆均齊狀のものである。均齊は所謂統一に關する一作法で模様一種の威嚴を示すものである。以上六形式は何れも均齊狀のみであるが、別に繪模様と稱する不規則構成の場合もある。これは變化を主とする作法によるものである。(理論篇 75 頁参照)

2. 二方連續模様

圖示されたものは次の八種の形式である。即ち散點式、水平式、垂直式、傾斜式、波狀式、

接圓式及びこれ等の式を組合せたものである。

散點式 模様の單位を等間隔に置いてゆく形式で、單獨模様の如きものを列べる場合はこの適例である。單位の形が縦長又は横長の場合は次の形式になる。

水平式 模様の單位を横に並べてゆく形式である。一列に並ぶ場合や交互二段に置く場合や單位の向を交互に變へることやいろいろの配置が工夫されてよい。

垂直式 模様の單位を縦に並べてゆく形式である。高さを一定に並べるか、交互の高低に配置するか、又は單位の方向を交互に變へるか、其の他種々工夫の餘地がある。

傾斜式 模様の單位を斜に並べてゆく形式である。配置の高低、單位の方向等は前の三骨式の場合と同様である。特に斜平行に並べないで左右傾斜を互違に配置すれば第七例の場合が出来る。

波狀式 所謂波形の形式である。前述の諸例が主に嚴格端正であることに對して自由な潤ひを感じさせる形式である。

接圓式 圓を並べたもので、一種の散點式であるが、特にこの名稱がある。賑かな感じのする形式である。

其の他 圖例として擧げられたものはこの外傾斜式を組合せたもの(前述)及び散點式に大小の單位を組合せたものの二形式であるが、更に他の諸骨式も自由にこれを組合せることが出来る。かくすれば模様は複雑になつて面白いものが出る。(理論篇 76 頁参照)



### 3. 四方連続模様

四方連続模様の形式にも規則的なものと不規則的なものがある。ここに示したものは何れも規則的構成の骨法である。

**方形式** 方形を上下左右に連続接合し得る連続法で我國に於て最も廣く行はれるものである。不規則的散点模様と雖も所詮この方形内に無限の變化を示すべき數個の圖形を適當に配置し過不及なからしめたるに過ぎない。方形式による單位の置き方は其の手法が頗る多い。

**階段式** 方形連続の變化と見るべきものである。成圖の連続に當り其の左又は右に連続すべき一ト釜を稍下げて連続させる。その下げ方に二分の一、三分の一、六分の一等數種あるが、その圖様の構成により線下げの度を適宜に決定するのは工夫を要する點である。

**立涌式** この連続法はもと装束模様の作法に多く用ひられたもので、今日に於ても尙往々用ひられる。連続の骨法は方形式により又は連圓狀の骨子から誘出することが出来る。

**その他** 構成の骨法に散点式、連邊式、菱形式方眼利用等がある。何れも理論篇に述べたから茲では省略する。(理論篇 77 頁参照)

### 4. 資料略解

應用例に用ひられた苺は薔薇科に屬する多年生草本又は亞灌木で、晩春より晩秋に續けて結果するものと、晩春より初夏に結果成熟するものがあり、静岡縣久能地方に盛んに栽培されてゐる。

椿は山茶科に屬する常緑喬木で、早春に開花する。觀賞用栽培による品種が頗る多い。

楓は通稱もみぢ、山地に自生する槭科の落葉喬木、秋季紅葉し春夏の緑葉にも風趣あり賞翫せられる。

葡萄は葡萄科の落葉藤本で、夏から秋にかけ

て採收され、概ね温暖で乾燥した氣候に適し、我が國では東北地方から九州までに栽培せられる。(詳細は 110 頁参照)

兎は哺乳動物中齧齒類、兎族に屬する、野兎と家兎とがある。家兎は野兎の馴化したものである。

### 5. 糊

サクラ糊と言ふ手工用の糊がある。チューブ入りでこの紐を着けるにはよい糊と思ふ。二十錢である。

水糊もその次によいと思ふ。その中でアラビヤ糊が品がよいやうに思ふ。大は二十錢小が十五錢である。米糊でもよいが、とれる恐れがある。この米糊の中でよいのは富貴糊である。大は十錢で小が五錢である。

### 6. 紐

この圖案に用ひられた紐は、眞田紐、打紐、荷紐、リリヤーンの各種である。打紐は二筋以上の糸で組んだ紐で、木綿などで出来てをり、泉州が特産である。ここにある太さでは一尺二錢位である。

荷紐は紙製のもので荷をしぼるのに用ひる。セロハンのもある。

眞田紐はひらたく組み又は織つた木綿紐であり、天正の頃眞田氏が、刀の柄をまくにこれを用ひたからその名を得たといふ。泉州が特産で一尺二錢位である。

リリヤーン(Lily yarn) 人絹糸を細い丸紐に織つたものである。糸の太いやうな感じで、刺繡・編糸の代りに用ゐられる。光澤よくさらさらとしてゐるので、飾房用にも盛んに使用せられる。マクラメを編むに非常に都合がよからマクラメ流行の際多量に製産された。總ての飾房の外、栗・電燈カバー・帶留・卓子掛等に使用される。

### 7. 作家小傳

板倉 賢治 氏

東京高等師範學校教授、(詳細は第十二圖バナナ参照)

## 第十五圖 幾何的模様その他 その一

### 1. 平面幾何圖法

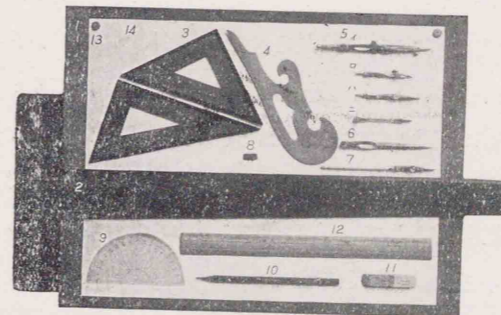
平面幾何圖法は平面幾何學の理論を應用して一平面上に幾何學的的形象を畫く圖法である。

### 2. 製圖用器具

1. 製圖板 Drawing Board 製圖用紙を張つて用ひる。よく乾燥せる檜、朴、桂等で作られ、其の反り又は狂ひを防ぐために板の左右小口に横木を端嵌する。

2. 丁字定規 T. Square 櫻、梨等の堅木で作る。規頭と規身上縁とが互に直角をなさなければならぬ。規頭の内側を圖板の左縁に密着せしめ、これを上下に動かして平行線を引く。

3. 三角定規 Set Square 櫻材に竹、黒檀等の縁を張り或はセルロイドを以て作る。二枚を以て一組とする。直線及び平行線を引くに用ひる。



製圖用器具

4. 雲形定規 French Curve 材質同前、曲線を畫くに使用するもので、畫かんとする曲線の一部又は全部に適合する定規の縁邊をとりこれによつて曲線を畫く。

5. 兩脚器 Compass 主として圓弧を畫くに用ゐるが、分割規に代用することも出来る。鉛筆で畫くための鉛筆脚、墨で畫くための墨汁脚及び大なる圓を畫くための伸長脚を備へてゐ

る。これを使用するには兩脚の關節を曲げて兩脚の尖端が畫面に垂直になるやうにし、金屬の重量を利用しつゝ靜かに畫く。幾何模様を畫くには定規と共に最も重要な器具である。

6. 分割規 Divider 直線を分割し又は距離を移すに用ひる。

7. 烏口 Drawing pen 軸と双とより成り、双は二枚合して嘴状をしてゐる。二枚の双の間に墨を入れ、圖を引くに使用する。双は蝶番によつて互に開放し得るものと、固定したものとあり、何れも使用後十分に掃除又は手入をして置かねばならない。幾何模様を畫くに主要な器具である。

8. 分度規 Protractor セルロイド、金屬等で作る。通常半圓形をなし一八〇度に分割してある。角度を測り又は所用の角度を畫くに用ひる。

9. 轉螺器 Screw-Driver 所謂ネヂマハンである。兩脚規、分割規其の他のネヂを締めるに用ひる。

10. 留紙 Thumb Tack, Pin 圖紙を圖板に張るに用ひる。

11. 尺度 Scale 竹製にて兩側に米突と曲尺とを盛つたものが便利である。

以上述べたものが普通の製圖用具で、幾何模様を畫くには、この程度の用具の名稱及び扱ひ方を知つてゐなくてはならない。

幾何模様は鉛筆描寫だけでは出来上りがよくない。仕上は墨又は繪具にしたい。その場合、下描の鉛筆がきたないか、或は消し跡が悪いと着色後の美觀を害する。



1. 色紙

色で染めた紙、支那でいふ彩箋。染紙ともいふ。齊宮忌詞で經のことを染紙といふのは寫經に黄の色紙を用ゐたによる。又鳥子紙を五色に染分けた疊紙もあり、詠草、音信等に用ひられた。夫木抄十二・雁に「雁の書きつらねたる玉章は淺緑なる空の色がみ」とある。今俗に色紙といはれてゐるのは七夕紙で、土佐産の粗悪なる和紙である。

色紙の種類 標準色手工用紙四十一色五寸に七寸両面染で印刷洋紙で十五錢のものがよい。五寸に五寸八十枚十三錢のものもある。

又三色の色紙二尺六寸に三尺六寸の二錢五厘の紙もある。三色は黄、赤、青である。

次に艶紙がある。二尺五寸に一尺九寸で五色である。赤、青、黄、紫、白、黒である。この大きさが三錢位である。

又、漉色紙といふのがある。厚いものと薄いものがあつて、二尺一寸に三尺一寸で一枚、薄いものが八厘で、厚いのが一錢五厘である。これも艶紙と同じ五色である。

色上質といふ二尺一寸に、三尺一寸の三錢五厘位のものもある。色は五色である。表紙、招待券等に用ひられる。

2. 幾何形

幾何形とは平面幾何圖法によつて描かれる基本形のこと、圓、三角、四角、矩形、多角形其の他である。何れも定規、コンパス其の他の製圖器具を以て描寫し得る直線又は曲線を以て圍まれた平面形である。従つて、自然物の曲線フリーハンドによる平面形は幾何形とはいはぬ。

幾何形體といふ場合は角礫、角錐、圓礫、圓錐等の立體を指す。

3. コーヒー茶碗

本圖五段目の模様に使はれてゐるモチーフはコーヒー茶碗である。コーヒー茶碗は硬質陶器によるもので、其の解説は卷三陶磁器の箇所を参照されたい。

4. 椿

椿は山茶科に屬する常緑喬木で早春に開花する。詳細は本卷第二十七、二十八圖椿その一、その二の兩課を参照されたい。

5. 作家小傳

鈴木豊次郎氏

明治三十一年十一月東京市京橋區銀座に生れ大正十三年三月東京美術學校圖案科を卒業された。美術學校在學中大正七年第四回商工省主催の工藝展覽會に出品された。後引きつづき毎年出品し、第四、第七、第八、第九、第十二回ともに褒状を授けられた。大正十一年の平和博にも出品して受賞された。現に東京高等工藝學校助教授として弟子の教養に専心せられる現代の中堅工藝圖案家である。

〔住所〕 東京市蒲田區安方四二六

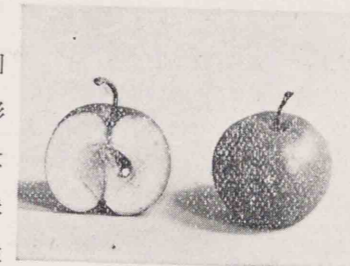
1. なし *Pirus serotina*

梨 薔薇科

落葉喬木で高さ十米にも及ぶが、採果用のものは枝を矯めて灌木状に仕立てる。葉は卵形で先端が尖り、縁に繊細の鋸齒を有する。五月頃葉と共に白色五瓣花を開く果實は秋日に至りて熟する。その種類は頗る多く日本梨、西洋梨、支那梨等があり一般に冷涼な地方に良品を産する

長十郎

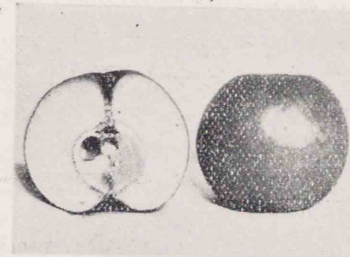
果實は扁圓形又は圓形で、大皮は黄褐色甘味多く早熟性である樹勢も強く豊産する。



長十郎

廿世紀

果實は圓く大きき中位果皮は黄白色で、果面は滑らか、品質極上で砂粒が少い



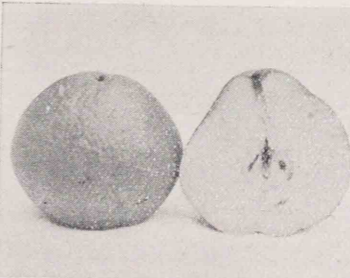
廿世紀

晩三吉

その名の如

く晩成種で、形状は尖圓で大變大きい、果皮は帶緑褐色で、果面滑、最もよく貯藏に堪える。

太平 果形最大扁圓にして果皮平滑、皮面黄赤色で黄白斑を有する。果肉は白色粗脆にて漿



晩三吉

液多く甘味がある。八九月頃に成熟する。大なるは重量百五十匁に達する。

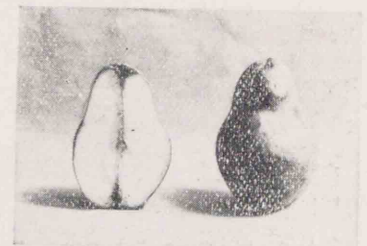
力彌 下總八幡に産する晩成種で果皮が薄く熟すると赭褐色に微緑を帯び、果肉は白質にやや赤味を帯び多漿甘味である。

赤龍 九月より十月に涉り成熟する果形大なるもの、果皮はやや滑かに青赤色を呈し、肉は粗脆で多漿、餘り甘味はないが久しく貯藏に堪える長所がある。

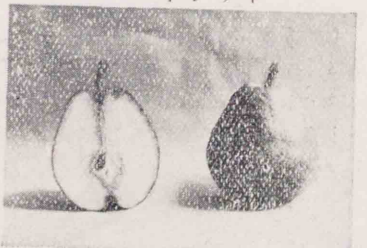
世界一 中熟種で果皮は淡褐色、肉白く甘味佳良である。樹勢強く豊産する。

其他玉

水・初霜・明月・赤穂・泡雪・早生赤梨、西洋梨にパートレット、ジュツセス・ダングレーム、ルコント、キーフアー、支那梨にツ



パートレット



ツリー

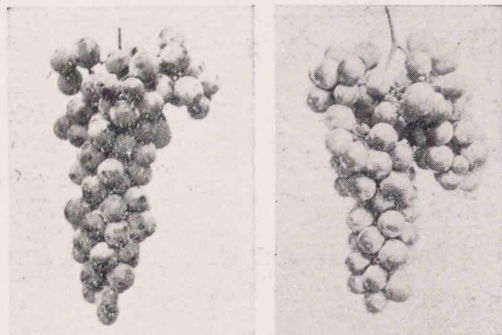
ーリー、ヤーリーなどの優良種がある。

2. ぶどう *Vitis vinifera*

葡萄 葡萄科

葡萄は地中海小亞細亞北印度及び支那原産の品種で我國には甲州に特有のものがある。葉は心臟狀圓形で往々三五裂し不齊の齒牙や毛茸を有する。花は長い圓錐花序に排列し、花瓣は五個で頂上少しく結合し開花前に脱落する性がある。





甲州

デラウェア

果實は生食の外葡萄酒製造原料、製菓原料とする。

種類の重なるものには水晶葡萄、紫葡萄、緑葡萄、長葡萄、ナイヤガラ、デラウェア、レデーワシントン、ハイランド、ペーコン、トライアンプ、ブリアント、スキートウオーター、コンコード、カールマン、エンパイヤステート、ミルス、チャンピオン等ある。

**白葡萄酒の製造** 全熟せる果實の果梗を去りこれを壓搾器で壓搾した後醗槽に送り汁液と果皮とを分離せしめその果汁を濾過管で醗樽に送り、華氏七〇度乃至七五度の管中に静置すること凡そ五週間で全く醗酵の止むのを待ち、始めて醗樽の下部の噴出開口を開いて其澄液を採り、他の清潔な醗樽に移し、最初に醗樽に沈澱した滓滓を取り去る。それより七週間毎に滓滓を取り去ること二三度反復すると醗造を全く終るのである。

この様にして凡そ六ヶ月で飲料に供せらるゝに至れど、品位をよくするには永く貯蔵するを要する。而して少くも二三年間は醗樽中で滓滓を除去し曇りつめる時更に滓滓を除くのである。

**赤葡萄酒の製造** 赤葡萄酒製造には紫黒色の葡萄を使用する。元來赤葡萄酒の色素は果皮より出るのであるから果皮と漿液とを分離せず其のまゝ別器に移し醗酵せしめ、醗酵の終つた時その澄液を引き去り、残りの果皮を更に壓搾して液汁を取り清液と混合する。其の他の作業は白葡萄酒の製造法と同一である。

### 3. 作家小傳

清水良雄氏

明治二十四年八月東京市本郷區に生れ、大正五年東京美術學校西洋畫科を卒業、引きつづき研究科に入つてその技を練磨された。大正二年文展第七回に二年生在學にて「調べの絲」を出品入選された。

それ以來、大正三年文展第八回に「いちぢく」、大正四年文展第九回に「無花果の秋」、大正五年文展第十回に「ひがん花」「ひとり」の二點を出品、大正六年文展第十一回に「ゑごの花」「西片町の家」の二點を出品して「西片町の家」が特選となつた。

大正七年文展第十二回に「二人の肖像」を出品して再び特選となり、大正八年帝展第一回に無鑑査にて「梨花」を出品し三度特選となつた。大正九年帝展第二回に無鑑査にて「夕近き濱」、大正十年帝展第三回に「庭」を出品された。大正十一年帝展第四回に「肖像」を出品して特選になられた。其の後の主なる出品作は次の通りである。

第五回帝展「兄妹」、第六回帝展「静物」、「草に座す女」、第七回帝展「青衣」、「曇り日」、第八回帝展「T氏の像」、第九回帝展「畫房にて」、第十回帝展「草上の臥婦」、第十一回帝展「斜陽」、第十二回帝展「F嬢の像」、第十三回帝展「少年像」、第十四回帝展「うぜんかづら」、第十五回帝展「臥婦」、文部省招待展「草原」、文展第一回「初秋」、文展第二回「初秋」、昭和十四年文展第三回「繪筆を持つ娘の像」

其の間、大正十五年より帝展委員となり、爾來無鑑査にて毎回出品を續け、昭和十一年よりは同じく文展へ出品、力作を發表されてゐる。氏は洋畫界の他に、挿繪殊に少年少女讀物挿繪界に知られ、小鳥、犬、魚類の飼育、草花の研究等多方面多趣味を以て知られてゐる。

〔住所〕 東京市大森區田園調布四の二一六

## 第十八圖 葱と茄子

狩野探道

### 1. ねぎ Allium histulosum

葱 百合科

畑地に栽培する草本で、地下に堅く短縮せる地下莖を有しここに多くの鬚根を生ずる。通常高さ七〇糎餘りとなる。葉は中莖の筒状をなし先端尖り、地下にある部分は多数重つて一本となり白色を呈する。これを俗に白根といふ。初夏葉間に葉に似た花軸をぬき、帯白色の小花を多数簇生して球状をなし、その若い間は薄い苞葉で包まれてゐる。花は六片の花蓋より成つて充分展開するに至らない。中に六雄蕊一雌蕊を有してゐる。

四時採りて煮食し或は生食するが、冬季が最も美味である。本品は一種の揮發油を含有しよく神経を刺激し、消化液の分泌を促し消化器内の寄生蟲の發生を豫防し、リウマチスに効がある。

其の栽培品種の主なるものを次に列記する

**千住葱** 東京市中で見られる白根の長さ三十糎に及ぶもので千住附近に産するよりこの名がある。莖身長大の品質良好なる種である。

**岩槻葱** 武蔵國岩槻町附近の特産で、莖身短く太く基部が屈曲してゐる。白根は前者より稍短かいが柔かて佳味がある。

**下仁田葱** 一名上州一本葱といふ。莖の頗る偉大なる品種である。

**秋田葱** 秋田縣の産で莖は千住葱よりも肥大であるが短かく品質は佳良である。

**かりぎ** かれぎ、なつねぎ、きなへ等といふ。夏刈つて食用とする。刈れば愈盛に繁茂する種である。

### 2. なすび Solanum Melongena

茄子 茄科

なすと稱せられる一年生草本で畑地に栽培される。莖の長さ七十糎に及び疎らに刺を有す。葉はやや不整形なる卵圓形で互生す。夏の日莖

の上方に多くの小枝を分ち淡紅色の五尖裂をなす合瓣花を開き、花後暗紫黒色の大形なる漿果を結ぶ。

茄子は煮又は漬物にして食すが、その調理法は多種多様である。種類には左の如きものがありその變種もなかなか多い。

**ほうぞうなすび** 普通の茄子で其の形は基部が窄く末が大で紫藍色を呈し切り口がまるい。

**市瀬なすび** 横に潤く縦裂があり紫藍色である。

**白なすび** 倒卵形大形で白色をなす。本種は收穫が多く味もよいが、白色なるが故に市場の賣行はよろしくない。

**さんなすび** 葉も莖も共に小形で果實も小さい。熟すると黄色となる種類である。

**ながなすび** 果實は細長く二十糎より三十糎に達する。色は紫・白・青等がある。

**せんなりなすび** 葉は暗紫色を呈し多くの小枝を分ち、紫藍色小形果實を結ぶ。

其の他あをなすび、あぶぎなすび、丸巾着等があり、新種として栽培されるものに、橘實茄子、蔓細千成茄子、眞黒茄子、佐土原長茄子などがある。

### 3. 作家小傳

狩野探道氏

明治二十三年四月東京市芝區金杉に生れ、正信、元信、永徳の血を享けた探幽正系の家柄である。初め狩野應信氏に就いて學び、大正四年東京美術學校日本畫科を卒業された。明治三十八年(十六歳)日本畫會に「毘沙門天圖」を出品し褒状を授けられ、宮内省御用品となつた。明治三十九年日本畫會に「養老勅使之圖」を出してこれ亦褒状を得宮内省御用品となつた。

昭和二年日本美術協會に「静物」を出して一等褒状を授けられた。昭和二年東臺邦畫會に「寒山拾得」、昭和三年日本美術協會に「神農」を出して一等褒状を授けられた。同年東臺邦畫會に「伯牙想子期」、昭和四年日本美術協會に「養由基」を出して銅賞を授けられ、同年東臺邦畫會に「閑人愛鳥圖」、昭和五年日本美術協會に「夢」、昭和六年東臺邦畫會に「黃初平」を出品された。昭和七年以來毎回日本美術協會展に出品されてゐる。

現に日本美術協會第一部審査員にして又狩野古畫の鑑定家として著名である。

〔住所〕 東京市芝區金杉濱町六八



1. 徳利

陶製の酒入である。徳利の和名の出所は不明である。朝鮮では甕をトクと呼んでゐるが、徳利の方は酒瓶と稱へる。陶裏とかくのは當字であらうとのことである。黒釉の油徳利は、肥前の土焼時代からあるが、丹波立杭焼の黒釉徳利も有名で、大阪方面の酒屋に行はれてゐる。殊に有力なのは美濃の高田及び小名田の酒徳利で徳川時代から江戸や各地方に行はれ、明治以後も殆ど全国に廣まつてゐた。

備前伊部の角徳利は、保命酒のために知られてゐるが、好事家の作る鬚徳利は、歐洲の傳來品を寫したもので、京都の木米または道八製、讃窯や對州焼などにも散見される。越中小杉焼の鴨徳利も面白いが、萬古焼などのアブリ爛は、底を尖らして灰中へ挿込むやうになつてゐた。

變つたものには浮徳利や鶯徳利などがある。昔の瓶子は今の神酒徳利である。

2. 珧瑯鐵器 藥罐

珧瑯エナメルとは熔融し易きガラス質の總稱で、これを鐵器に融着した製品を珧瑯鐵器といふ。(詳細卷第二十圖倒像参照)

藥罐には珧瑯鐵器以外に、銅、眞鍮、アルミニウム、アルマイト製等がある。

3. 硝子器 Glass

硝子はアルカリ珪酸鹽に溶剤を加へた非結晶性で透明の固溶體物である。

硝子はエジプトの古王朝に既に曹達硝子質の釉をタイルにかけた例があり、エジプト人は早くより硝子器を使つた。紀元前八世紀頃にはフェニキヤの硝子が輸出された。ローマ人は透明の瓶を作つたが、その後十八世紀にはイギリスで鉛を基本成分とするフリント硝子が製出された。硝子はボヘミヤが有名であり、板硝子はフランスの發明である。

日本の硝子は正倉院の御物中にもあり、御陵

などからも出るので、古くからあつたことがわかる、醍醐天皇の御代に出雲で製作したが元龜年間に長崎で作られそれ以來各地に行はれた。

コップに就ては卷二第三圖靜物の構圖参照、硝子に就ては卷二第五圖硝子壺その他参照。

4. 果實

果實は何れも皆外觀の美を呈して、形の圓きもの長きもの、平たきもの、尖れるもの、一個のもの固まれるもの、房をなすもの、色の赤きもの、黄色きもの、茶色、紫色、黒色、白色等各種各様殆ど物によりて各異つてゐる。故に描寫の對象としては最も興味あり、變化あり且つ得易い素材で教授材料として缺くべからざるものである。

果實は多く生食されるが、近時加工して各種の製造や調理にも用ひられる。

果實を次のやうに分類する。

- 1. 核果類 桃、櫻桃、梅、李、杏等
2. 仁果類 梨、苹果、柿、枇杷、柑橘等
3. 漿果類 葡萄、無花果等
4. 堅果類 栗、胡桃等

りんご 薔薇科

苹果(林檎)は寒冷な氣候を好み、東北地方、北海道の南部、朝鮮等に良品を産する。我が國に栽培せられる主なものは、紅魁、祝、紅玉(満紅)、國光等がある。(詳細は卷二第十一圖塗盆と果物参照)

きんかん 芸香科 蜜柑屬

長金柑 灌木、果は小さく長圓形
丸金柑 灌木、果は小さく球形
寧波金柑(明和金柑) 灌木、果は大形橢圓形
豆金柑(金豆) 果實最小、球形

金柑の果肉は酸味頗る強いが、果皮は甘味と芳香があるから、砂糖漬、料理等に用ひられて比較的需要が多い、又盆栽或は庭園樹として用ひられる。

1. 種類

漆器、陶器、青銅、ガラスのものなどがある。後世は陶磁を主とする。和名抄には「木謂之壺瓦謂之罍」とあり、木製のものを壺、陶製のものを罍とするが後には壺罍相混じて壺と稱する

2. 用途

食料、飲料其の他の種々の物を貯へるに用ひるものと、草木花卉等を挿すものと、そのまま裝飾に供するものとの三種である。用途により茶壺、酒壺、鹽壺、油壺、藥壺、種壺、藍壺、肉壺、梅壺、鐵兼壺、墨壺、花瓶、飾壺などの稱がある。

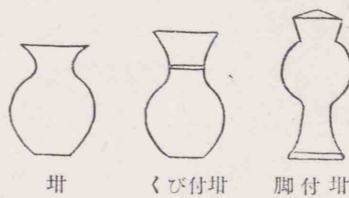
物入壺 茶壺には多く耳が付せられ、伊賀・信樂・備前の種壺は佗びの花入として茶人に喜ばれ、宋明の藥味入の小壺は我國に舶載されては唐物茶入として貴ばれてゐる。繪付裝飾には單色・色繪・繪高麗・搔落し・象嵌・染付・鐵砂・辰砂・印花・劃花・法花などがある。西洋では古代希臘の陶壺が有名で、その形状にも、アンフォラ Amphorae、ヒドリア Hydria、スタムノス Stamos、ホイノケ Oinoekoe、など種々あり裝飾には黒繪手、赤繪手などがある。

古墳などから、坏と相並んで多く發見される須惠器のものは考古學上、「罍」字を用ひてゐるがその用途はやはり、食料、飲料、調味料などを貯へるに用ひたもので、これにも各種の様式があり、有蓋のもの、無蓋のもの、長頸のもの短頸のもの、有脚のもの、無脚のものなど種々ある

3. 花瓶

花器の一種で、多く壺形によるもの。近時は種々異様な形のものも此の名で呼んでゐる。陶器、磁器、ガラス製、投入等には其の儘使用することもあるが、古來の流儀花には多くその内部に落しを入れ、種々の工夫を施して用ゐる。生花には色彩模様の多いものより無地物を使用繪を施したものは繪と生けるものと同じにならぬ様注意することが必要である。

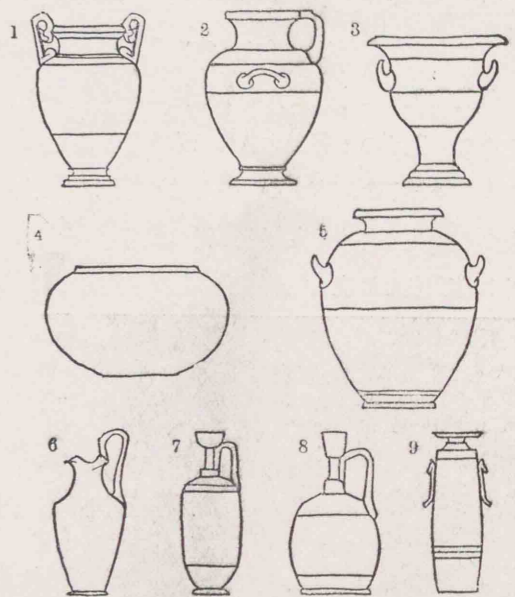
飾り壺 花瓶の一種とも見られる。これは花



を挿すことを本體とせず、陳列して裝飾用に供するのであるから、色彩も模様もその目的によつて作られて居り、形も種々である。

4. 西洋の壺

西洋にて「ヴェース Vase ラテン語ヴァス Vas より出づ。」と稱するものは、其の形状區々にして、我國の甕の如く蓋を缺くもの多きも、蓋のある壺形のものあり。その起源は遠くギリシヤの先史時代である。其文様形態は第十九世紀以來大に學者の注意を引き、今日に於ては考古學美術史・史學上重要な資料である。



西洋の壺 1. アンフォラ(葡萄酒入) 2. ヒドリア(水壺) 3. クラテル(混合器) 4. レベス(大釜) 5. ステムノス(葡萄酒入) 6. オイノコエ(葡萄酒入) 7. レキトス(注油器) 8. アリバロス(小形油壺) 9. アラバストロン(小形油壺)

5. 作家小傳

松原 郁二氏

明治卅五年十二月廣島縣に生れ、昭和三年東京高等師範學校圖畫手工專修科を卒業せられた静岡縣濱松師範學校教諭を経て東京高等師範學校訓導となり、同校の圖畫及び手工を擔任、昭和十三年には中等教員手工科檢定委員を囑託せられた。

昭和二年帝展へ靜物、昭和三年帝展へ靜物、昭和五年にも靜物を出品せられた。著書に「圖畫教育」その他多數がある。

〔住所〕 東京市小石川區竹早町六四



第二十一圖 柿

1. かき Diospyros kaki

柿 柿樹科

我國各地で廣く栽培せられる果樹で、高さ十米に達する落葉の喬木である。葉は卵狀楕圓形又は長楕圓形・倒卵形で先端が尖り、革質で厚く上面は平滑で光澤がある。下面には微に毛茸を有する、花は單性花で同株である。雌花は不完全雄蕊十筒以上を有し花冠の内面に着生し、雌蕊は一本、子房は上位で八室を具ふ。

果實は漿果で直徑三糎より十糎に達するものがある。熟すると帶黃赤色又は朱赤色となり内に八個の種子を埋有する。種子は長楕圓形で兩端がやや尖り外皮は茶褐色平滑で光澤を有し、中に薄鼠色の胚乳と淡黃綠色の胚とを含む。



樽柿

果實を生食し、滋味あるものは醃柿(サワシガキ)白柿(コロガキ)樽柿(タルガキ)等とする。

柿の栽培變種は頗る多い、その主なるものを擧げれば次の如くである。

甘柿種

ゼンジマル(禪寺丸) 今より七百餘年前神奈川縣王禪寺の某寺に發見せられ栽培し初めた種であるといふ。

トヨオカガキ(豊岡柿) 果實は中型で球形であるがやや長味を帯びて帯の部があさい。品位は上等で

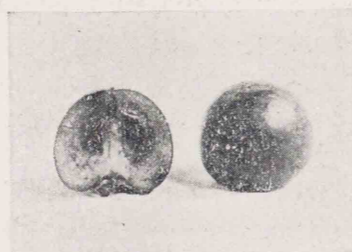
寺内萬治郎

はないが甘味が多く早熟である。

キヤラガキ

(伽羅柿)

佐賀縣の原産果實は中型である。頂點が僅かに凹み、この附近に極めて浅い四條の溝がついてゐる。



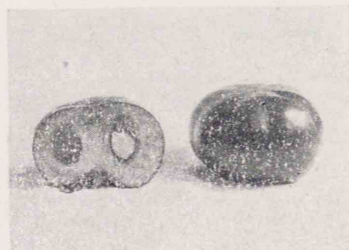
禪寺丸

ツルノコガキ(鶴ノ子柿) 長楕圓で先端が尖り頂部に黒斑を有することがある。甘味に富む。

ジラフガキ

(次郎柿)

静岡縣の原産で次郎吉といふ人の發見したものの、果實は大で、頂部が扁平になり頂點が僅かに凹んでゐる。四本のあさい縦溝があつて帯部に達する。甘味多く種子が少く、而して豊産の逸物である。

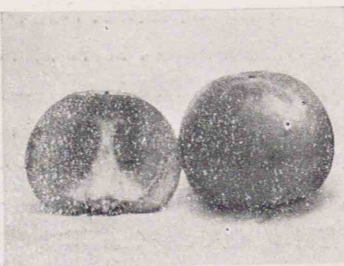


次郎

フィウガキ

(富有柿)

岐阜縣の原産で古くより栽培され一名水御所といふ。果



富有

實は大型で二百六十瓦内外となる。頂部は稍扁平で、この部に浅い四條の縦溝があるが、次郎ほど深くない、豊富な扁球形で上品である。甘味風味共に甘柿中の王座である。本圖即ち第二十一圖は此の柿である。

メウタン(妙丹) 果實は中型で頂部は扁平であるが頂端が少しく尖り、熟すると橙黄色となり光澤を有する。肉に褐斑が多い。

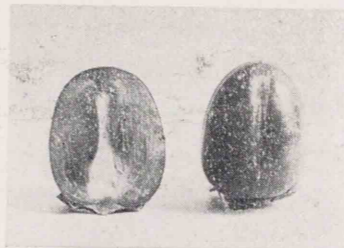
其の他御所柿、花御所、天神御所柿、晚御所、甘百日、霜丸、小鶴、久保、御寺、江戸一、水鳥、似タリ御所、眞妙丹、四谷柿、正月、油壺、乾柿等多くの種類がある。

澁柿種

ヨツミゾ

(四溝) 静岡縣の原産

で柿柿とする、美味であるが果が小さい。



西條

エモンガキ

(衣紋柿)

千葉縣の原産、一顆百八十五瓦位となる。樽柿として品質よきものである。

サイジヨウ(西條) 圓筒形で種子が少く往々之を缺くものがある。醃柿及白柿に適する。

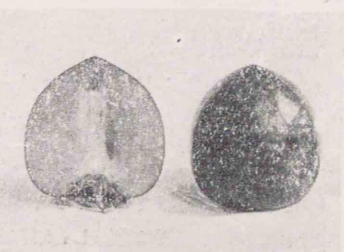
アイツミシラス(會津身不知) 福島縣の原産で柿柿にして品質良好である。

フジ(富士) 甲州百日などともいふ。熟柿又は乾柿に適するが、熟柿としては最も優秀である。

ハチヤガキ

(蜂屋柿)

岐阜縣蜂屋村の原産で醃柿、乾柿としても最も優秀である。



蜂屋

右の外紙野坊、横野柿、稻山、平核なし、濫角曲り、美濃、作州身不知、三郎座などがある。

柿の葉の所々に食害されてゐるのは、刺蟲の鱗翅目に屬する。その幼蟲をおこじといひ、體に肉狀突起を有し毒毛があつて觸れると激しい疼痛を感じる。五六月頃より蛹となり楕圓形石灰質に富む繭の中に入る。五六月に化蛹した

るものは年二回の發生をなし、八月に化蛹したるものはそのまま越冬するのである。

2. 作家小傳

寺内萬治郎氏

明治廿三年十一月大阪市に生れ、大正五年三月東京美術學校西洋畫科卒業、現に日本大學藝術學部教授、文展無鑑査、光風會會員として令名がある。

大正七年第十二回文展「葉黄」が初出品で、爾來帝展第二回「某氏の肖像」、第三回「K牧師肖像」を出品、大正十四年の第六回帝展に出品の「裸婦」は特選となり、翌年第七回帝展へは無鑑査で「裸婦之像」外一點を出品、續いて昭和二年第八回帝展「インコと女」は再び特選となり、翌年六月遂に推薦の榮を擔はれた。

其の後の主なる出品作は次の通りである。

昭和三年第九回帝展「鏡」

昭和四年第十回帝展「水邊」

昭和五年第十一回帝展「裸婦」

第十二回帝展「裸婦」

第十三回帝展「果物籠を持つ少女」

第十四回帝展「二人の女」

昭和八年、九年は共に審査員に擧げられ、又九年の帝展には「青衣姉妹」十年の二部會へは「浴衣」「葡萄菊」を出品された。「浴衣」は黒田美術館買上、同館より帝室博物館へ寄贈せられた。

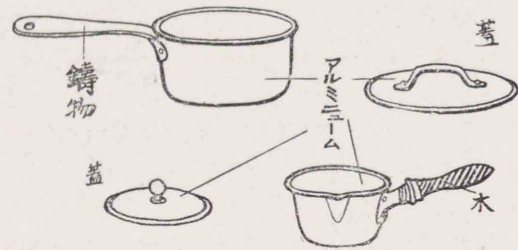
昭和十三年第二回文展へ「赤いコート」を出品文部省買上となつた、昭和十四年文展審査員任命。その年「樂器を持てる女」を出品された。

〔住所〕 浦和市針ヶ谷八一八



1. スープパン Souppan

スープパンはアルミニウムかホーロー製か或はアルマイド製が多い。圖は止め釘のあるところから見ると、アルミニウム製かと思ふ。大きさは直径十四種位からある。製造元は多く東京・大阪・日本アルミニウム会社のツルマル製が多い。十四種で一圓三十銭、十八種二圓二十銭位である。柄が鋳物のもあり、木製のものもある。多く蓋がついてゐる。スープを他の器に移すに都合よく口の付いてゐるのがある。



この外、丸形ソースパン、シチューズパン、牛乳パン等がある。多くアルミニウム製か、ホーロー製か、アルマイド製である。

2. トマト Solanum Lycopersicum

Tomato 茄蕃・義蕃・柿洋茄子 茄科  
赤茄子、唐柿、珊瑚珠茄子等の異名がある。畑地に栽培する一年生草本で、莖の高さ1.5—2米に及ぶ。葉は不整齊なる羽状をなし、小葉は分裂し互生をなす。小葉に柄を有す。夏日稍上に小枝を分ち数花によりて總状花序をなし側出する。萼は五深裂し各裂片は披針形をなす。花冠は帽形をなし萼と同長、六雄蕊→雌蕊を有する。果實は球形の漿果で初めは黄色を帯ぶが後紅色となる。但し種類によつては黄色を呈するものもある。

スパークスアーリアナ 早生種、果皮は鮮紅色で肉が柔かく甘味がある促成栽培用とするミカド 前種と共に米國産、晩生赤色種。  
ボンデローザ 米國産、晩生赤色種、果は大で稍角張り扁球状四角形。  
ベストオヴオール 英國産、早生紅色、果は

中位で扁球形、外皮は朱色、肉が緊り品質良好  
ゴールドクイーン 英國産、黄色で早生種  
中果で扁球形外皮は鮮黄色肉も亦黄色  
ゴールドジュビリー 英國産、黄色中生で外皮は鮮橙色品質良好である。  
ゴールドボンデローザ 米國産黄色晩生である。種子が少く品質良好で莖は強健而も豊産である。

其の他房形をなすカスケード、櫻桃型のチェリー、洋梨型のイエローブラム等種種ある。

トマトの製品

トマトケチャップ トマトの皮を剥ぎ煮つめて糜状とせるものに砂糖、酢、食鹽の調味料を加へそれに葱蒜の細片と蕃椒、山椒、胡椒、桂皮、肉荳蔻等の香辛料を適量に入れ鍋で煮ながら攪ぜて作る。

トマトソース よく熟したトマトを煮、果皮果梗等を探り相當水分をなくした碎果肉に香辛料・調味料・色素等を加へたものである。

トマトピューレ 調味料、香辛料を入れないトマトソースをいふ。

3. 作家小傳

伊原宇三郎氏

明治二十七年十月徳島市に生れ、大正十年東京美術學校西洋畫科を卒業された。大正九年東京美術學校在學中第二回帝展に「明装」を出品。

卒業の年第三回帝展に「よるこびの曲」を出品、大正十四年春佛蘭西に遊學し、昭和四年八月歸朝され同年第十回帝展に「椅子によれる」を出品、特選となり昭和洋畫奨勵賞を授けられた。昭和五年第十一回帝展に「二人」を出品して再び特選となられた。昭和九年第十五回帝展の審査員に擧げられて以來無鑑査出品を續け、昭和十年二部會を結成し、十二年には文展の審査員を委嘱され、其の他多數の展覽會審査員として活躍せられてゐる。

はじめ帝國美術學校に教鞭を執り、昭和七年東京美術學校に轉じて助教授となり今日に及んでゐる。國民美術協會の會員である。

〔住所〕 東京市世田ヶ谷區成城町六二四

1. さんくわうてう

Terpsiphone atrocaudata

三光鳥 鳴禽類

翼長 90mm、嘴峰 20mm 位あり、雄は長尾を有してゐる。鳴聲「月星日」と聞えるために三光鳥の名があるといはれる。頗る羽色美しい本州以南に産し、冬は支那、マラツカ半島等に移る

2. たい Pagrosomus majon

鯛 鯛科 (卷二、第二十八圖参照)

3. きんぎよ Carassius

金魚 鯉科

金魚は今より四百年前明國より我國に輸入し其の後大和郡山で多くの品種をつくつた。重なるものに和金、琉金、嵐錦、秋錦、出目金、和蘭獅子頭等の變種がある。

4. はつた Acridium

蝗蟲 昆蟲類 ばつた科

體は長形で肥大し、前翅長く、後翅は膜性で三角状、脚は三對中後脚は他に比し著しく長く發達し、これによつてよく跳躍する。

5. ばら Rosa

薔薇 (卷三、第一圖参照)

6. 汽船と海鳥

蒸氣力で推進する船を汽船といふ。小型汽船又は近海航路の船は往復式蒸氣機關を用ひるが、近來大型汽船は殆ど蒸氣タービンを使用し、又大客船では重油を焚き高壓高過熱の蒸氣を用ひる、本圖は貨物船である。

海鳥は海洋上に棲息する鳥類である。ちどりかもめ、あほうどり等をいふ。

7. 土瓶と湯呑

土瓶は低熱で燒成した陶器を以て作る。湯を沸し、茶を煮るに用ひ、湯呑は湯茶を呑む器。

8. かうもり Vesperugo noctula

蝙蝠 翼手類

あぶらかうもりの俗稱である。日中は木陰、洞窟等にかくれ夜間飛翔する小動物、前翅の指が長く、其の間に膜狀の薄い皮膚が張つてある。

9. 瓦斯燈

白熱マンテルを用ひる白熱石炭瓦斯燈をいふ。我國では明治六、七年頃東京横濱に始めて點燈した。

10. 自動車

獨立の原動機を用ひ、軌條によらないで走行する車輛一般をいふ。ガソリン發動機によるものが多い。

11. ねずみ Mus

鼠 齧齒類 鼠科

最も普通な種類に、えちぶとねずみ、くまねずみ、どぶねずみなどがあり主に家に棲息するはたねずみは山野田畑にすみ、かやねずみは草原に棲息する。

12. きつね Vulpes vulpes japonicus

狐 食肉類 犬科

色により赤狐、十字狐、銀狐、黒狐等がある。

13. さだまき Aquilegia flabellata

縷斗菜 毛茛科

庭園に栽培せられ又は野生の草本である。莖の高さ一尺内外、根葉は二回三出、梢葉は圓形で多數裂片があり、花は碧紫色、又は白色。

14. むつばむぐら Galium gracile

茜草科

やへむぐらに似てゐるが、小葉が四箇宛輪生し刺毛が上向となつてゐるのが特徴である。

15. ぶどう Vitis vinifera

葡萄 (卷一第十七圖参照)

16. うめ Prunus cerasus

梅 薔薇科

落葉喬木で葉は卵形、早春花を開き香氣甚だ高い。白梅、紅梅、一重、八重等の別がある。果實は食用とする。

17. ひまわり Helianthus annuus

向日葵 菊科

ひぐるまと稱し、高さ二米に達す。花は太陽の位置によつてその向きを變更す。

18. からす Corvus

烏 鳴禽類

鳴禽類中最大のもので、強大な嘴を有するものをはしぶとからすといひ、細いのをはしぼそからすといふ。



第二十四圖 カットと便化 中田 満雄

1. 飛行機

ガソリン發動機よつて推進機及び翼を動かし空中を飛行する。1903年米國ライト兄弟によつて陸上最初の飛行が行はれてより急速な發達を遂げ、現在は各國共其製作航空兩技術に長足の進歩を見た。單葉、複葉、水上、旅客、軍用等構造や使用目的によつて多くの種類がある。

2. 手袋

革、毛絲、布等にてつくる。防寒用あり裝飾用あり、男子用、女子用種々ある。その使用目的によつて素地、作り方、裝飾を考へる。ここに示したものは婦人用のものである。

3. はと Columba livia intermedia

鳩 鳩類  
種類が頗る多い。かはらばと、あをばと、からすばと、しろこばと、どばと(いへばと)、べにはと、きんばと、きじばと、ちようせんばと、かんむりばと等がある。傳書鳩はどばとの一變種である。(卷三第二十六圖参照)

4. いぬ Canis familiaris

犬 食肉類 犬科  
犬は古代から狩獵や家畜の護衛等に用ひられたもので、種類は産地により日本犬と洋犬とに分ち、用途により獵犬、愛玩犬、警察犬、軍用犬、勞役犬の六種に分つ。(卷三第十八圖犬参照)

5. あげはてふ Papilio xuthus

鳳蝶 鱗翅類  
大形の美しい蝶で、體は緑黄色をなし、背面に黒色縦條が走り翅は淡黄綠色若くは暗黄(雌)である。四月中旬頃出現し樺太より台灣に互り分布してゐる。本圖はこの蝶を便化したもの。

6. 西洋梨子 Pirus communis 薔薇科

歐洲原産の落葉喬木で果實は倒卵形の漿果である。食用として最も廣く栽培さる。(本卷17頁梨と薔薇を参照)

7. つばき Thea japonica

椿 山茶科  
常緑の喬木で觀賞用栽培せられ品種が多く、

早春より開花する。(本卷30頁参照)

8. ぶどう Vitis vinifera

葡萄 葡萄科  
西部アジアの原産、卷鬚により他物に卷絡して成長する藤本である。果實は食用とし、又酒を醸す。變種頗る多い。(本卷第十七圖参照)

9. にほとり Gallus

鶏 鶉類  
鶏は印度馬來半島の原産で、同地には叢林中に自生する。これを野鶏といふ。種類相當多い。しやもは鬮鶏に使用され、ちやばは愛玩用として飼育され、ミノルカ、レグホン、ブラマ、コーチン及びこれ等の變種は採卵肉用として珍重される。長尾鶏は我國土佐の特産である。雄は體大きく色美しい。

10. しか Sika nippon

鹿 有蹄類  
一名にほんじかといふ。角は毎年二月頃に脱落し四月頃に新生する。二年目より角を生じ、五年目に一又を加へ第六第七兩年は二又、第八年に三又となる。北海道より本州全土、九州朝鮮及び東北支那に産する。

11. 作家小傳

中田満雄氏  
明治三十八年十二月二十六日岐阜縣益田郡萩原町に生る。昭和六年東京美術學校圖案科卒業帝國工藝會編輯部に編輯に關係され、更に東洋英和女學校クラブにて工藝(染、彫、皮)の教鞭をとられる。

研究趣味として日本畫は渡邊香涯氏に、洋畫を南蕪造氏に十年來師事せられ光風會展には連続出品し、現在同會會女であり又六色會會員でもある。昭和十一年の春、第一回新帝展に「三多紋漆モザイク衝立」を出品せられ、昭和十二年の秋第一回文展に「天授百録文衝立」を出品せられ、昭和十三年第二回文展に漆モザイク壁面裝飾「狩」昭和十四年第三回文展「漆黒豹圖衝立」を出品せられた。

〔住所〕 東京市淀橋區百人町二ノ九〇

第二十五圖 紋所とステンシル

1. 紋所の起原

紋所は大體、源平時代から始まつたが、公家と武家と異なる。公家の紋はもと車、衣服の裝飾から來たので、西園寺家が巴の文様を車の飾に、久我家が龍膽繻の文様を衣服に用ゐたのが後に各兩家の紋となつたのはこの例、武家の小旗、幕の目標から始つたので、武藏七黨の一たる兒玉黨が旗に團扇をつけ、足利氏が二引兩、新田氏が大中黒(一引兩)を幕につけたのが、各家紋となつたが佐々木氏の四目結等の如く衣服の文様から來たものもある。而して公家の家紋は武家に比して時代が早かつたが、發達は却つて武家に後れた。家紋は鎌倉初期より旗・幕の使用多くなるに従ひ漸次その用開け、末期には諸國豪族何れも用ひ、苗字の目標としてのみならず、範圍を弘め、新田氏、足利氏の如く一族黨の目標として用ひられたことあるに至り、その種類も非常に多くなつた。應仁以降、馬標綬纓、指物、柄弦等用ひられるや之等にも据ゑ一層の發達をした。江戸時代に至り、兵革全く收つてからは、家紋の用途もまた革り、主として、威儀を正すべき目的に用ひられた。更に貞享元祿頃から奢侈の風益、行はれ家紋は裝飾に用ひられる傾向となり、形態、名稱の改變行はれ、殊に市井に於ては伊達紋・加賀紋・鹿子紋・比翼紋等現はれ、面子、紋切形の玩弄品、菓子化粧品等に應用され、紋章應用の賭博すら行はれ弊害甚だしく、「家庫の崩し始や紋所」といはれるに至つた。

維新後、洋服行はれて次第に衰へたが、和服の禮裝は白襟黒紋付とて必ず紋章を据ゑる。

2. 家紋の意義

家紋は初、形狀優雅なるもの、構成鮮明で識別し易いもの等を選び、何等選定意義を有しなかつたが、後時代的思想の反映を受け、種々の意義に基づいた。牡丹(近衛)藤丸(九條、二條、一條)の如き尙美的意義のもの、刀劍、弓矢、或は勇ましい形を採つた尙武的意義のもの、那須與一が日の丸の扇を射たので子孫が日の丸の紋を用ひた如く自家の名譽、武功を残す記念的意義のものがある。

苗字に因んだものを用ひる指事的意義のものもある。これには鶴氏の鶴紋の如く直接のものと、吉野氏、花木氏の櫻紋の如く間接のものがある。その他皇室に用ひられる菊花に延年長壽の嘉瑞ありとするを始め、前途を祝福する意味から、縁起のよい鶴・龜・松・竹等を用ゐる瑞祥的意義のもの、天滿宮崇敬者の海鉢、佛教徒の卍、儒教による易の八卦、その他籠目、九字等信仰的意義のもの等がある。

3. 我國の紋所の特長

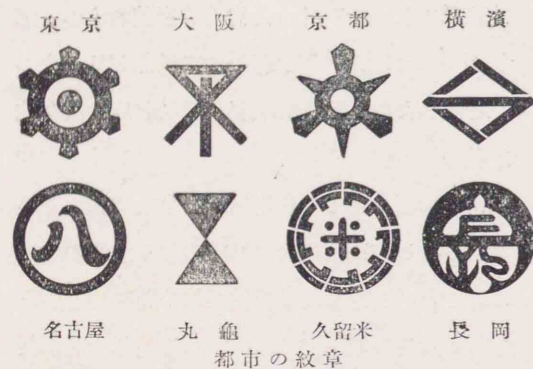
我紋所の特長については本欄に於ても述べたが、白と黒との直截明快な對比や、便化排列の優秀さ、趣味の高雅さ等實に世界に比類なき美しさで、日本的の圖案として他に誇り得るのである。

これを精神的に解釋すると我等の紋所には常に衣服や家具や什器を裝飾し、所有性を表明するといふ以外に一種の敬虔な信仰がある。即ち我等は自分の紋所に對して常に襟を正し行を省みる。嚴肅なるべき儀式に紋服をつけて參列する所以も實はそこにあるのである。



日章旗が我國家の標識であるやうに、家紋も亦我等の一家の象徴である。即ち紋所を中心にして我等は祖先を思ひ子孫を思ふ。家といふ意識を強く與へるものは紋所であり、歸するところは國家的觀念に我等を導くのである。

この頃洋服の流行、生活様式の歐米化につれて家紋を見るものが少くなつたのは遺憾なことである。



我國に於ける都市の紋章

我國に於て各都市が紋章を用ひるやうになつたのは自治制の布かれた明治二十二年以後で、其の始めてこれを用ひたのは東京であつた。これに次いで京都大阪に紋章が出来、其後全國各都市に着々と其の制定を見るに至つた。これを性質上から分類するとき三種類に分けることが出来る。

**歴史的** 其の市に關係の歴史に因んだもの。名古屋が丸に八の字、丸龜市が輪鼓の紋章を用ひるが如きは舊藩主の紋章を襲用した。

**指示的** 紋章の形象其のものが直ちに都市を示す様につくられたもの、一は直觀的で他は暗示的である。東京が東の字、京都が京の字、久留米が九個のルの字と米の字を用ひた如きは此の例である。

**合成的** 以上の二種の性質を並用して作つたもの例へば奈良市の紋章が「青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛なり」の古歌に因んで櫻を描き、その中央に奈の字を配して花蕊に擬し、又長岡市が兜城に因んで鉄形を輪廓に長の字を入れた如きはこれである。

#### ヨーロッパに於ける紋章

歐洲に於て紋章の發達したのは十二世紀以後である

當時武士は武具を以て全身を被ひ、臉甲を以て内部を包んだが故に、戰場に於て何人たるかを識別せんがために徽章の必要があつた。十字軍の遠征に當り諸國の武士が互に特殊の徽章をつけたのは其の一例である。資料としては我國と同じく天文、地理、動物、植物等で、獅子、豹、熊、鷲、鷹、日、月、星、山、河、泉、薔薇、百合、柘榴、投槍、刀劍、矢等が多く用ひられてゐる。

#### 4. ステンシルについて

合羽版、刷込版ともいはれて古くから用ひられてゐる方法である。型紙を切りぬいて紙の上にあて繪具を摺り込む方法である。版畫、圖案、染色に利用される。

**型紙** 美濃紙其他楮で造つた和紙數枚を縦横に生澁で貼合せ、なほ表裏に生澁を引いて乾かした厚紙で賣品となつてゐる。簡單なものは少し厚手の洋紙でもよい。これに下繪をかいて小刀で切りぬく。

**摺り又は霧吹き** 用紙の上へ型紙を當て、繪具をつけた刷毛をもつて軽く叩きながら摺り込む。注意すべきことは繪具が型紙の裏へはみ出さぬやうにすることである。霧吹きを應用する場合は特殊の例で嚴密な意味ではステンシルではないが、型紙の上から霧を吹きかけるのである。何色も色を使ふ場合は何枚もの型紙を要するわけである。

**刷毛** 摺込に使ふ刷毛は、古筆の先を切つたものでもよい。大きい面積には平刷毛を使ふ。色數だけの刷毛を用意する方がよい。

## 第二十六圖 當嵌模様 杉浦非水

本課に於て圖案の資料とされてゐるものは人為的資料としては幾何形、自然資料としては植物と動物各種である。

その中、幾何的資料としては大小の圓弧と圓とが用ひられ、又植物資料では百日草、花瓶に挿された草花、動物資料としては飛魚、おかめいんこ、蜻蛉が用ひられてゐる。

次にこれ等の資料について解説を述べる。

### 1. ひやくにちさう Zinnia elegans

#### 百日草 菊科

舶來の一年生草本で各地に栽培される。莖の高さは七十種より一米に及ぶ。葉は三角形で葉柄を缺き對生する夏の日葉腋より花莖を出し毎枝上に一箇の頭狀花を開く。百日草とは開花の時期が長い故に名づけられたものである。



百日草

### 2. とびうを Cyprinus agoo

#### 飛魚 飛魚科

この魚の胸鰭は頗る長く水上を滑走するに用ひられる。體長は三十種に及び、體の上面は鉛青色で下方は白色である。南日本産である。

### 3. おかめいんこ

#### Calopsitta novae-nollandiae 鸚鵡科

雄は毛冠及び顔部が黄色で、頬に赤色の大斑がある。頬の後方兩覆及び次列風切の外側は白色、初列風切及び尾の側部は黒色で體の他の部分は灰色である。雌は頸部の黄色部灰色で上下の尾筒及び側尾の裏面には黄色の横斑がある。體は三十種に達する。原産は濠洲である。

### 4. とんぼ

#### 蜻蛉 蜻蛉科

とんぼの漢名には蜻蛉の外、蜻蜓、蜻蛉、青

亭、虹蜉、負勞、諸乘、故黎、胡蠶等と書く、古名をあきつ、ゑむぼといひ一名あきつむし、かきろひ、かけろひ、やんま等と稱する。その種類は頗る多い。この圖案にしてあるのは下記二種である。

#### なかはむろとんぼ Euphaea formosa

雌雄大差がない前翅は透明で後翅に著しい色彩を裝ふ。臺灣特有の種類で池沼附近に産する。

#### いとんぼ Copea

ぐんばいとんぼともよきいとんぼとある前者の雄は中後の兩肢脛節が肥大して白色軍配狀をなす雌の肢は軍配狀に肥大しない。東京井之頭公園の池畔に多く發生する。後者は大形で腹部が青黒く金屬光澤がある。何れも各地に産するが前者は五月頃に發生するが後者は七月頃である。

### 5. 作家小傳

#### 杉浦非水氏

明治九年五月松山市松前町に生れ、本名を朝武と呼び非水はその號である。初め川端玉章氏に就いて日本畫を學び、後黒田清輝氏に洋畫の技を習はれた。更に東京美術學校に入つて明治三十四年日本畫科を卒業された。

卒業後約一ケ年程島根縣濱田中學校に教鞭を執り、間もなく三越呉服店に入つて圖案部主任となり、服飾其の他の圖案をはじめ、三越カタログ及び同店のポスター等に麗筆を揮はれた。

独自の圖案様式を創案し、「非水式」と誰いふとなく一つの名稱さへも生じ、圖案界に一新紀元を劃した。明治四十五年に中澤弘光、山本森之助、三宅克己等と光風會を興し、純美術方面にも活躍、大正十一年歐洲に遊び十三年歸朝。

大正十四年七人社なる圖案研究團體を組織して之れを主宰し、十五年東京三越に於て第一回創作ポスター展覽會を開催し、この種の展覽會の嚆矢を作つた。著書に「非水圖案集」「非水の圖案」「非水創作圖案集」「非水花鳥圖案集」、渡邊素舟との共著「圖案の美學」等がある。又同氏と共編になる「實用圖案資料大成」十冊が作られてゐる。

現に光風會會員、多摩帝國美術學校長として後進者の指導教養に専念せられ、令夫人翠子女史は閑秀歌人として夙に世に知られてゐる。

〔住所〕 東京市澁谷區伊達町一七



第二十七圖 椿  
第二十八圖 椿

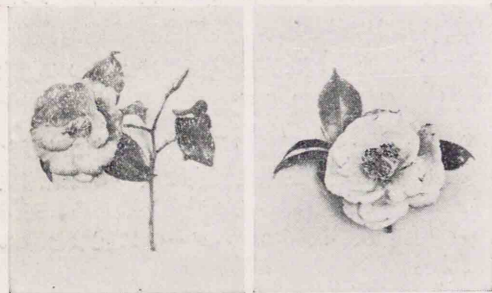
1. つばき *Thea japonica*

椿 山茶科

暖地では山地に自生するが多く庭園に培養される常緑の喬木で高さ十米にも及ぶものがある。葉は長楕圓形で先端が尖り光澤があり厚く縁邊に鋸齒を有してゐる。早春より開花し、果實は圓形で秋末に至ると蒴は裂開して淡墨色の種子二三個を出す。花の雄蕊は花糸が合着して單體をなす故に單體雄蕊といふ。木材は袂物細工物の料となり、種子よりは油を搾る。これを椿油といひ、頭髮用、食用、燈用、防銹用、朱肉用とする。

觀賞用栽培變種は頗る多く、その主なるものは次の如くである。

羽衣 鶉色、蓮花咲、八重大輪 唐錦 桃色地、紅砂子、絞り、八重大輪 錦重 濃紅色に白の大斑を散在、半八重大輪 花富貴 濃桃色又は淡紅色、



錦重 花富貴

雄大な大輪 薩波 移り白地紅大小絞り、中盛上大輪 春日野 本紅地、白星入、八重大輪 緋縮緬 緋色、八重抱咲、大輪 紫椿 薄紫千重の中輪 太瓦冠者 桃色の一重、小輪 草紙洗 薄墨地小絞、八重、大輪 雪見草 白一重の大輪 白拍子 白牡丹咲大輪、早咲 初瀬山 薄色地に紅六紋、八重大輪

椿の花の缺點は萼の所から脱落しやすい點にある。故に古來日本人は早く首が落ちると言つて忌み嫌つたものであるが、西洋ではこの花のもゆるが如き濃艶さを賞翫する。

2. 青磁

還元焼成の鐵質綠釉の焙器乃至磁器。即ち原

その一 小泉勝爾  
その二

料が窯熱の増進に伴ひ純白化せんとする途上、同時に酸化焼成より還元焼成に向つた結果、翡色を呈するに至つたものである。この過程が一步進んで愈、白色化せんとするのが青白磁であるが、青磁の一種と見られる。

支那青磁 唐代の越州窯に發し、吳越の秘色窯となり、宋代全盛を極めた。名器を出した河南の汝窯、開封の北宋官窯、南宗の修内司官窯等と共に處州の龍泉窯は民窯として最も開え、福建の舟山青磁安溪青磁・北方青磁等の地方窯もある。明代から景德鎮窯が主窯で清代には雍正官窯の南京青磁等を生じた。

高麗青磁 朝鮮では高麗時代に早く宋の青磁方を傳へて、急速に進歩し、仁宗初年には「高麗圖經」に記してある如く「制作工巧、色澤尤佳」の絶頂に達した事は、遺品の宋窯を凌ぐもの多く、形體文様の多彩なるを見ても明で、更に青磁象嵌の如き、創意に出でた絶品をも出した。

日本青磁 弘仁磁器の源流は唐窯にあつて秘色が傳り、續て宋麗の影響があつた。近世京都の木米一派が中心となつて攝津の三田窯・紀州の鈴丸焼等を出した。他に銅質の土燒青地釉が上野窯、瀬戸、常滑等に見られる。

3. 作家小傳

小泉勝爾氏

明治十六年八月東京府下北品川に生れ、明治四十年東京美術學校日本畫科を卒業された。

大正五年母校東京美術學校の助教授に任ぜられ、のち教授に進み今日に至る。文展無鑑査、日本畫院同人である。

大正六年第十一回文展に「彩園雨後」を出品せられ、其の後帝展には「朝のうらほひ」、「霜枯るる頃」、「後園閑日」、「鶉」、「山湖殘春」、「潮騒」、「雨霽れの朝」等を出品せられたが、昭和六年第十二回帝展には「濤聲」を出品して遂に特選となられ、同年帝國美術院推薦の榮を得られた。尙ほ昭和七年第十三回帝展に無鑑査として「静夜」を出品せられ、昭和九年第十五回帝展には審査員に擧げられた。土岡泉氏と共同執筆編纂「鳥類寫生圖譜」第一期十二輯、第二期十二輯を公刊せられた。

〔住所〕 東京市澁橋區上落合町一の四二五

第二十九圖 連續模様 その一

1. 圖案の描寫技法

圖案は其の種類によつて、器畫的の描寫によるものと、自在畫的の描法によるものとがある。又描線によるものと着色を主とするものとがある。本課は單色圖案であるが、一般の場合を考へ着色圖案の技法について述べて置くこととする。

圖案の描寫は稀には透明描法によることがあるがこれは特殊の場合で、普通不透明描法によることを本體とする。

下圖 便化と排列が出来れば、これを下圖の紙へ淨寫する。下圖は薄い洋紙か日本紙か又はパラフィン紙に、鉛筆或は毛筆を以て線書するのである。

地塗 下圖とは別に他の畫用紙上に圖案の輪廓を定め、この中に地塗をする。地塗には不透明繪具を用ひる。その時色が輪廓外へはみ出す虞があるから、丈夫な日本紙を淡いゴム糊又は生紙で貼りつけ、其の上から刷毛で繪具を塗り、乾いてから紙を剝がすとよい。

轉寫 地塗の上へ下圖を轉寫する。即ち畫用紙上の地塗の箇所へ下圖の薄紙を載せ、下圖の線を辿つて鉛筆の先を強く押しつけ地塗の上へ下圖のあとをつける。轉寫の方法には其の他いろいろある。

着色 地塗の上へ轉寫された下圖に着色を施す。この場合、繪具は必ず不透明でなくてはならぬ。不透明繪具はグアッシュ、泥繪具、ポスターカラー等である。泥繪具は粉末状であるからこれを十分膠の水で練り合せて使用する。

具入りの繪具 水彩繪具は元來が透明繪具であるからこれをそのまま使用しては結果がよくない。それで白だけは圖案用の繪具を用ひ、こ

れを他のすべての水彩各色に混ぜ合せて使用するのがよい。これを具入りの繪具といふ。

白は又胡粉や亞鉛華を使つてもよい。これを十分すりつぶし膠水を加へて練り合せ、他の繪具と混ぜ合せる。膠水は三千本膠又はゼラチン膠を湯煎してつくる。濃過ぎれば筆の走りが悪いし、淡過ぎれば繪の具がはげる。自然經驗に俟つより外はない。

圖案描寫についての詳細は理論篇を参照せられたい。(理論篇 77 頁)

2. 構成及資料の敷衍

卍 萬字と呼ぶ。もと文様、左卍、右卍の二種がある。卍は太陽の象徴とも水の表現とも稱せられる。佛の胸前にあつて吉祥萬徳の相ともいはれる。我國では神社佛閣のシムボルとして使用する。獨逸のナチス黨の標章としても有名である。

入替模様 Counter change 大概幾何學的形象を基として出來たもので模様の外形と地とは表裏の關係を示して全く同一であるか又は互に近似した形よりなるもの、交互に色を塗り替へたものである。

片身替模様 Inter Change 中央に一線を劃してその一方を陽畫に畫き、一方を陰畫にかいたもの。圖様の單調さを破る方法として便利である。

かぶとむし *Xylotrupes dichotomus*

甲蟲 鞘翅類

一名さいかちむしといふ。幼蟲は塵地下に棲息する大ぢむしで成蟲は樹液に集まる。

さぼてん *Opuntia tuna*

仙人掌 仙人掌科

西印度原産の多年生肉質草本である。莖の高さ六米に達するものがある。全面に叢生する針は葉の變形物である。



第三十圖 連續模様 その二 山形 駒太郎

本課の連續模様中にある資料につき次に解説する。

1. 國旗

國旗は國家學上より説けば國權の表彰である又社會學上より説けば國民の榮冠である。だから國家觀念及社會觀念が十分に發達しない間は眞の國旗は發生しない。

2. 日章旗

日章旗は日本帝國の國旗である。日章旗は精神的にいへば日本建國以來存するが、法規の點からいへば、明治三年一月廿七日の太政官布告による。

日章旗は白地に赤の日の丸であるが、克く日本の國體を象徴してゐる。全面平和の萬民に光輝赫耀たる皇室が君臨しまして正しく一君萬民の全表である。尙又恭しく惟みるに中心の玉體は長くも天照皇太神の御尊影であり、同時に始なく終なき萬世一系の皇室と十善至聖の帝位を體現してゐる。尙、中心の赤色は日本國民の熱誠である。國民盡忠報國の念は此の赤玉中に充積し、一旦緩急あれば、忽ち出でて義勇公に奉ずる。而して日本帝國は元來平和を原則とする國であるから赤玉を包擁するに純白の平和色を以つてする。

3. 外國旗

現代如何なる國も國旗を有する。尙國祭上未だ眞の國家を認めてゐない國も國旗を有し、又帝國とか獨立國とか稱し得ない國も國旗を有す故に國旗の類は世界に七十を越えてゐる。次に主なる國旗を掲げる。

英國 英國の旗はユニオンジャックの旗と稱

して、イングランドのセントジョージの旗、スコットランドのセントアンドルーの旗及びアイルランドのセントパトリックの旗より成立した聯合旗である。

青地に普通の赤十字一個を中心とし、其の外に白赤二個の對角十字を置く。三箇の十字の置き工合や寸法等は、隨分込合つてをり、何れも政治外交種々の理由から出るのである。

佛國 佛國の旗は普通にトリコロールといふ三色旗である。三色の比例は青三十、白三十三、赤三十七、合せて百になる。曾ては幅平等の三三、三としたが、夫では端の赤が風にあふれて短かく見えるから、改めたのである。

獨國 ドイツの旗はドイツ共和國のヴァイマル憲法及び之に基づく、法律に従へば、黒赤金(又は黄)の順序に並ぶ三横線であるが、此の憲法は一九三三年ヒトラーが總理大臣となつて以來、其の影を潜め、殊に一九三三年三月廿四日の政府授權法制定以來は殆んど拋棄された。殊に國旗については、之より少し先に、ヒンデンブルグが大統領令を以てドイツ國旗は爾今黒白赤の順序に並ぶ三横線なりといつたから、今は黒・白・赤旗を國旗と見るべきである。此の外にナチスのハーゲンクロイツの旗が國旗の取扱を受け、官衙は二旗を掲げてゐる。

伊國 イタリアの旗は緑白赤の三縦線である。緑は旗竿に接し、白は中、赤は端で、大體佛國旗に似てゐる。此の旗はナポレオン下の伊太利軍隊が用ひたのを、一七九六年認めたのである。佛の青に對して、緑なのはナポレオンが綠色を好んだからである。

露國 ロシアは今ソヴェートロシアといひ或は單に蘇聯邦といふ人がある。一般にはまだ露國といふ人が多い。帝政亡びた共產勞農國となつた時、國旗を改め、赤地に黄色の小鎚小鎌を描いて、勞働と農業とを象徴することにした。併し赤旗の如く見える、國旗學上よい旗でない。

滿洲國 滿洲國の旗は大同二年二月五日、滿洲國政府の閣議で定まり、三月一日發表した。滿地黄の左隅上部に、赤青白黒の順序で、四横線を置いてある。此國旗の意義に關しては、種種説明はあるが何れも充分でなく、國旗學上よりも、建國の關係よりも良好でない。

支那 支那の國旗は青天白日滿地紅である。赤地の左隅上部に、青天白日がある。青天は四角の青色で、其の中央に白日がある。日の丸ではなくて十二の光角ある金米糖形の白日である。一九二八年十二月十七日に出來たのである。

米國 米國の旗は同國が獨立後、暫くたつた後出來たので、十三個の赤白横線と、四十八個の白星から成立する。星條旗とも稱する。十三個の横線はアメリカ殖民地の民族が、英國に對抗して義軍をあげた時の數を示し、四十八個の白星は現在合衆國を組成する州の數を示すのである。最初はその數は線の數と等しく十三個であつたが、漸次増加して最後にアリゾナ州とニューメキシコ州が加つて四十八個となつた。

4. 國旗の取扱について

國旗は其の國家及び其の主權を象徴するものであるから國家、主權に對すると同じ嚴肅敬虔な態度を以てこれを取扱はねばならぬ。如何なる國の國旗と雖もこれに敬意を表すべく、苟も其の尊嚴を犯すが如き行爲があつてはならない。自國旗に對しても同様である。由來我國民は日章旗を以て神聖なるものとし、國家的の祝祭

にはこれを軒頭に掲げて敬意を表することにしてゐる。

其の樹立に關しては往々形式の區々たるものがあるが、正式の樹て方は一本の場合はこれを眞直(地面に垂直)に樹立し、二本の場合は垂直にして且つ並行にこれを樹立するのである。従つて旗竿を傾斜し又は組合せることは略式又は異式と思はねばならない。

國旗はこれを毀損してはいけぬ。日の丸は固より白地と雖もこれをよごすことのないやうに注意する。又國旗はこれを裝飾の意味に用ふるのによくないのである。次に日章旗は其の寸法に一定の割合がある。次の通りである。

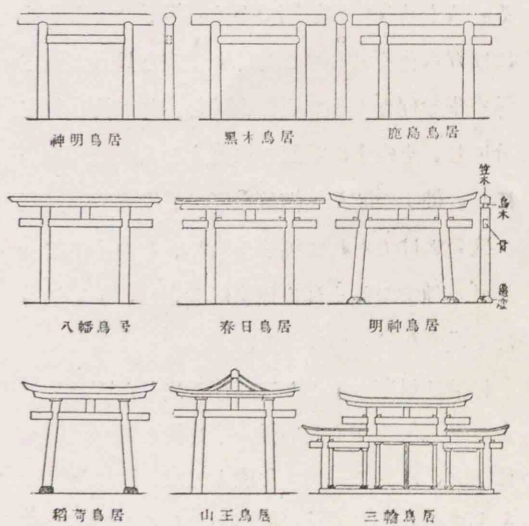
旗の横と縦の割合は三と二の比。

日章の徑は縦の五分の三。

日章の中心は旗面の中心より竿の方によること縦幅の百分の一・五である。

5. 鳥居

華表とも書く。我國固有の神代建築に於ける門の遺風といはれてゐる。現時は神々の門として必ず之を設ける。1 神明鳥居、2 黒木鳥居、3 鹿鳥居、4 八幡鳥居、5 春日鳥居、6 明神鳥居、7 稻荷鳥居、8 山王鳥居、9 三輪鳥居等の種類がある。次の圖は其の略圖である。



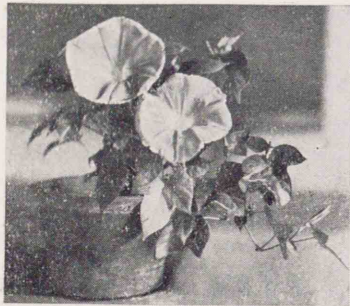


## 6. あさがお *Ipomoea nil*

牽牛 朝顔 旋花科

観賞用として栽培する一年生の纏繞性草本である。變種が頗る多いが、通常其の葉は三裂して五生し、莖と共に毛茸を有する。夏より秋にわたつて普通漏斗状の合瓣花を莖の上方葉腋上に着生し早朝開花し日光をうけて凋ぶ。

**栽培法** 朝顔を栽培する最も適当な用土は塵芥の流入する泥渠中の揚げ土や塵捨場の塵芥土を、春によく乾かしこれを篩にかけて竹片、小石などを除き、その土の中に疎い河砂を適量に混ぜ、一二度下肥を灌いで能く煉り合せ、



朝顔

日光にあて乾燥せしめて雨の當らぬ所へ貯へ置く。播種は四月中旬より六月初旬の頃まではいつでもよいが、早いよりは遅い方が良結果を得る。八十八夜後が適期である。播種せんとするには五六合程入るべき瓦鉢の底穴を見殺で塞ぎ鉢の半分程まで小豆大の土砂を入れ水抜きを充分にし、その上に前記の培養土を入れ土面を平にし、種子の間を三粒位宛隔て、指先で一糎程の穴をあけてこれに種子を入れ、その上に細い川砂を種子のかくれる程度に散布し、水を如露にて灌ぎかけるのである。

移植は貝割の中より二三葉を出した頃日和のよい夕方を傷めない様一本宛抜きとつて他へ移植し、直ちに一回水を灌ぎ二三日間は日除けを要する。苗が充分に根づいた時その土面を淺

く掘つて少量の肥料を入れる。これより一日おき位に尿二分水八分位の割に又は油粕のよく腐敗せしめたるものをうすめて與へる。莖が十五六糎許になつた時心芽を摘み本莖一本を成長せしめ、その成長するに従ひ苔を一つ置きに摘みとるのである。この頃より前よりは少し肥料を濃くして二日隔に灌ぎ枝芽は勉めて除去し支注を與へ莖を纏はしめるのである。

## 7. 作家小傳

山形 駒太郎氏

明治十九年兵庫縣神戸市に生れ、白馬會研究所に入つて洋畫の技を練られた。

明治四十二年第三回文展に「晩秋」を出品昭和三年第九回帝展第四部美術工藝に出品の「起重機(壁掛)」は特選となり、昭和四年第十回帝展第四部に無鑑査として「魚市場(蠟染)」を出して再び特選となられた。又昭和五年第十一回帝展に無鑑査として「鐵工場(蠟染)」、昭和八年第十四回帝展に「瀧流を測る」を出し、この年推薦の榮譽を得られた。

昭和九年第十五回帝展に「静物壁掛」昭和十一年文展招待展に「近江八景染色屏風」

昭和十二年第一回文展「染色蠟染五月の田園四田屏風」

昭和十三年第二回文展「染色富士の山屏風」

現に光風會會員で又日本工藝美術會の會員である。昭和十四年には文展審査員に任ぜられた。

〔住所〕 東京市世田谷區世田谷一の五九三

## 第三十一圖 招待券その他 越田喜作

### 1. さくら *Prunus*

櫻 薔薇科

さくらは百花の代表者としてこれを花の王といひ、太古から「さくら」を唯花と呼び、又木の花とよんだ。又日本を代表する花としてこれ



さくら

を國花といふ。「さくら」は萬葉集と和名抄とは「佐久良」と訓み、萬葉集には、「佐具良」又「作樂」とも見え、日本書紀には「佐區羅」と書いてゐる。

**さくらに関する文學** 佐久間象山が櫻賦にも皇國の名華と稱し、松平樂翁の花月草紙にも、「櫻の花は、我國固有のもので、花といへば異木にまぎれることなし」といつた。中にも山櫻はその色が清淡で、花の形ゆたけくて、香氣の濃厚でないのも懐しく、春風一たび梢を渡れば萬朶の花一時に開き、また見飽かぬ程に潔きよく散つて、花の吹雪を翻し花の雨を濺ぐ、その散り方の潔いのは最も我が國民の性格に適合してゐるためか、本居宣長はこれを大和心に比べて「敷島の大和心を人間はば、朝日ににほふ山さくら花」

と詠み、俗謡にも「花は櫻木人は武士」と歌つ

た。かくて櫻花は百花の王として、又大和心の表徴として國民に愛慕せられ、文學に入り繪畫に描かれ、花といへば櫻を表はすことゝなつた。

**山櫻** 山地に自生する落葉喬木で幹の高さは十米にも達するものがある。淡紅白色の小花を葉と共に開く、その花梗は平滑で毛がないのが特徴である。この花の名所は吉野山、小金井など最もよく知られてゐる。

**染井吉野** 近來各地に栽培される種類で、四月初旬葉に先立て艶麗なる花を密生する。この花は花梗に毛茸を密生するので、前種とよく區別される。最初染井の植木屋より賣出したのでこの名がある。

**八重櫻** ぼたんざくらともいふ。庭園に培養される大形の重瓣花で花梗に毛を有しない。栽培變種が頗る多く、花の色に淡紅色・紅色・淡黄色(うこんざくら)等ある。ふげんざうといふこの櫻の一種は、花の色が稍々紅色で櫻花中最も濃艶である。變種は頗る多い。

**彼岸櫻** 花の色は普通淡紅色を帯び、中には紅彼岸などとして濃紅色のものもある。春の彼岸頃に開花する故この名がある。花梗に毛がある。

**枝垂櫻** ひがん櫻の一變種である。樹枝が下垂するのを特徴とする。花はひがん櫻よりも小さく色は極めて淡紅である。樹容、花形、花色等誠に優雅である。

其の他東北地方には丁字櫻、深山櫻が自生し、千島櫻は千島に、豆櫻は富士山に緋寒櫻は臺灣の阿里山に自生する。

### 2. 太陽

太陽系の主體である。生物に直接に熱と光と



を與へ間接に食物を供給する恒星である。太陽の距離・運動及び状態の研究は天文学の各部に互り重要な地位を占めてゐる。

**距離及び大きさ** 平均距離は、三千八百七萬里、直徑三十五萬五千里、地球の百九倍で表面積は地球の一萬二千倍、體積は百三十萬倍である。龐大なガス球で、あらゆる元素を含んでゐる。表面の温度は約六千度、中心は三千萬度と推定せられてゐる。光度は負二六・七等級である。地球を約六萬米燭の明るさで照し、また一種平方毎に毎分時二カロリー弱の熱量を送つてゐる。自轉は全體で一様でなく、赤道部を約二十五日で、兩極へのびて遂に三十日に至るのである。

### 3. 富士山

我國內地の最高峰である。我國最高の火山。富士火山帯の盟主、高さ 3776.44 米。

**名稱** 富士に關する最初の文献・常陸風土記には福慈・萬葉集には不盡、不自、布自、有自書紀には不盡川と見え、續紀には初めて富士を作る、爾來官府には悉く富士を踏襲する所より見れば、平安朝初期にこの文字に公定せられたらしい。

**國立公園** 最近隣接の箱根山を含む 69.100 町歩の面積が富士箱根國立公園に指定せられた。

**登山** 富士登山は推古天皇六年秋九月聖德太子神馬によりて登山せられた傳説に初まる。近年一般登山者増加して老若男女を問はず年數萬人に達する。

大宮口(頂上まで二〇、一九軒) 御殿場口(二〇、二九軒) 須走口(一三、六四軒) 吉田口(一八、二四軒) 精進口(二十一軒餘)の五つがある。

### 4. 青海波

缺圓を重ねて波型を描いた模様の名である。我國の十錢銅貨の裏面に青海波の模様がある。屋根の棟瓦の小口を青海波に並列させることもある。

### 5. 庭球 Lawn tennis

ローンテニス 庭球の起源地は不明である。

一番早く英國で發達し、第十七世紀から行はれてゐた。

**世界的主要庭球大會** デイヴィスカップ戦、一九〇〇年にデイヴィスが英米對抗戦にカップを寄贈してから始まる。その後参加が多くなり近年では二十數箇國参加する。

**ウィンブルド大會** 英國に行はれ全世界選手權大會である。毎日二萬人の觀集があつまつて十日間ある。

**全日本大會** 十四年前に始まる。一九三五年チエツコのメンツェル・ヘヒト兩外人が参加したが選手權は日本の山岸が得た。

**ボール** ボールはゴム球とし、直徑 6.515 糎乃至 6.67 糎、圓周 20.468 糎乃至 20.944 糎、これに硬球軟球の二種がある。

**ネット** ポストサイドラインの中央に張り、その延長はポストの外側より他のポストの外側まで 12.19 米乃至 12.80 米、高さは 1.06 米である。ネットの下端は地面に接觸し、兩端はポストに密着して、網目は 3.03 糎以下である。ネットの綱絲は黒色で上端に幅 6.0 糎の白布を附け、張るにワイヤロープを用ひるを原則とする。

### 6. リーラ・バルバリーナ Lira braborina

リーラは古代ギリシヤやユダヤで盛んに用ひられた彈弦樂器で、古代洋樂器中の代表的のものである。すでにエジプトにもこの系統に屬するものがあつた。その頃のものは膝の上にのせて弾く小形のものであつたが巨大なリーラは十七世紀にフローレンスのバプト、ドニによつて發明された。用弓絃樂器である。昔時のリーラは現今のハーブ Harfe に似てゐるといふ。

### 7. 作家小傳

越田喜朔氏

明治四十二年三月、金澤市廣坂通りに生れ、昭和七年東京美術學校圖案科卒業。昭和八年五月花王石鹼本舗長瀬商會宣傳部に就任し目下同商會大連支店に勤務せらる。新進商業美術の研究圖案家である。

〔住所〕 大連市山城町二、第一アパート

## 中學維新圖畫の理論と實際

(實際篇)

### 特價

卷一 金壹圓  
卷二 金壹圓  
卷三 金壹圓

◎

美 育 振

岩 田 僊 太 郎

東京市下谷區櫻木町二番地

三協印刷株式會社

東京市品川區大崎本町三ノ五八二

半七寫眞製版印刷所

東京市京橋區銀座西二ノ三

晚 成 處

振替口座東京三三一七三番

東京市下谷區櫻木町二番地

目 黒 書 店

振替口座東京二八〇九番

東京市神田區駿河臺三丁目

昭和十四年十二月二日印 刷  
昭和十四年十二月五日發 行  
昭和十六年四月三十日再版發行

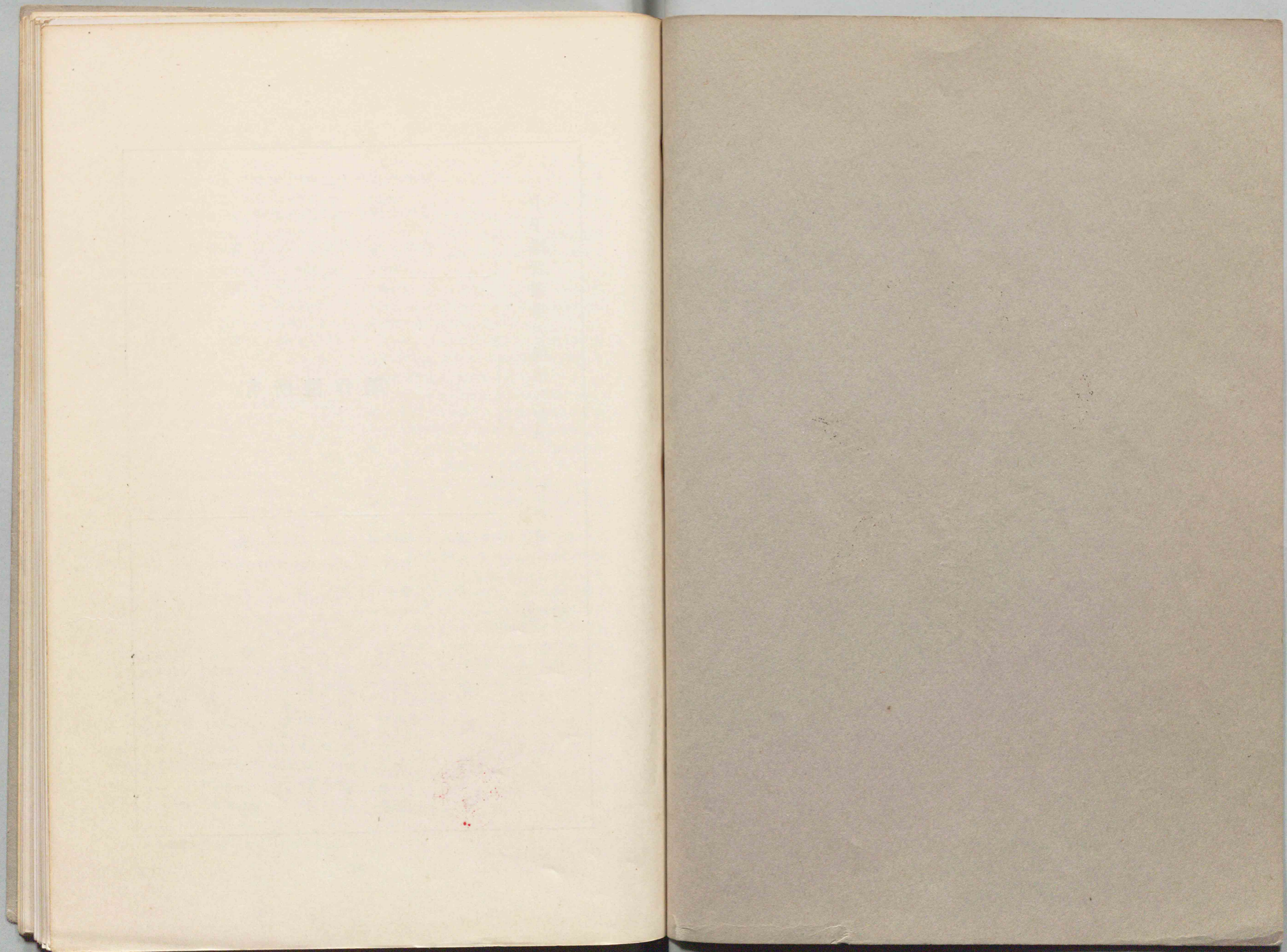
(著作權所有)

著 作 者	發 行 兼 者	印 刷 所	印 刷 所	發 行 所	發 賣 所
-------	---------	-------	-------	-------	-------

美 育 振	岩 田 僊 太 郎	三協印刷株式會社	三協印刷株式會社	晚 成 處	目 黒 書 店
	東京市下谷區櫻木町二番地	東京市品川區大崎本町三ノ五八二	東京市京橋區銀座西二ノ三	振替口座東京三三一七三番 東京市下谷區櫻木町二番地	振替口座東京二八〇九番 東京市神田區駿河臺三丁目











Y.S.